図１　西求女塚古墳の位置と周辺の遺跡（1:25000）

番号	遺跡名	時期	遺跡の種類	番号	遺跡名	時期	遺跡の種類
1	西求女塚古墳	古墳時代前期	古墳	7	八幡町遺跡	中世	集落
2	大石東遺跡	古墳時代	集落	8	伯母野山遺跡	弥生時代中期	集落
		中世		9	十善寺古墳群	古墳時代	古墳
3	処女塚古墳	古墳時代前期	古墳	10	桜ヶ丘Ｂ地点	弥生時代中期	集落
4	篠原南町遺跡	縄文時代晩期	集落		遺跡		
		古墳時代前期		11	滝ノ奥遺跡	縄文時代早期	集落
5	篠原遺跡	縄文時代中期・晩期	集落			弥生時代中期	
		弥生時代後期				中世	経塚
6	都賀遺跡	縄文時代早期	集落	12	桜ヶ丘遺跡	弥生時代中期	銅鐸出土地
		弥生時代中期・後期					

はじめに

西求女塚古墳は昨年度、埋葬施設の調査を実施したところ地震による地滑りによって大きく崩れた竪穴式石室から舶載の三角縁神獣鏡7面を含む12面分の鏡をはじめ、冑の部品である小札や剣・槍・刀・鉾・鏃・斧・鑿・ヤリガンナ・ヤス等の鉄製品と碧玉製紡錘車形石製品など多くの副葬品が出土しました。

また、墳頂部からは山陰地方特有の形をした土器も多数出土しています。

このように昨年度の調査結果から西求女塚古墳は古墳時代前期の有力な豪族の墓であることがわかってきました。

しかし古墳全体の規模や形は地滑りや後世の造作によってかなり改変されていることから、正確にはわかっていませんでした。

今回はこれらのことを明らかにするために、墳丘の西側と南側及び、くびれ部に調査区を設定して調査を行いました。

図2　西求女塚古墳調査地位置（1:2500）

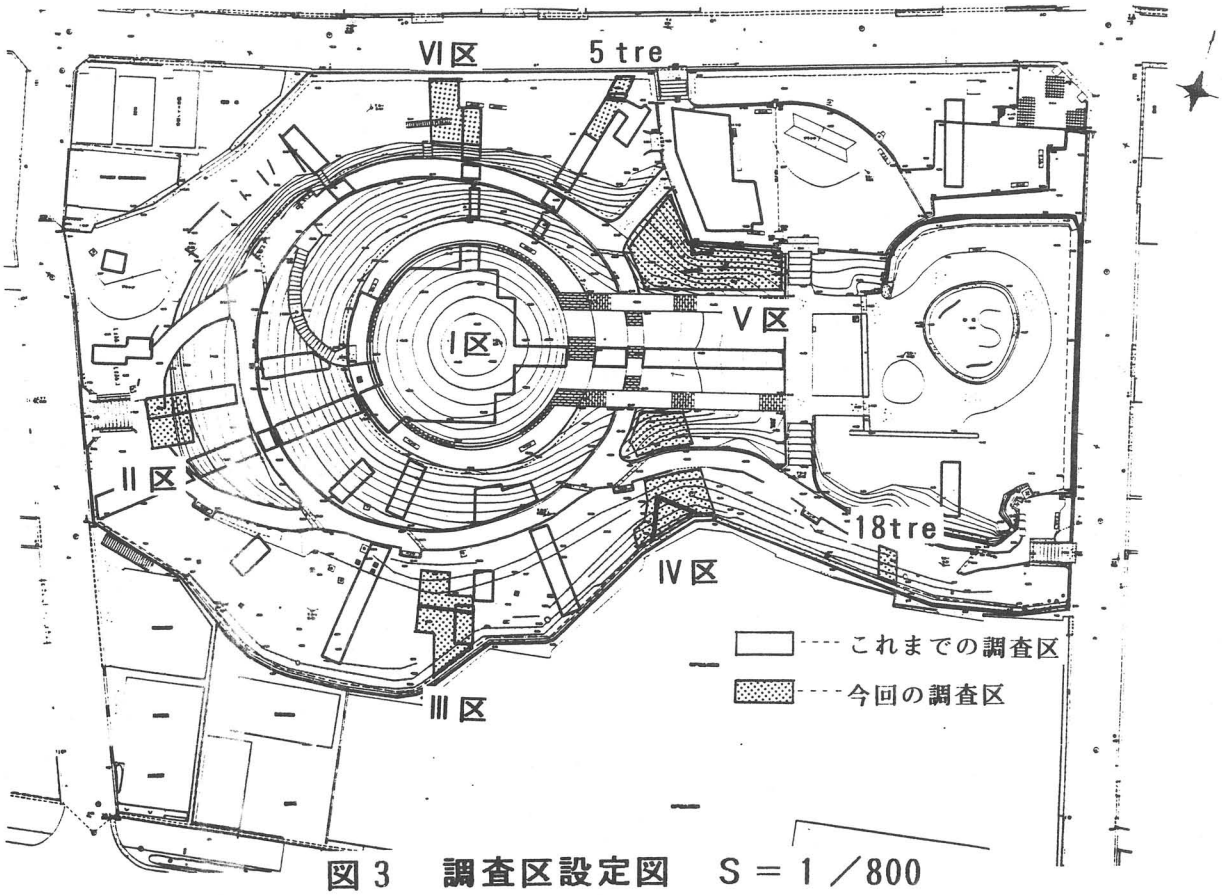


図3　調査区設定図　S＝1／800

調査概要

Ⅱ区（墳丘西側）

中世末期（16世紀後半）の水田耕作土層の上に地滑りを起こした墳丘盛土層が覆っている状況が確認されました。このことから、墳丘の地滑りを引き起こす原因となった地震は1596年に起こった「慶長の大地震」であったことが判明しました。

中世末期の水田は古墳の裾を若干削って造られていますが、墳丘を削った際に出てきたと思われる古墳の葺石に使われていた石材が集積していたところがあり、その付近が墳丘裾と考えられます。

Ⅲ区（墳丘南側）

地滑りを起こした墳丘盛土層が現地表から約2.5mあり、その下から2～3段分の、基底石を含む葺石列が、高さ40～60cmのみ残し約5mにわたって確認されました。この石列は標高6.2m付近に基盤層を切り込んで、ほぼ直線的に並べて据えられています。残っている葺石より上部は墳丘の盛土が本来存在していましたが、大地震によって地滑りを起こして崩れてしまったようです。

Ⅳ区（くびれ部南側）

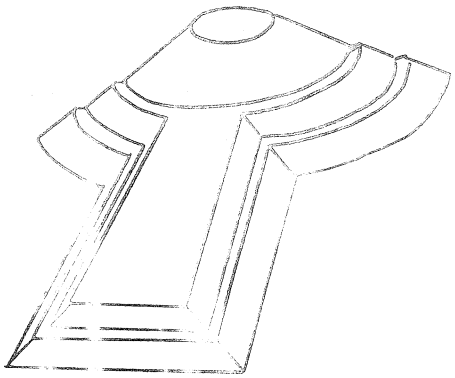
くびれ部の基底石が標高7.0m付近に約4.5mづつ計9m検出されました。くびれ部コーナーから西側の石列はほぼ直線的に続いており、Ⅲ区で検出された基底石列の方向と直交することから、西求女塚古墳の墳形はこれまで前方後円墳と考えられていましたが、実際は前方後方墳であることが判明しました。

葺石は基底部に大きな石を据え、その上に小さめの石を積んでいます。基底部から約50cmぐらいまでは急角度で積み上げられ、それより上の斜面角度は緩くなるようです。基底部の石の据え方は、前方部と後方部では違いがみられ、前方部では大きな石を横長に据えているのに対して、後方部では縦長に据えています。

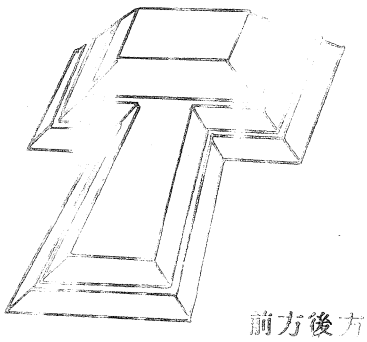
Ⅴ区（くびれ部北側）

基底石列が標高8.1mと8.7m付近で2列検出されました。このうち下段の基底石列が墳丘裾にあたると考えられ、Ⅳ区で見つかった南側くびれ部コーナーに対応する北側のくびれ部コーナーが検出されています。

この2列の石列はともに、くびれ部から前方部に向かって2～3mのところで外方向に屈曲する箇所があり、張出状の施設が存在することが判りました。しかし石列は調査区外に延びるため、形状・規模はあきらかではありません。



前方後円墳



前方後方墳

図4　古墳の形

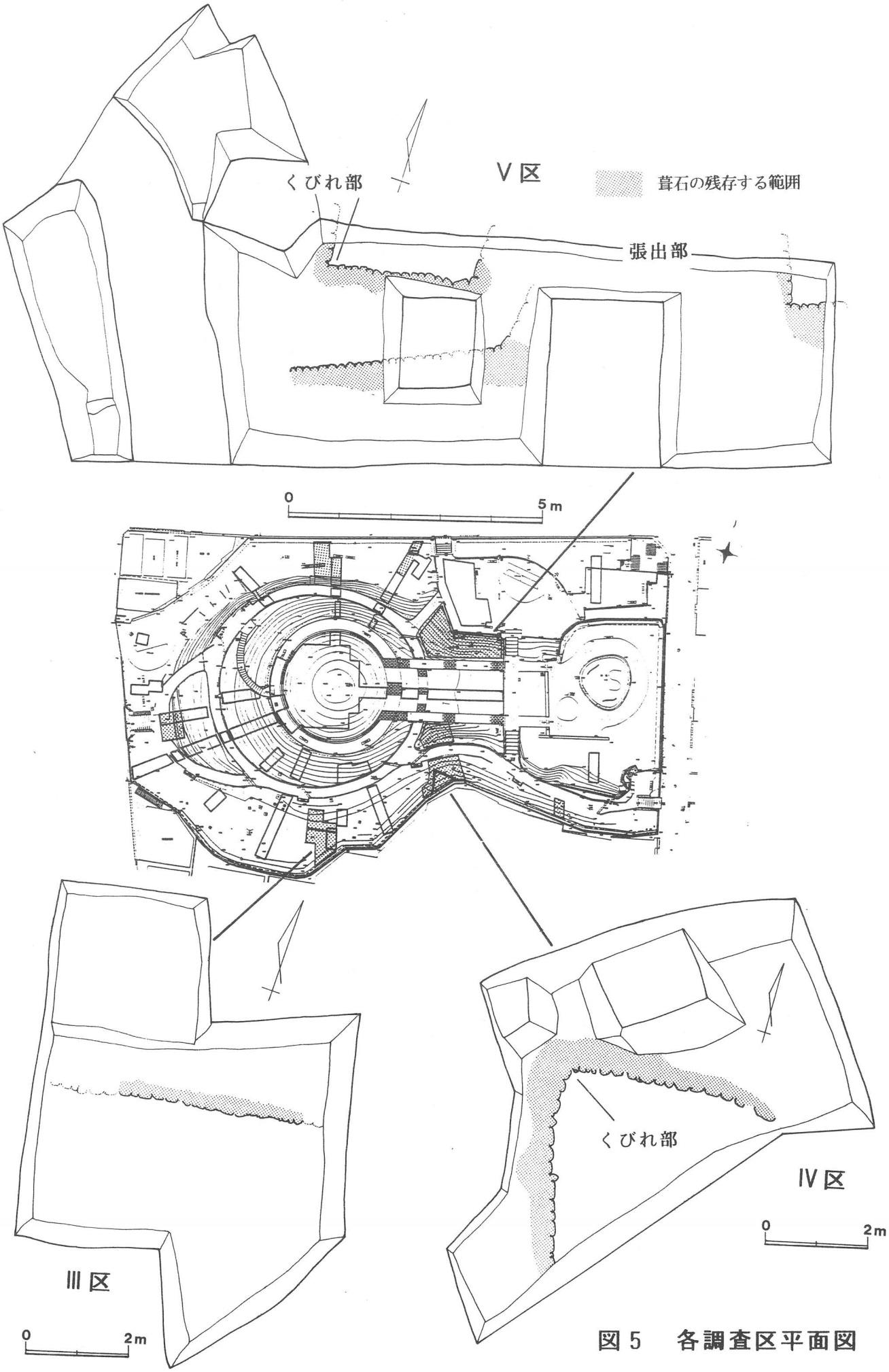


図5　各調査区平面図

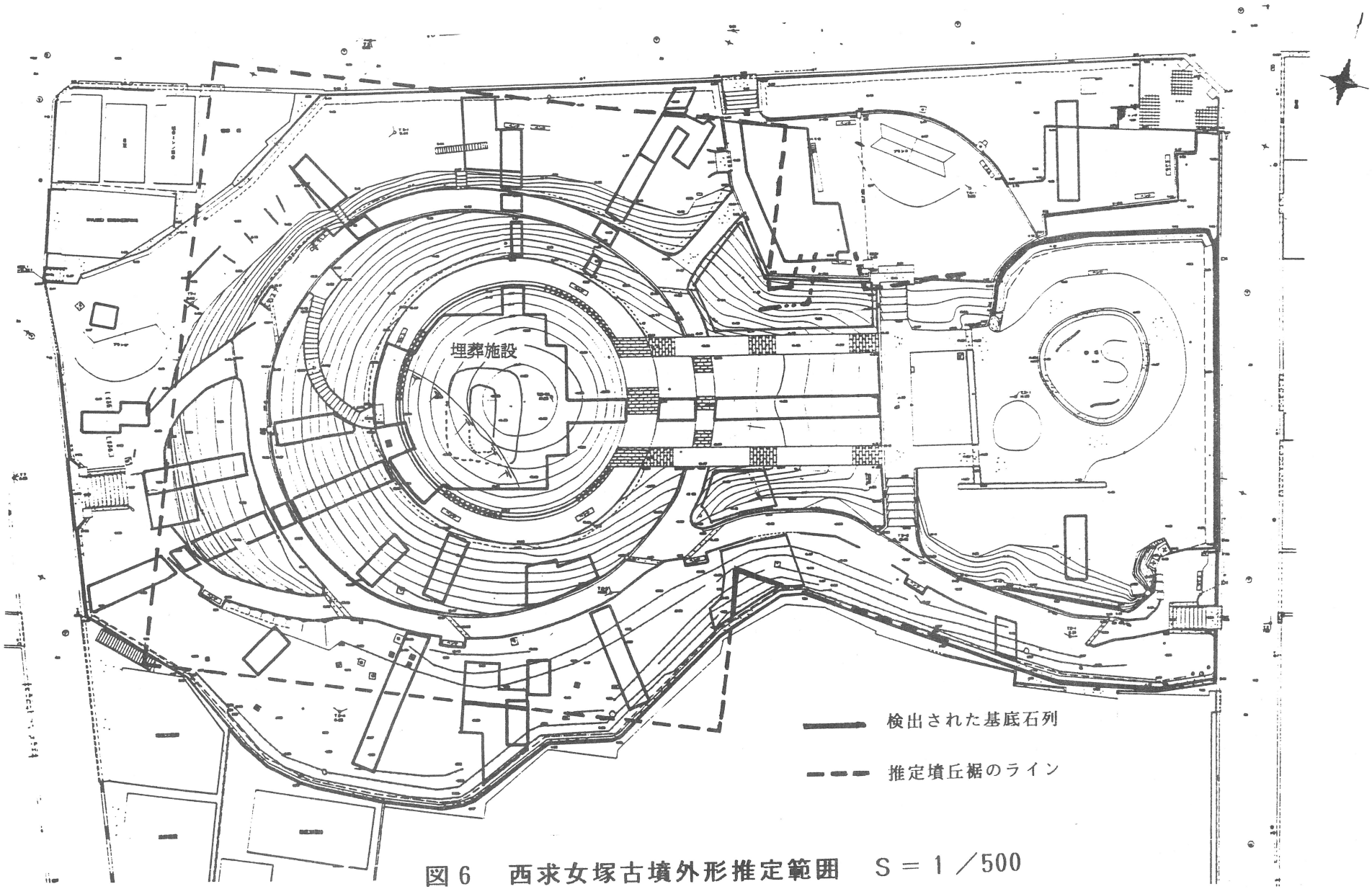


図6　西求女塚古墳外形推定範囲　S＝1／500

出土遺物

今回の調査では、各調査区から土師器片が出土しています。そのほとんどは大型の二重口縁壺の破片です。この壺には、昨年度出土した土器と同様に、スタンプ文と呼ばれている、竹管を土器の表面に押しつけて『C』字形や『O』字形の文様をつけたものがあります。そして、これらの土器の表面には赤色顔料が塗られており、特別な土器であったことがうかがえます。これらの土器も墳頂部で出土した土器と同じく山陰地方の特色を持ったものです。また今回の調査ではⅣ区から「布留式甕」と呼ばれる畿内的な甕の破片も出土しており、古墳の築造時期を知る手掛かりとなります。

これらの土器は、調査区のすべてで流土中から出土したことから、本来、墳丘上または段の平坦面の各所に置かれていた土器が流れ落ちたものと思われます。

まとめ

以上のように当古墳は、これまで前方後円墳と考えられていましたが今回の調査で、前方部を東に向けた前方後方墳であることが明らかになりました。その規模は前方部が未調査のため正確にはわかりませんが、後方部の一辺50数m・くびれ部幅約26m・全長90～100mと考えられます。

また前方部北側のくびれ部付近には張出部が存在することも明らかになりました。

また、地滑りを起こした墳丘盛土がかなりの距離を滑っていることが判り、その地滑りは1596年の「慶長の大地震」によって引き起こされたものであることが、明らかになりました。

今後は前方部の調査をおこなってゆき、これまでの調査成果とあわせて西求女塚古墳の全体像を明らかにして、この古墳の被葬者像を探ってゆきたいと考えています。

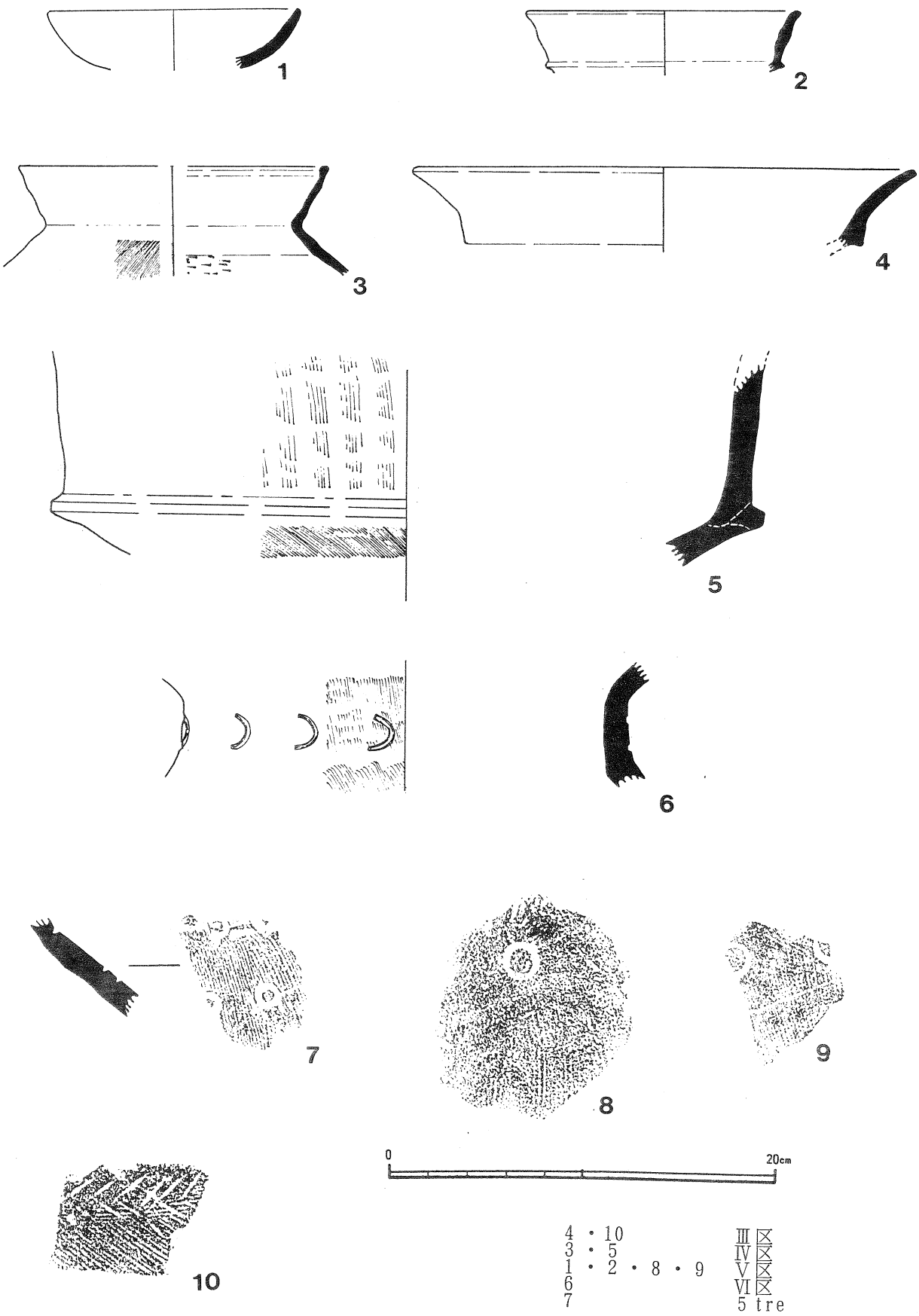
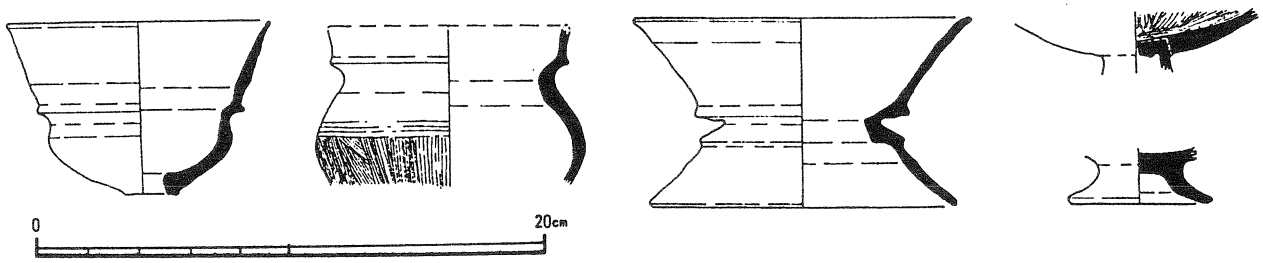
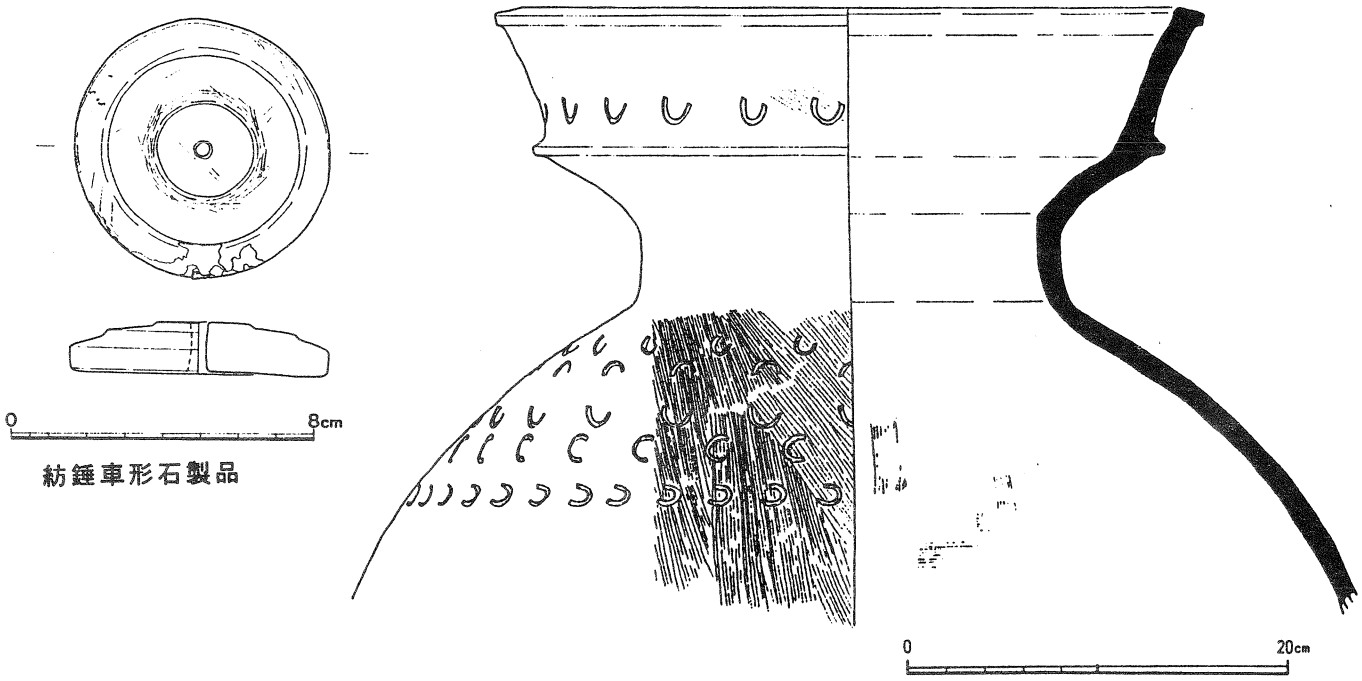


図7　今回の出土遺物　S＝1／3

参考資料

図8　昨年度調査出土遺物





西求女塚古墳出土鏡一覧表

	鏡　式	直径	銘　文	同笵（型）鏡	備　考
1号鏡	（半肉彫）獣帯鏡	不明	――――		破片
2号鏡	三角縁吾作四神四獣鏡	22.4	吾作明竟甚大好上有神守及龍虎 身有文章口衒巨古有聖人東王父西王母 渴飲玉飢食棗壽如金石長相保	出土地不明・泉屋博古館蔵25鏡	
3号鏡	三角縁吾作三神五獣鏡	22.5	吾作明竟甚大好上有神守及龍虎 身有文章口衒巨古有聖人東王父西王母 渴飲玉淦飢食棗壽如金石	京都・椿井大塚山古墳 岐阜・（伝）旧可児町出土 千葉・城山1号墳	
4号鏡	三角縁神獣鏡	不明	――――		破片
5号鏡	三角縁陳是作五神四獣鏡	21.8	「君」陳是作竟甚大好上有神守「宜」及龍虎 有文章口衒巨「高」古有聖人東王父西王母 渴「官」飲玉淦飢食棗長相保	兵庫・牛谷天神山古墳	
6号鏡	画文帯環状乳神獣鏡	15.4	不　明		
7号鏡	神人龍虎画像鏡	18.5	田氏作明竟□□□有服者男為公卿女為諸王 曽年益寿子孫番昌千秋萬歳不知老長宜賈市兮 （傍題「大王公」）		
8号鏡	三角縁吾作四神四獣鏡	19.8	吾作明竟甚大工上有王喬以赤松 師子天鹿其 龍龍天下名好世無雙	福岡・石塚山古墳 広島・中小田1号墳 大阪・万年山古墳 京都・椿井大塚山古墳2面	
9号鏡	三角縁吾作徐州銘四神四獣鏡	22.4	吾作明竟幽律三剛銅出徐州彫鏤文章 配徳君子清而且明左龍右虎傳世右名 取者大吉保子宜孫	京都・椿井大塚山古墳 奈良・佐味田宝塚古墳 岐阜・内山1号墳	
10号鏡	三角縁神獣鏡	不明	――――		破片
11号鏡	画文帯環状乳神獣鏡	17.1	天王日月		
12号鏡	半肉彫獣帯鏡	14.2	〔内帯〕□□子孫 〔外帯〕不明		

現地説明会資料

平成７年度

岡本北遺跡現地説明会資料

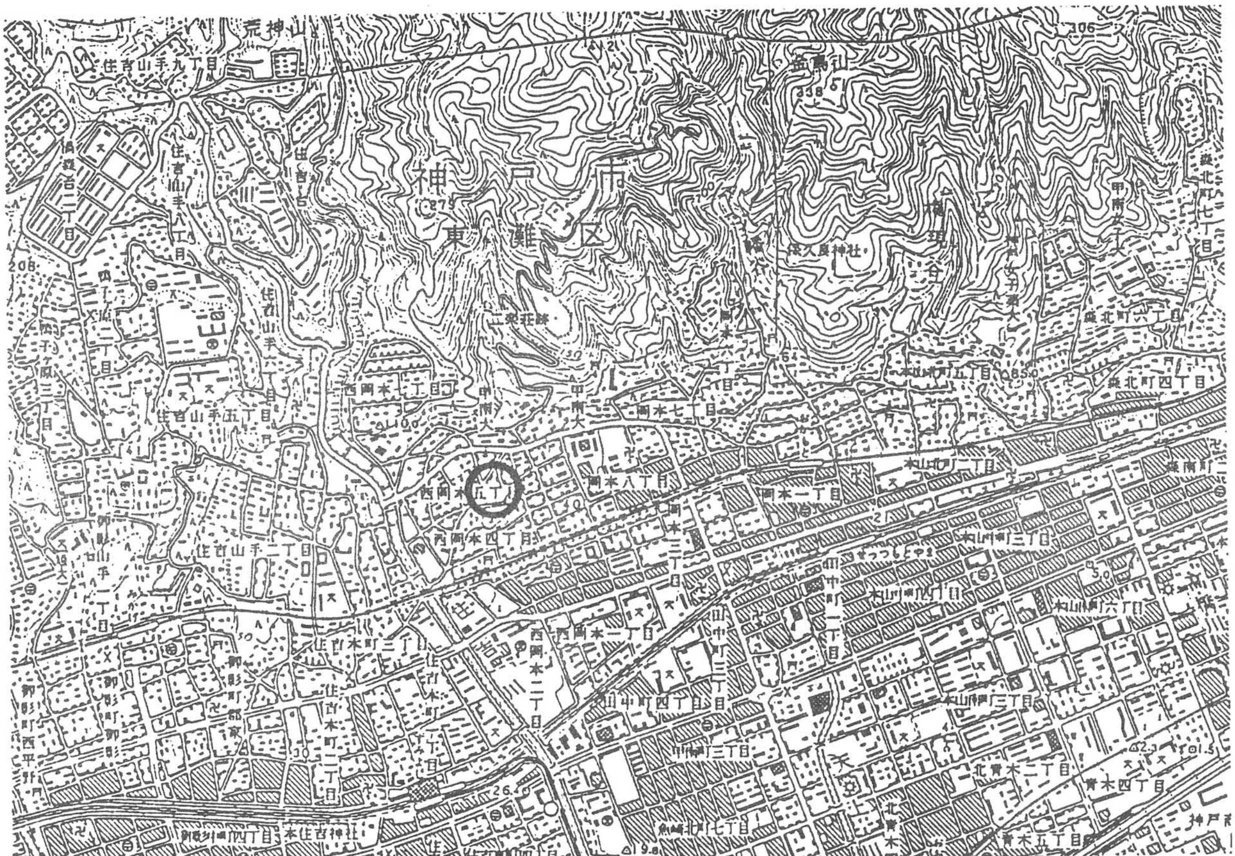
平成８年２月24日
神戸市教育委員会

所 在 地　神戸市東灘区西岡本５丁目
調査主体　神戸市教育委員会
調査担当　兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所
　　　　　　村川逸朗（長崎県教育委員会支援職員）
　　　　　　小林健二（山梨県教育委員会支援職員）
調査期間　平成７年11月６日～平成８年３月上旬
調査面積　約９５０㎡

～はじめに～

岡本北遺跡は、住吉川によってつくられた扇状地の左岸、標高55ｍ前後に位置する弥生時代・古墳時代・鎌倉時代の遺跡です。ちょうど阪急御影駅と岡本駅の中間にあります。

現在、兵庫県には、震災の復興にともなう埋蔵文化財の発掘調査を行うため、全国の府県から35名の専門職員が支援に来ています。今回の調査は共同住宅建設に先立ち、神戸市教育委員会の依頼を受け、兵庫県教育委員会の支援職員が担当しました。



遺跡の位置（1/25000）

～発掘調査の成果～

調査の結果、弥生時代後期から古墳時代にかけてと、鎌倉時代の遺構・遺物が発見されました。

＜弥生時代後期～古墳時代＞

この遺跡の中でまず目につくのは、あちこちにある大きな石です。これは大雨による洪水・土石流の跡です。これらの石の間に竪穴住居跡、高床倉庫の可能性のある柱の穴、溝、土坑（掘りくぼめた穴）、ピット（小さな穴）群が見つかっています。竪穴住居跡は10棟ありますが、そのうち比較的石の少ない場所を選んで少なくとも６棟が同じ場所で建て替えられています。というより、石を避けて住居を建てようとすると場所が限られてきます。そこで同じ場所に何回も建て替えを行うことになります。また一方では、このあたりを支配していた有力者が、何世代にもわたって建て替えを行ったことを物語っているのかもしれません。

大きな石がたくさんある住居跡は、洪水で流れ込んだものではなく、住居が使われなくなった後に投げ込まれたものと考えられます。土器もたくさんあります。

いちばん西端にある住居跡は火災によって焼け落ちたとみられ（あるいは火をかけて焼いた）、屋根の一部が炭になって残っています。

高床倉庫とみられるものは、後世の水田の造成や宅地造成よって、東側の柱穴が削られてなくなっています。

溝には石や砂が流れてたまっていて、その中に古墳時代の須恵器が入っていました。

土坑の中には、全体が赤く焼けたものが見つかっています。これは土器を焼いたところ、共同の炊事場などの説が考えられていますが、はっきりしたことはまだわかっていません。今回注目されるナゾの土坑です…。

さらに、壺や甕・鉢などの土器がまとまって出土した場所があります。その中には、胴の部分に穴をあけた壺があり、また近くからはガラスも見つかっています。穴をあけた壺は何を意味しているのでしょうか。

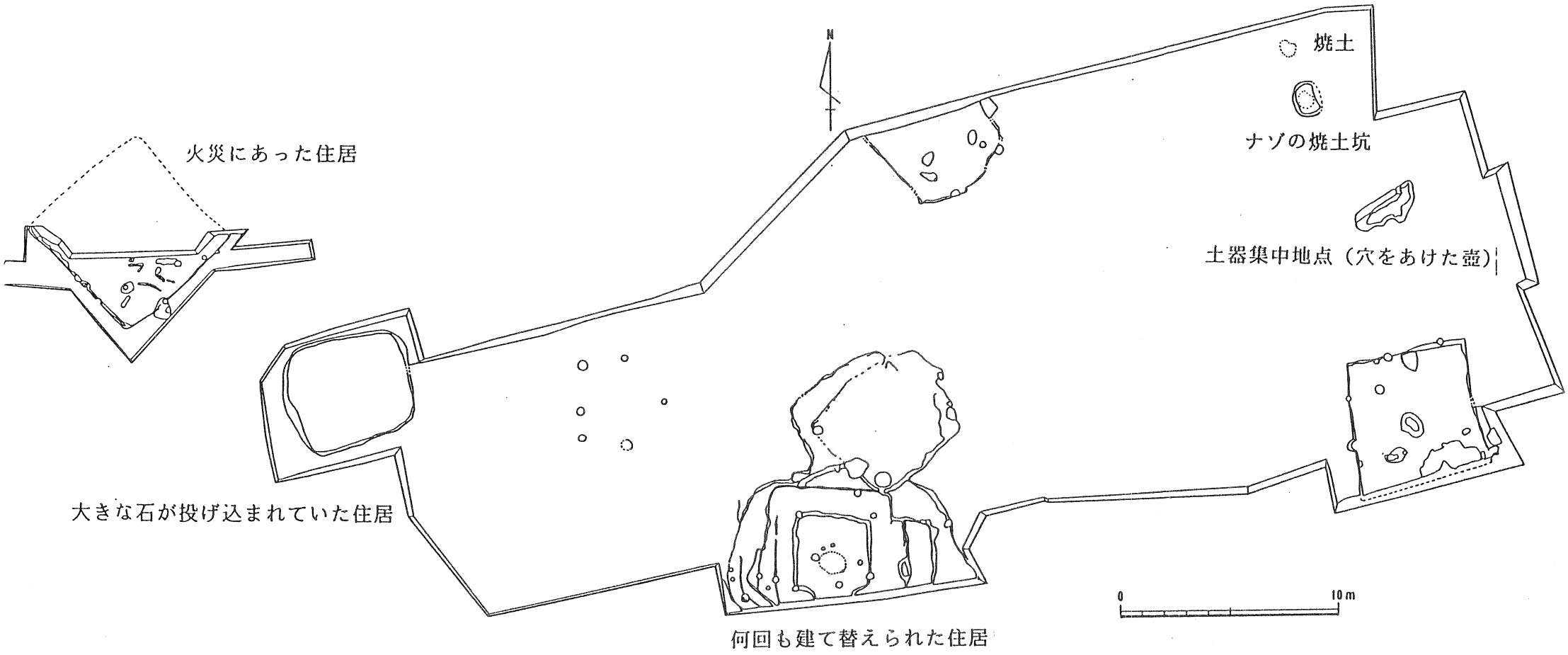
遺物はこの他に土錘（網につけるおもり）や砥石などがあります。

＜鎌倉時代＞

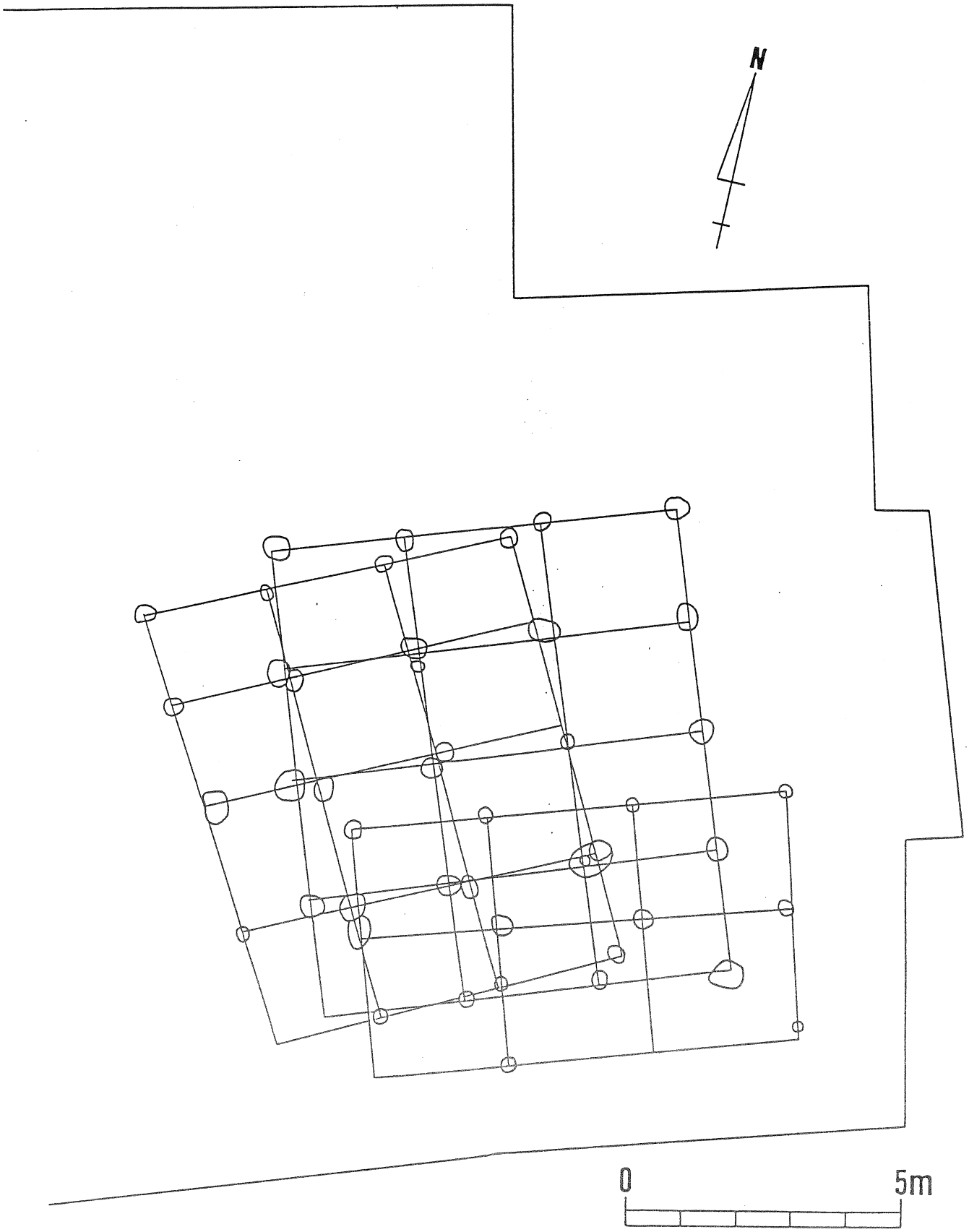
掘立柱建物や土坑、ピット群が発見されています。掘立柱建物跡は３間×４間のものが２棟と、２間×３間のものが１棟があります。

建物跡の柱穴や土坑から、かわらけ（素焼きの皿）や須恵器、瓦器のほか、青磁・白磁といった輸入陶磁器が出土しています。

下層遺構面（弥生時代後期～古墳時代）全体図（1/250）



3



上層遺構面（鎌倉時代）掘立柱建物跡配置図（1/100）

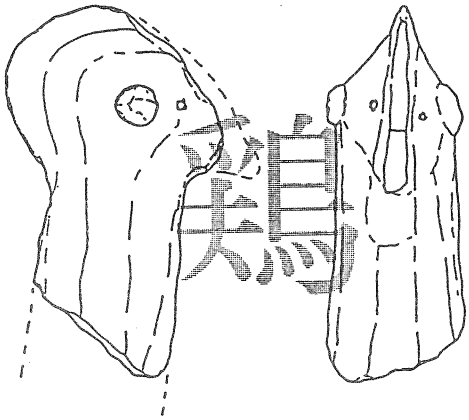
4

現地説明会資料

平成８年度

水谷大東古墳（みたにおおひがしこふん）

現地説明会資料



平成８年５月１９日

神戸市教育委員会
(財)神戸市スポーツ教育公社

今回の調査にあたっては、神戸市文化財専門委員・立命館大学教授　和田晴吾先生のご指導をいただきました。

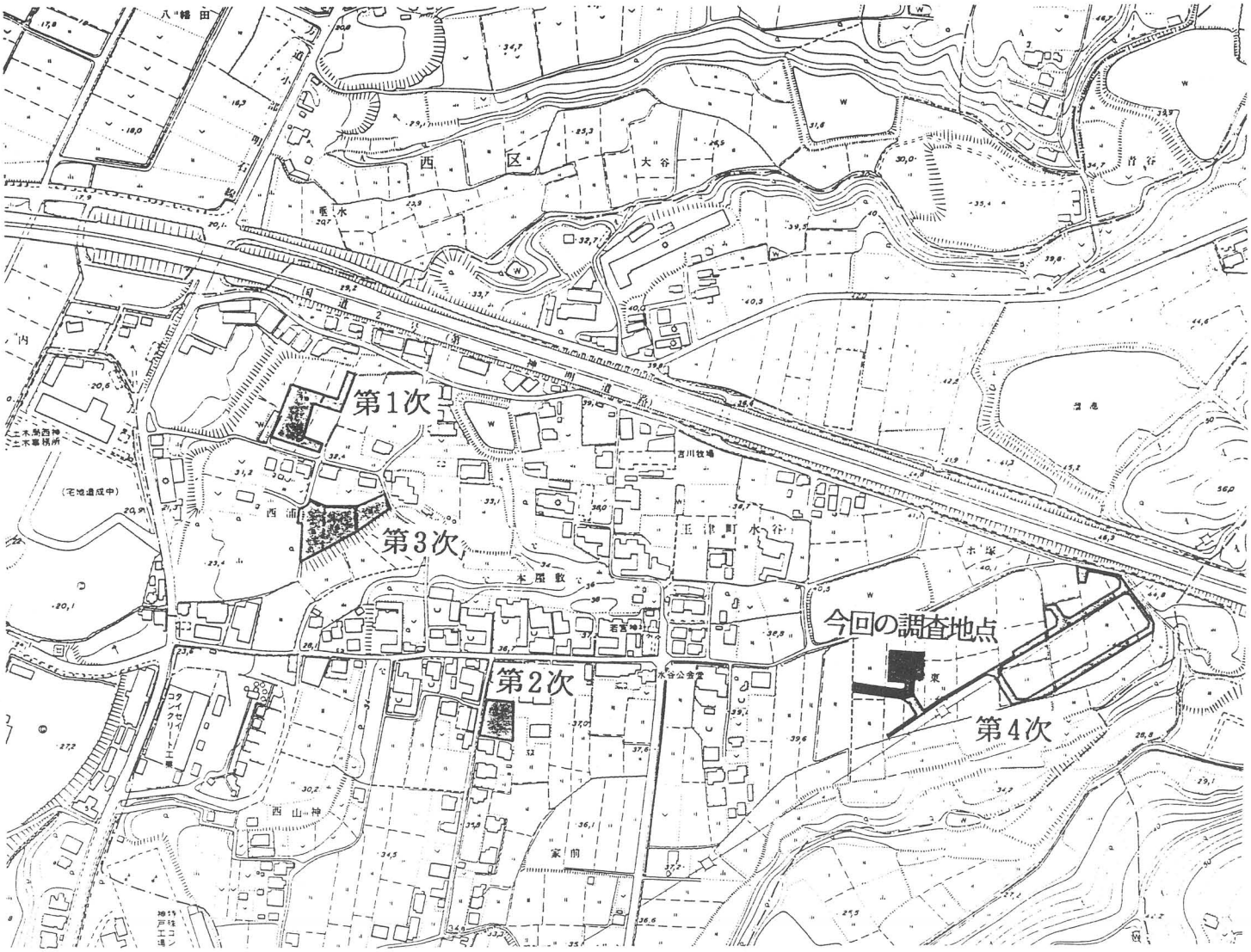
また、調査の実施および現地説明会の開催については、水谷中央特定土地区画整理組合、㈶神戸市都市整備公社の協力を得ています。

1．はじめに

水谷遺跡は櫨谷川と伊川にはさまれた、標高約40mの南北に延びる段丘上に位置しています。区画整理事業に伴って新たに発見された遺跡で、平成３年度に初めて発掘調査が行われました。その後、民間の宅地開発に伴う調査も含め、４回の調査が行われています。

これまでの調査結果から、弥生時代後期～古墳時代初頭と古墳時代後期の土坑や溝などの遺構・遺物が見つかっています。古墳時代の住居跡はまだ発見されていませんが、周囲にこの時期の集落が存在した可能性が考えられます。また、中世にも付近に集落の存在したことが知られています。

今回の調査は水谷中央地区の特定土地区画整理事業に伴うもので、水谷遺跡の第５次調査になります。４月から始めた調査の結果、弥生時代後期～古墳時代初頭（土坑、溝）、古墳時代後期（帆立貝式古墳）、近世（畦畔）の遺構面と遺構を発見しています。今回の調査で新たに発見された水谷大東古墳は水谷遺跡内のほぼ中央に位置します。



これまでの水谷遺跡の調査地点

（Scale：１／5,000 ）

2．周辺の遺跡　　櫨谷川と伊川にはさまれた丘陵と段丘上には、多くの古墳が分布しています。

古墳時代前期～中期では、水谷大東古墳から東約 900mの丘陵上に天王山古墳群があります。このなかには明石川流域では最も古い4世紀前半につくられた天王山4号墳・5号墳が含まれます。また、南東約 800mの丘陵上には白水瓢塚古墳があります。この古墳は4世紀後半につくられた前方後円墳であり、周囲からは埴輪円筒棺も見つかっています。

古墳時代後期では、天王山古墳群の中に天王山3号墳（帆立貝式古墳）が知られています。また、水谷大東古墳の南約 700mに延命寺古墳が存在し、南約 900mに高津橋大塚古墳、東約1500mには鬼神山古墳が存在します。

古墳時代の集落跡としては、付近の段丘から沖積地にかけて白水遺跡、小山遺跡、今津遺跡、潤和遺跡、新方遺跡などが数多く知られています。

水谷大東古墳と周辺の遺跡

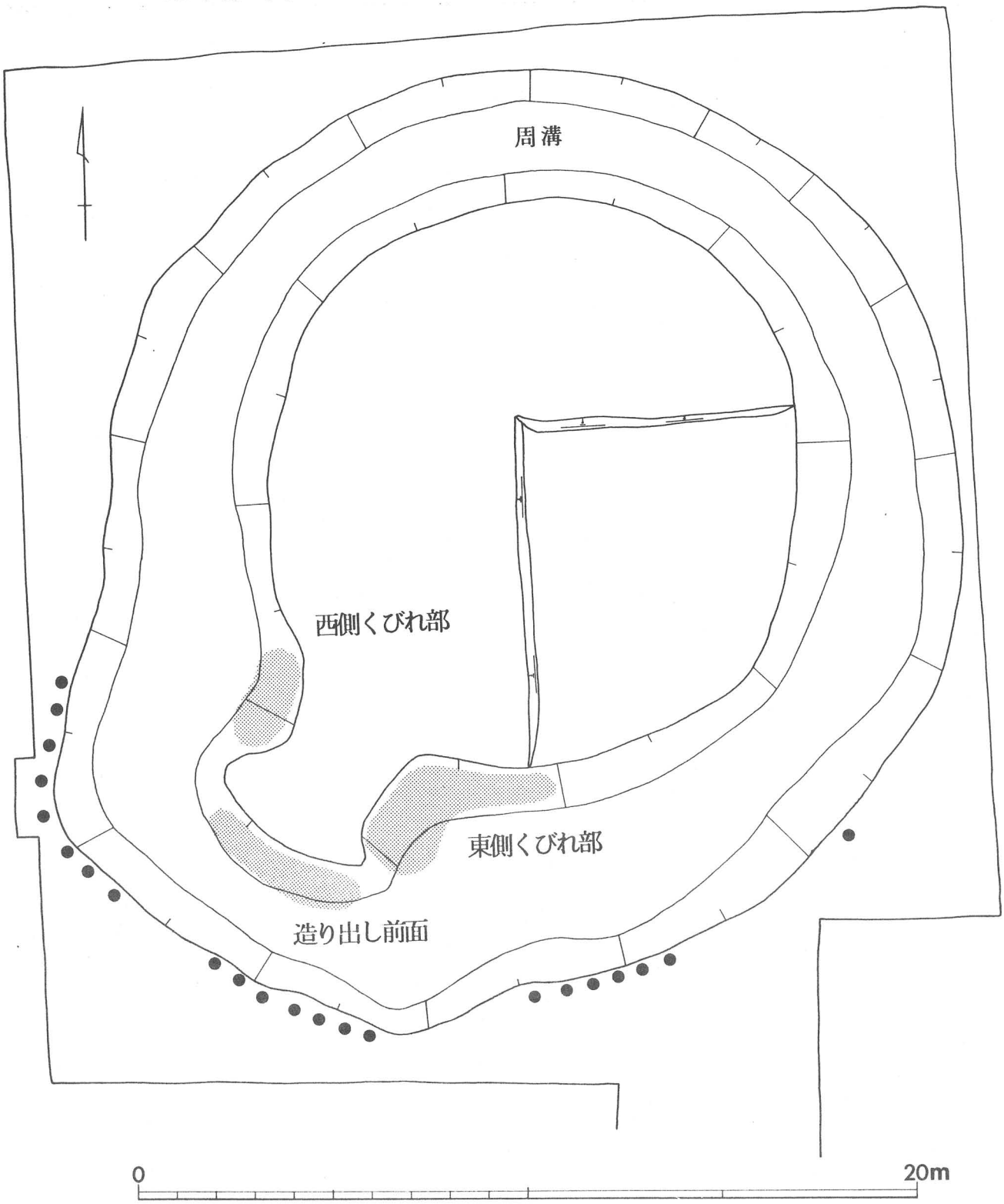
（Scale：1／25,000）

1　水谷大東古墳（水谷遺跡）　2　天王山古墳群
3　白水瓢塚古墳　4　延命寺古墳
5　高津橋大塚古墳群　6　鬼神山古墳
7　吉田王塚古墳　8　出合亀塚古墳
A　白水遺跡　B　潤和遺跡　C　新方遺跡
D　今津遺跡　E　小山遺跡

3．水谷大東古墳の概要

この古墳は、南西に造り出し部を持つ全長約20mの帆立貝式古墳です。

円丘部の直径は約15m、造り出し部は長さが約５mで、最大幅は約 5.5mです。周溝は幅約３～４m、深さ約40～50cmで、平面形は馬蹄形です。近世以降の水田を造る時に削られており、墳丘はほとんど残っていません。このため、埋葬施設や墳丘の外部施設については不明です。



水谷大東古墳　平面図

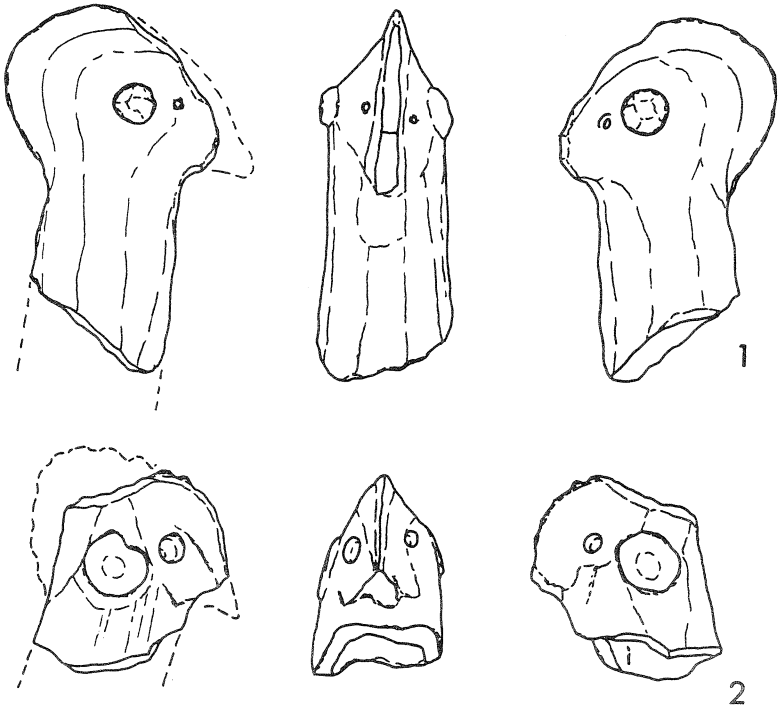
●は埴輪基部

網は埴輪・須恵器が集中して出土した範囲

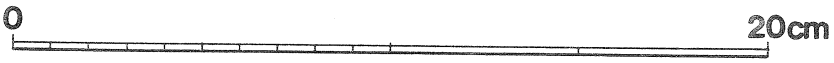
周溝の外側には、古墳の南半分で一部に円筒埴輪の基部が立った状態の埴輪列が発見されています。周溝内で出土する埴輪の状況から、もともと周溝外側と墳丘側（周溝の内側）にも全周する埴輪列が存在したようです。

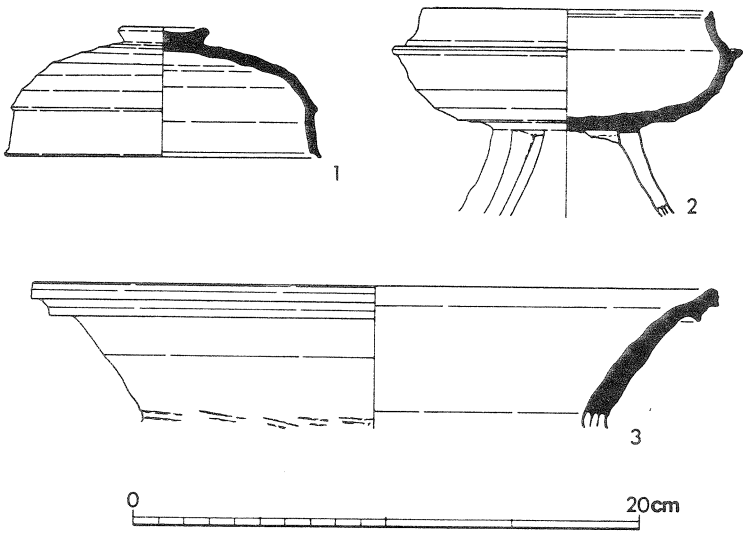
くびれ部（造り出し部の周溝内側）から、円筒埴輪・朝顔形埴輪・須恵器とともに形象埴輪が多く出土しています。形のわかる埴輪では鶏形埴輪２個体、人物埴輪２個体、楯形埴輪があります。また、これらの埴輪とともに、須恵器の壺・甕・高杯とその蓋が出土しています。

古墳の外からは、近世以降の水田造成による墳丘削平後の覆土から、碧玉製管玉１点と鉄製品数点が出土しています。



周溝から出土した鶏形埴輪の頭部





周溝から出土した須恵器

1　高杯蓋

2　有蓋高杯

3　甕

4．まとめ　今回の調査では、水田の下に埋もれていた５世紀末～６世紀初め頃の帆立貝式古墳を発見することができました。

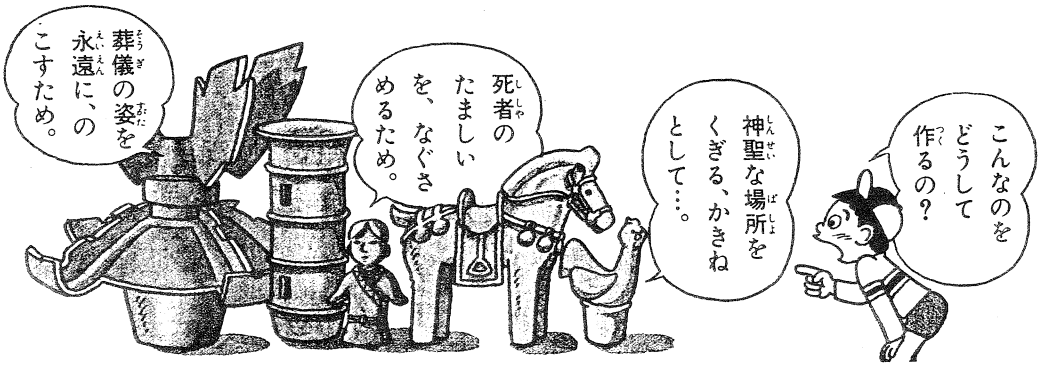
神戸市内での帆立貝式古墳の発見は、天王山３号墳（西区天王山）、出合亀塚古墳（西区中野）、住吉東古墳（東灘区住吉東町）、中村５号墳（西区平野町印路）に次いで５例目となります。

墳丘はほとんどが削られており、埋葬施設は確認することができませんでしたが、周溝はよく保存されており、形象埴輪を含む多くの埴輪が出土しています。

形象埴輪は、そのほとんどがくびれ部から出土しています。人物埴輪では同じ個体の破片が東西両側のくびれ部から出土しており、本来は造り出し部のほぼ中央に立ててあったものと考えられます。

また、周溝の外側に埴輪列が発見された古墳もあまり例はないようです。兵庫県内では御願塚古墳（伊丹市）や打出小槌古墳（芦屋市）で、周溝の外側に埴輪列が存在したと推定されています。

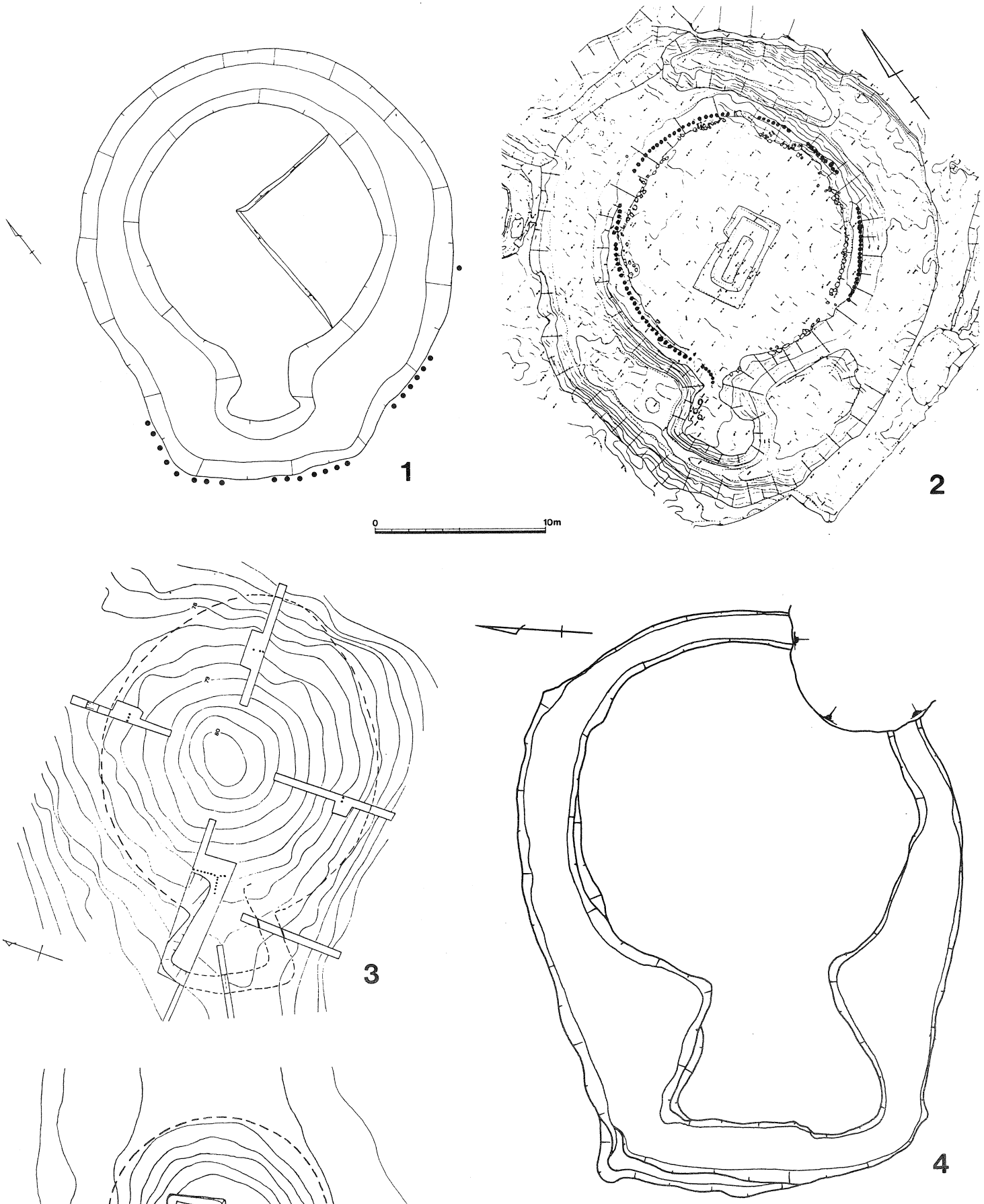
水谷遺跡から水谷大東古墳が発見されたことにより、周囲にまだ知られていない古墳の存在する可能性がでてきました。水谷遺跡の発掘調査はまだまだ始まったばかりであり、判らないことが多くあります。これから発掘調査が進むつれて、この水谷地区の歴史についても徐々に復原されていくと思われます。



小学館版学習まんが　『少年少女日本の歴史』２巻　より

市内の帆立貝式古墳　一覧表

No.	古墳の名称	所在地	全長(m)	円丘部直径(m)	造出長さ(m)	造出幅(m)	周溝	埋葬施設	出土遺物	時期
1	水谷大東古墳	西区玉津町水谷	20.5	15.0	5.0	6.0	馬蹄形	？	須恵器・埴輪	5世紀末～6世紀初め
2	住吉東古墳	東灘区住吉東町	24.0	18.0	6.0	6.0	馬蹄形	木棺直葬１	須恵器・埴輪	5世紀末～6世紀初め
3	天王山３号墳	西区天王山	25.0	20.0	5.0	10.0	一部あり	木棺直葬？	須恵器・埴輪	5世紀末～6世紀初め
4	出合亀塚古墳	西区中野	29.0	20.0	9.0	13.4	馬蹄形	？	須恵器・埴輪	5世紀末～6世紀初め
5	中村５号墳	西区平野町印路	16.3	14.0	2.3	4.7	×	木棺直葬２	須恵器・埴輪	5世紀末～6世紀初め



市内の帆立貝式古墳の大きさの比較

1　水谷大東古墳

2　住吉東古墳

3　天王山3号墳

4　出合亀塚古墳

5　中村5号墳

6

郡家遺跡現地説明会資料

1996年6月15日
神戸市教育委員会

1．はじめに

郡家遺跡は，神戸市東灘区御影町を中心に存在する遺跡で，天神川の扇状地上に位置しています．その名前から摂津国菟原郡の郡衙の所在地と考えられてきました．

今まで1979年の調査を初めとし，今までに60回を越える調査がおこなわれ古墳時代を中心とする時期の遺構・遺物が発見されています．

今回の発掘調査は阪神・淡路大震災の復興にともなうマンション建設に先立ち，国庫補助事業によりおこなわれたものです．調査は，兵庫県教育委員会との協議の結果，兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所復興調査班の職員が担当することになりました．その結果，古墳時代中期（５世紀）を中心とする遺構・遺物を発見することができましたので，本日現地説明会を開催することにいたしました．

Fig.1 郡家遺跡周辺の遺跡地図

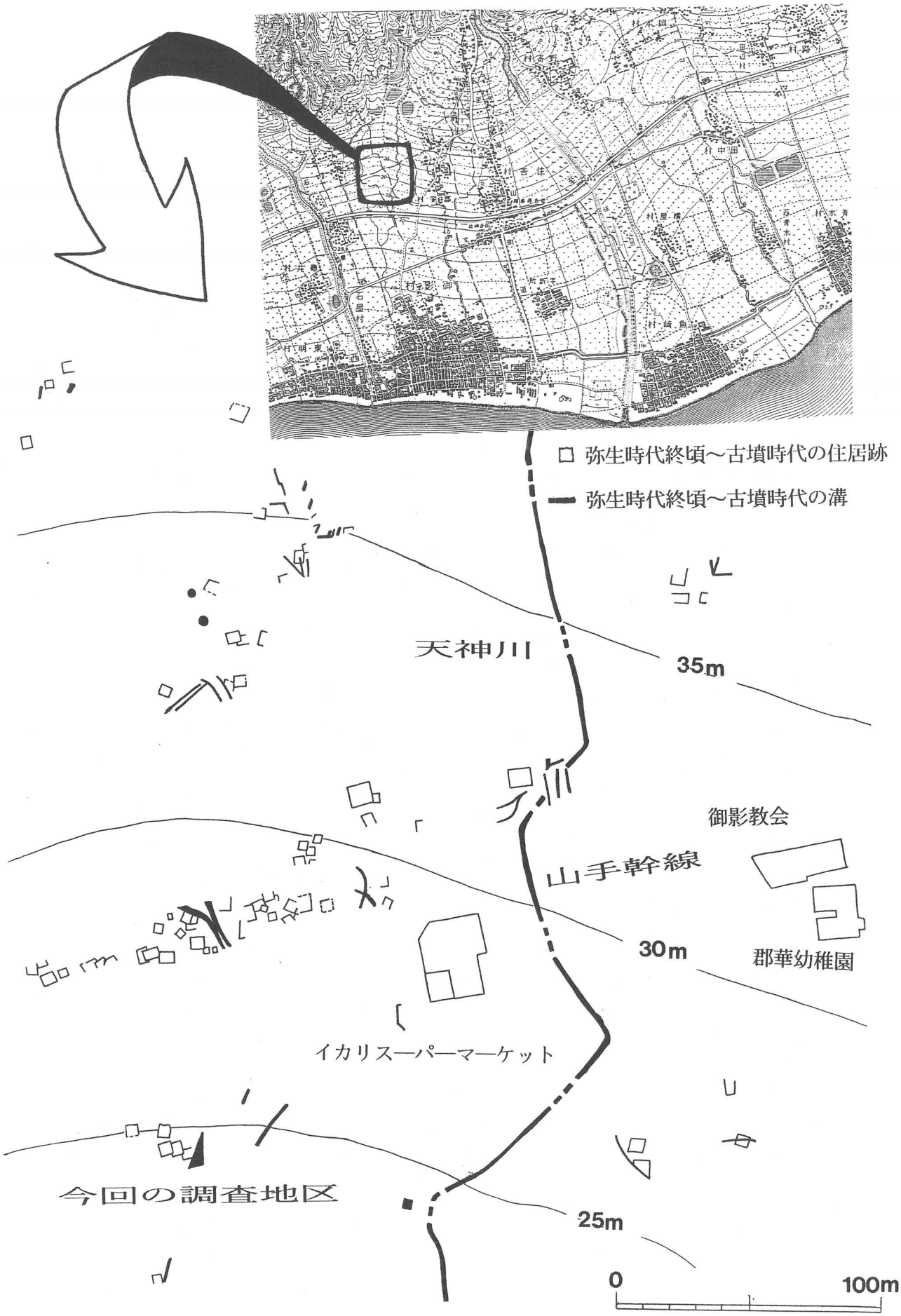


Fig. 2 郡家遺跡遺構配置図

2

2．調査の成果

(1) 概要

今回の調査では，竪穴住居跡５棟及び溝跡１条が確認されました．いずれも古墳時代中頃（５世紀）に造られたと考えられます．

竪穴住居跡のうち２棟（２・３）は重なりあって確認されましたが，竪穴住居２　竪穴住居３の順で造られたことがわかりました．また，住居を埋めている土の違いから，竪穴住居４・竪穴住居７はさらに新しい時期に造られたと考えられます．

古い時期に造られた住居（竪穴住居１・２・３）にはカマドがありませんが，新しい時期に造られた住居（竪穴住居４・７）にはカマドが作り付けられています．竪穴住居２では，床の周りに壁材を立てるための溝が巡らされていました．屋根を支えるための柱の跡も，竪穴住居４では４本でしたが柱穴のない住居もあります．このように，５棟の住居跡を検出しただけですが，建物の構造にはバラエティがありました．

溝跡５は調査区の端で確認されたため，その全貌を窺うことはことはできませんが，直線的に掘られていることから，この集落に関係する何らかの意味があったのでしょう．

出土した遺物には，古墳時代の土器（窯で焼いた須恵器と野焼きによる土師器），ネックレスの部品（臼玉），鉄器生産に関連する道具（フイゴの羽口・鉄滓），鉄器の刃をとぐ砥石，さらに前の時代（弥生時代終末期）の土器等があります．

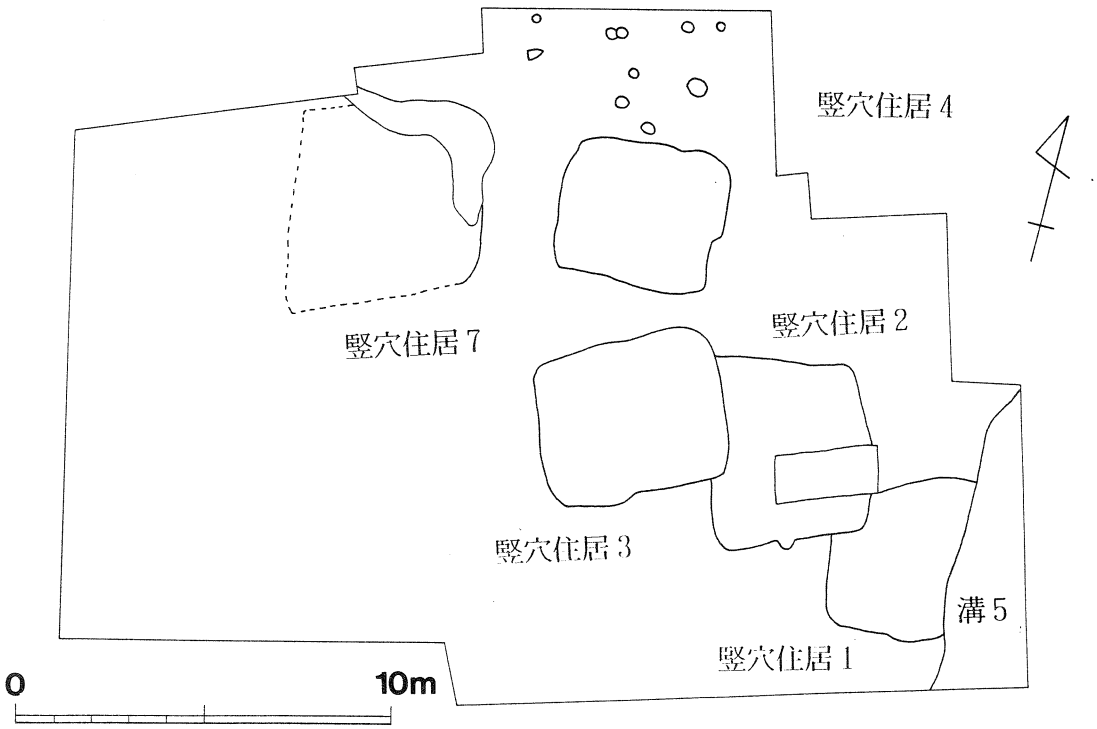


Fig.3 調査区遺構配置図

3

(2) 竪穴住居跡 3

この住居は，今回の調査区の中ではほかの住居に比べて一回り大きく，東西に長い長方形で，中からは多くの遺物が出土しました．この住居にはカマドがありませんでしたが，かわりに中央部浅い窪みがあり，そこでコシキが見つかりました．この窪みが炉の役割を果たしていたものと考えられます．なお，このコシキの上には石がのっており，この住人が住居から立ち去るときに意識的に壊した可能性も考えられます．

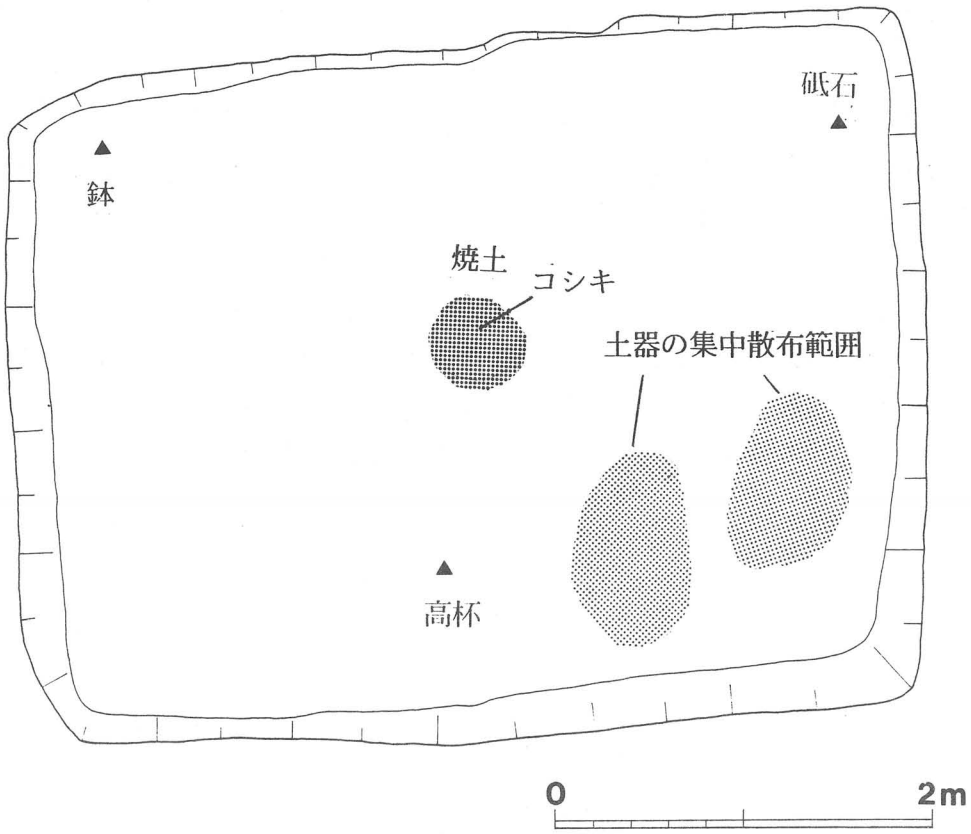


Fig. 4 竪穴住居跡 3 実測図

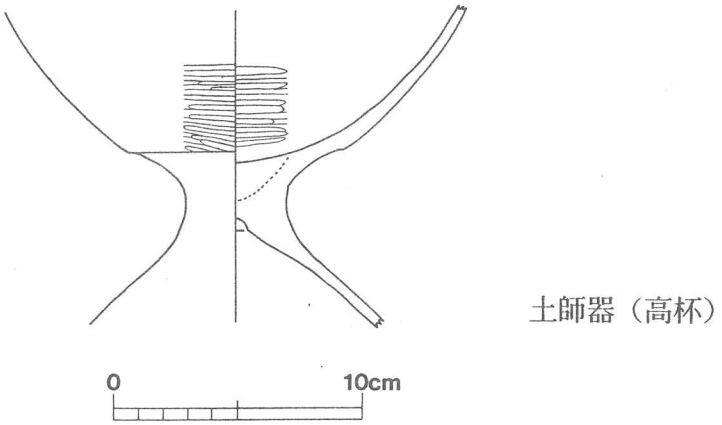


Fig. 5 出土遺物実測図（1）

4

(3) 竪穴住居跡 4

この住居は，竪穴式の 4 本柱建物で，カマドを備えつけています．カマドは建物の北壁中央に粘土で作りつけられています．カマド自体は上部が壊れており，火床と支柱及び側壁しか観察することはできませんでしたが，復元すれば下掲のイラストのようであったと考えられます．支柱はカメを支えると同時に火を焚く空間をつくり出し，火まわりをよくする働きをしています．全体にしっかりした作りであることから，カマドの中でも古い様相を示しているものと考えられます．

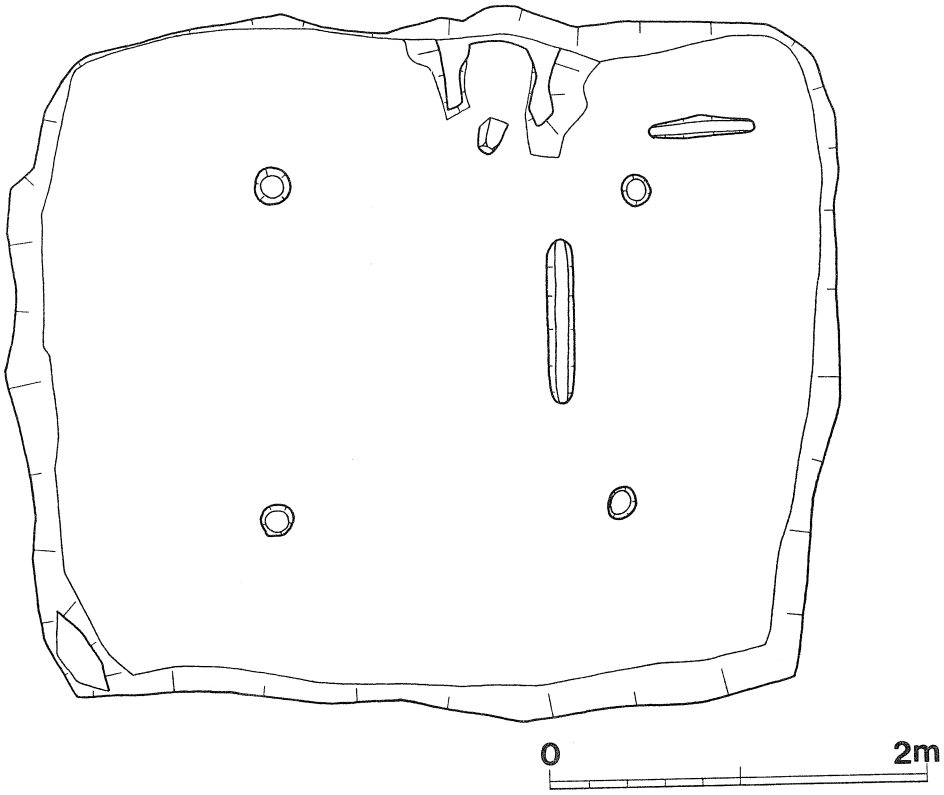


Fig. 6 竪穴住居跡 4 実測図

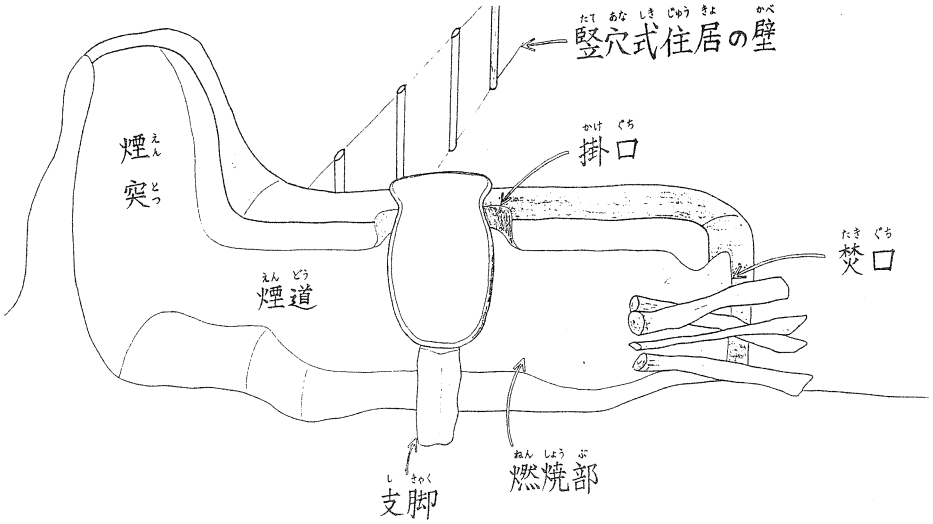


Fig. 7 竈（カマド）復元図

3．まとめ

郡家遺跡ではこれまでにも古墳時代中期の住居が数多く発見されています．今回の調査ではカマドの無い住居とある住居の両方が発見されました．カマドの有無は時期差によるものと考えられ，郡家遺跡でのカマドの導入期の状況が具体的にわかりました．

また，鉄生産関係の道具が発見されたことから，この周辺で鉄器生産がおこなわれたことを示しています．このことは，郡家遺跡がこの地域のひとつの中心的な集落であると捉えられ，また古墳時代の分業の在り方を考える上でも興味深い資料といえましょう．

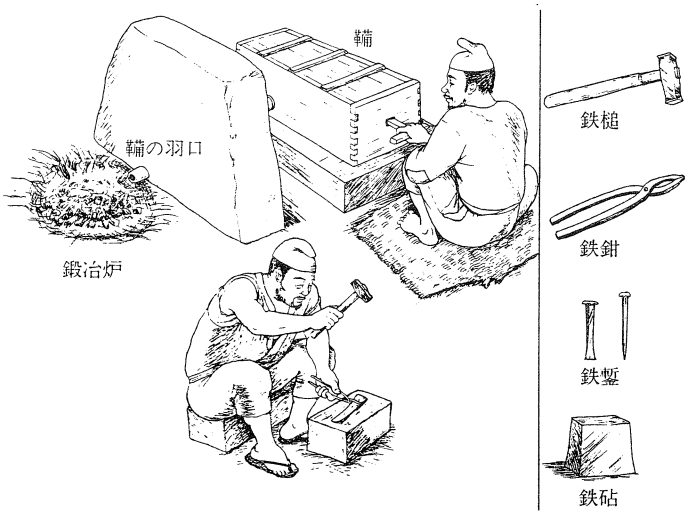


Fig.8 鞴（フイゴ）復元図

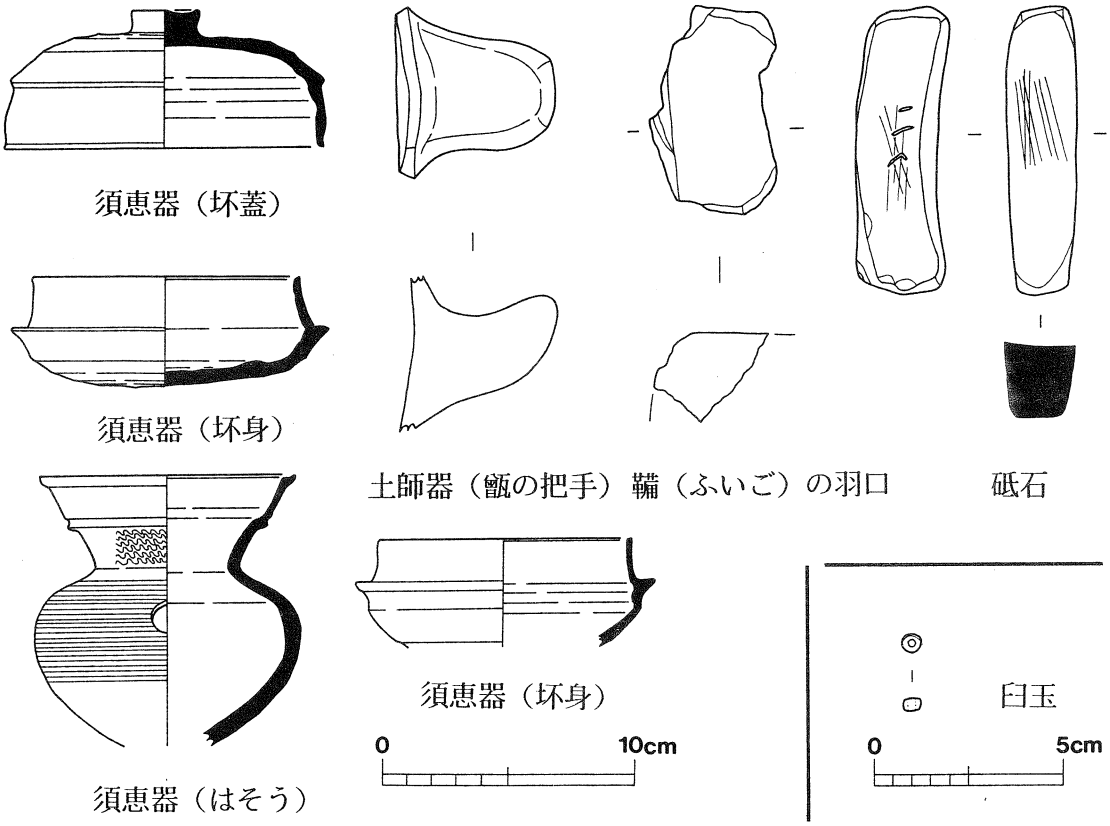


Fig.9 出土遺物実測図（2）

本山遺跡現地説明会資料

平成８年10月10日（木）

神戸市教育委員会

本山遺跡は神戸市東灘区本山中町に所在します。見学していただく地点は、国道２号線のすぐ北側で、縄文時代までは南側約１００ｍのところに海岸線がせまっていました。

本山遺跡の調査は２２回目になります。六甲山麓では多くの銅鐸がみつかっていますが、本山遺跡でも　銅鐸が発見されたことは記憶に新しいことです。また、サヌカイトという石材を使った沢山の石器が出土することでも有名です。本山遺跡は弥生時代中頃（中期）の東灘周辺では、中心的なムラであったと考えられてきましたが、これまで住居跡など確かな人々の暮らしの跡を発見することができませんでした。

今回の調査は阪神・淡路大震災の復興事業であるマンション建設に先だって行っているもので、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所復興班の職員が担当しています。調査の結果、本山遺跡では、はじめて竪穴住居跡をみつけることができました。また、ここに住んだ人々が近畿周辺でもはやくから鉄製品を用いていたことがわかりました。

一日もはやい復興を祈りつつ、かつて東灘に生きた人々の暮らしにふれていただければ幸いです。

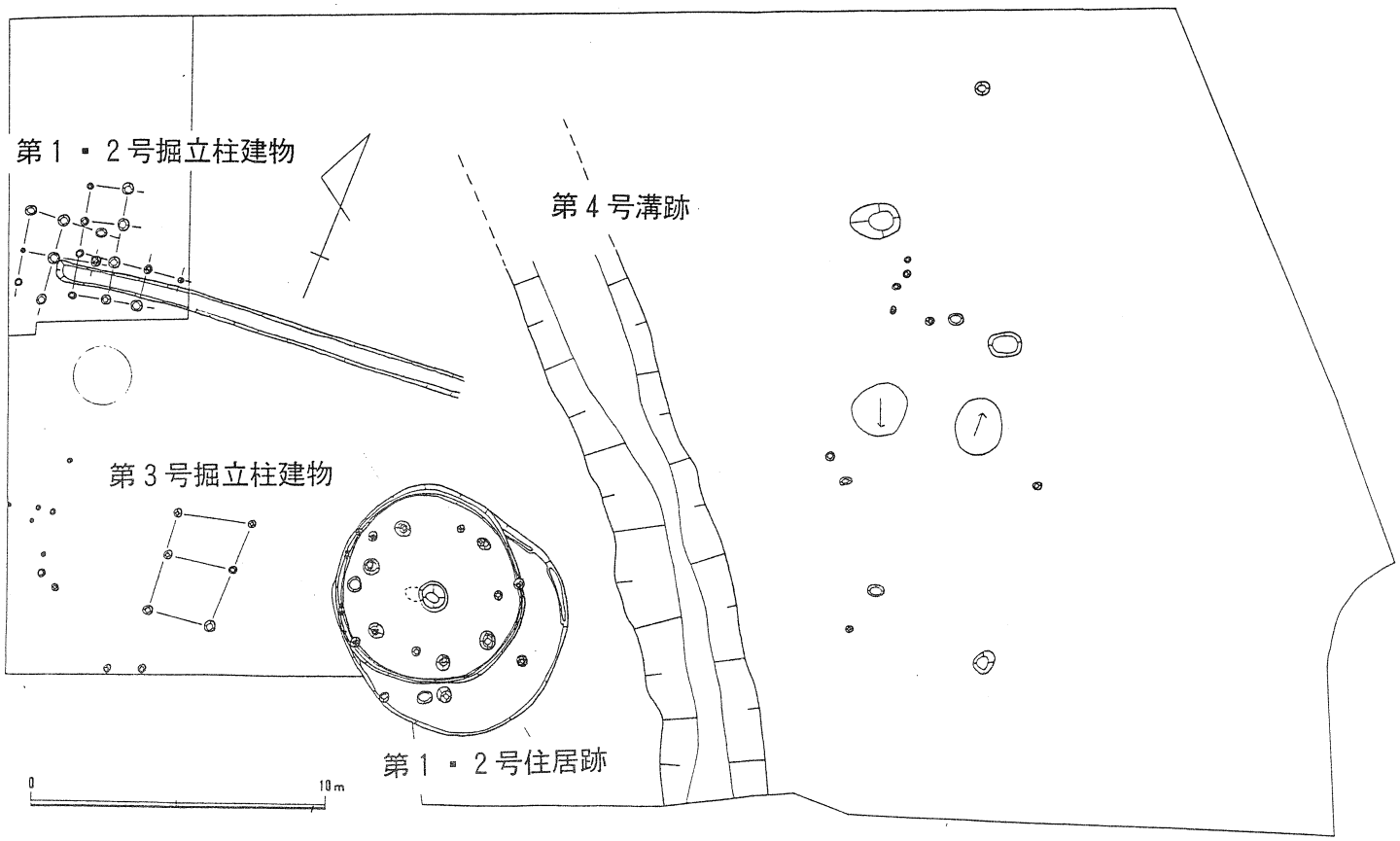
調査位置図

今回の調査では、およそ２０００年前の弥生時代中期中頃に造られた竪穴住居跡２軒、溝跡１条のほか、掘立柱建物跡３棟、江戸時代の水田跡がみつかりました。

竪穴住居跡は地面を大きく円形に掘り込んだもので、中央に円形の炉、その周囲に柱を立てて上屋を支えていました。本山遺跡では２軒の竪穴住居跡がみつかっていますが、これははじめに建てられた第２号住居跡が手狭になったため、竪穴を広げて第１号住居跡に造り替えたものです。

調査では、建て直された第１号住居跡が先にみつかりました。竪穴の中には非常に沢山のいらなくなった土器のかけらが捨てられていました。中には一度に捨てた土器のかけらの集まりが、はっきりとわかるものもありました。床面近くからは、土器に混じって鉄製品２点や、鉄を研ぐのに使ったと思われる砥石のほか、沢山の石器がみつかりました。この住居の造られた頃は、畿内で鉄製の道具が使われ始めた時期にあたり非常に珍しい発見のひとつです。

土器の入った土の層を取り除くと炭の層が顔を出しました。炭の層には沢山の焼け土が混じっており、壁際には屋根の木材が落ち込んで焼け残っていました。



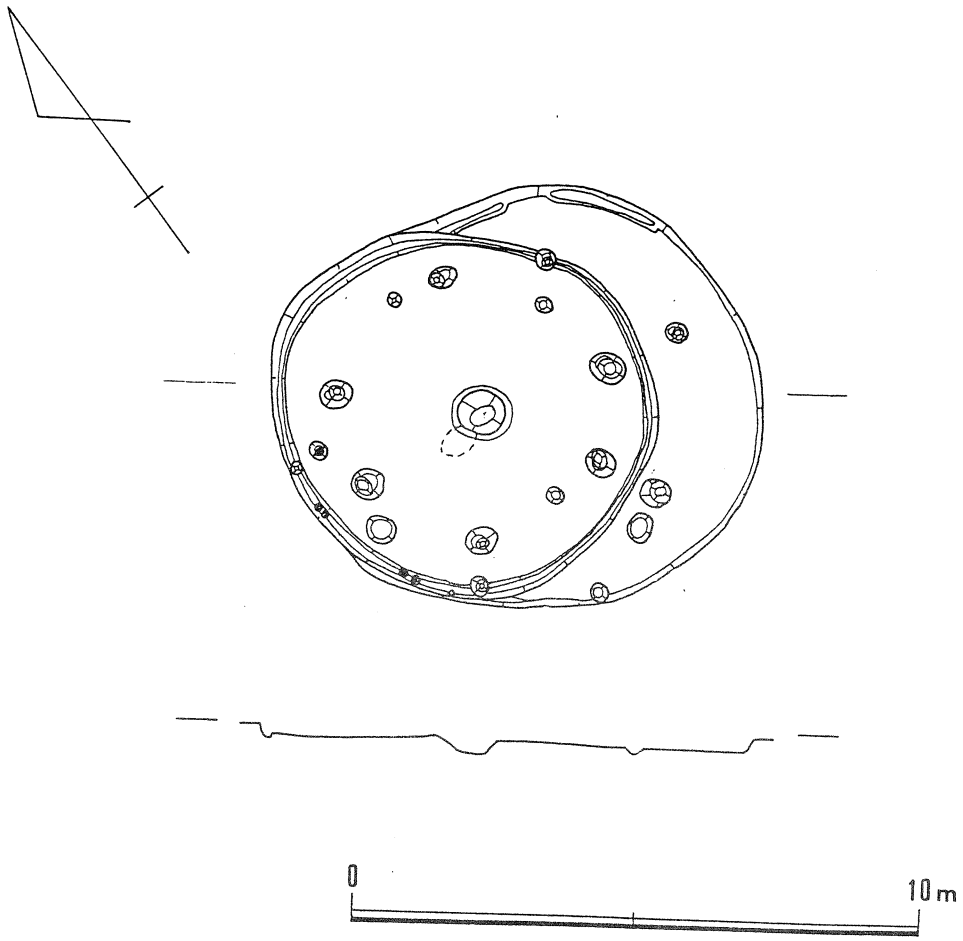
調査範囲全体図

掘りあがった第１号住居跡は、直径８．５ｍほどの大きな円形で少しゆがんだ形をしています。中央よりやや西側には円形の炉の跡がありました。炉の中には沢山の炭に混じって少量の焼け土がはいっていました。柱は住居の形にそって建てられていました。柱穴には柱材が腐ってできた黒い土の層があり、柱材の直径が２０ｃｍほどであったことがわかりました。

壁際には壁土の崩壊を防いだりするための板が埋め込まれていたらしく、これを留めるための小さい柱の穴もみつかりました。南側の壁際には２つの柱穴がみつかり、入り口ではないかと考えています。ふつう、竪穴住居の入り口は梯子をかけたといわれています。

柱穴に残された柱材の痕の層には、焼け土の粒が沢山入り込んでいました。床面には焼けて表面が剥がれたり赤くなった土器や石包丁などが置き去りにされていました。このほか、焼け残った　屋根材があったことなどから、この住居跡に住んだ人たちが、住居を離れるとき火をつけて焼いたことがわかります。いったい何のために住み慣れた家に火をつけたのでしょうか。

調査が進むにつれて、住居跡の形がゆがんでいることや炉跡が中央にないこと



第１・２号住居跡

から、この住居跡が１軒ではないのではないかと思い、床面をきれいにしてみました。床面には埋め戻された壁際の溝跡がくっきりとあらわれました。こうして第１号住居跡が、はじめに建てられた第２号住居跡を広げて建て替えたものであることがわかりました。

第２号住居跡は直径６ｍ弱の円形で、中央に炉跡をもち、周囲に７本の柱を立てた穴の跡がみられます。第１号住居跡の炉跡が中央になかったのは、第２号住居跡の炉をそのまま使っていたためでした。柱の太さはやはり直径２０ｃｍ程度でしたが、第１号住居跡より柱穴が深くて丁寧に掘られていました。また、家を建て直すにあたっては、古い上屋に火をつけたらしく、柱穴には焼けた土の粒が沢山入り込んでいました。

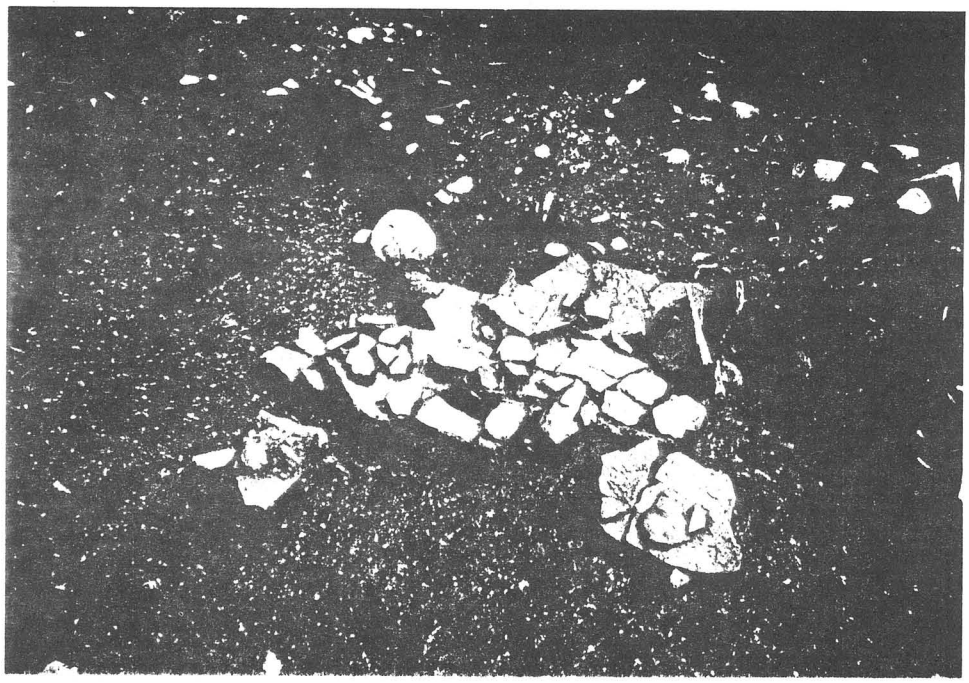
住居跡の東側には幅２ｍ、深さ０．５ｍほどの第４号溝跡がみつかりました。幅の割に浅い溝で水の流れた痕跡はみられません。溝の中からは土器の破片に混じってミニチュアの壺がみつかりました。お祭りでもしたのでしょうか。

住居跡の西側には、掘立柱建物跡が３棟みつかっています。どれも直径１５ｃｍ程度の柱材を用いたもので、２間×３間、１間×２間の構造をしています。柱間は約１．３ｍ程度です。柱穴からは竪穴住居跡と同じ２０００年前頃の土器片がみつかります。倉庫跡や平地式の住居跡ではないかと考えています。

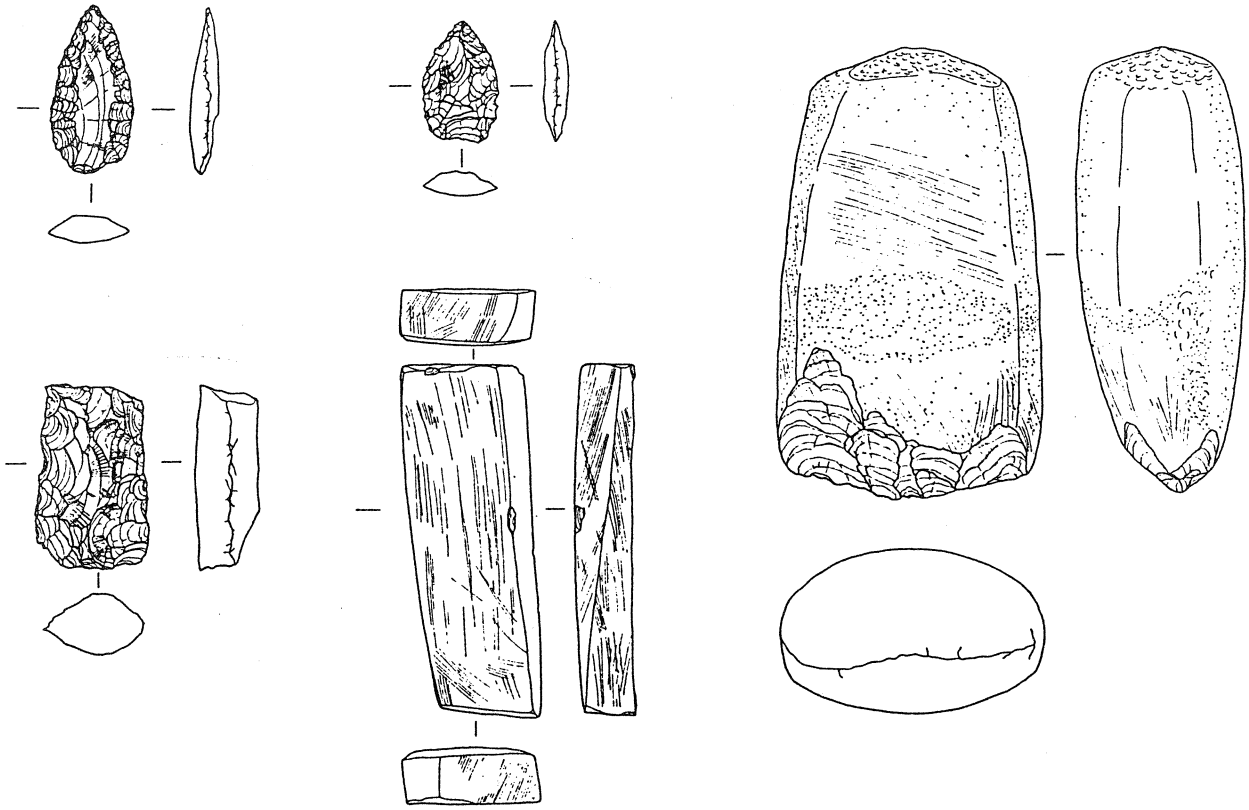
このほか、１０ｃｍほど上の地層では江戸時代後期、１９世紀頃から明治時代頃まで続いて耕作された水田跡がみつかっています。隣接する小路市場では縄文時代の遺物も発見されました。

今回の調査で、銅鐸をもつ集落としての本山遺跡の重要性が改めて認識できました。私たちの足下から本山地区の歴史がよみがえりつつあります。こうした調査の成果が、復興の活力となることを願ってやみません。

調査風景

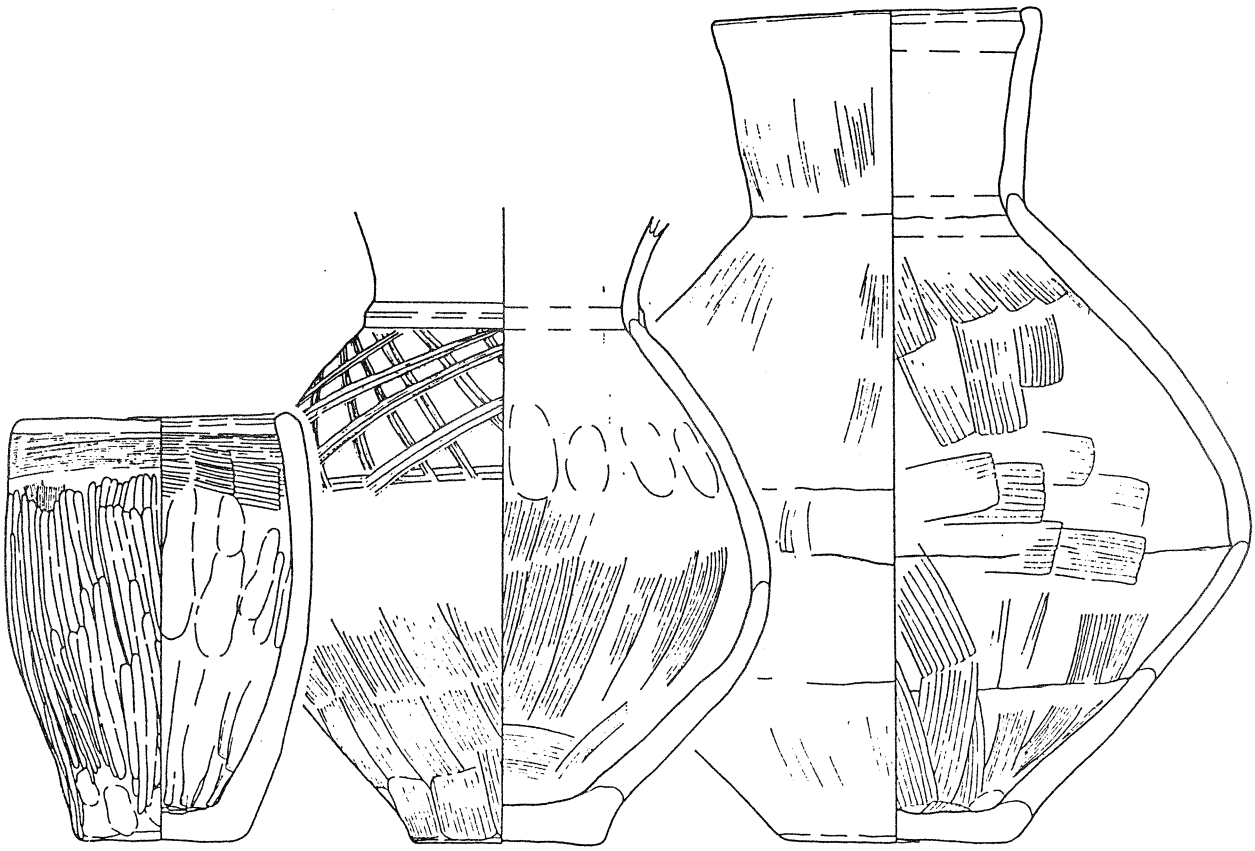


土器出土状態



出土した石器

（左上：石鏃、左下：石槍、中下：砥石、右：石斧）

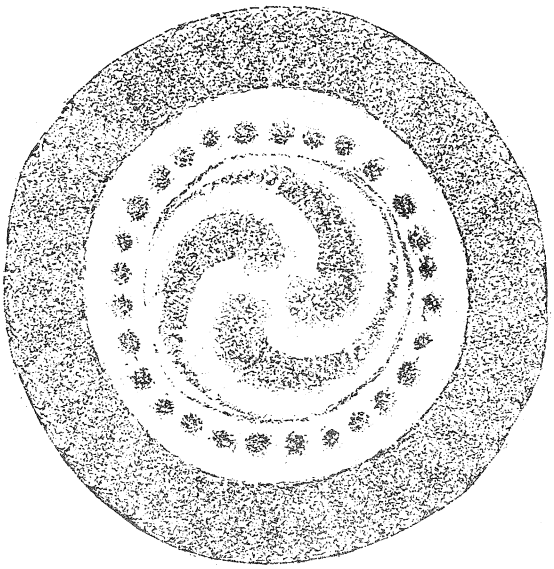


出土した土器

頭高山遺跡

—第5次発掘調査—

現地説明会資料



平成8年11月10日

神戸市教育委員会
(財)神戸市スポーツ教育公社

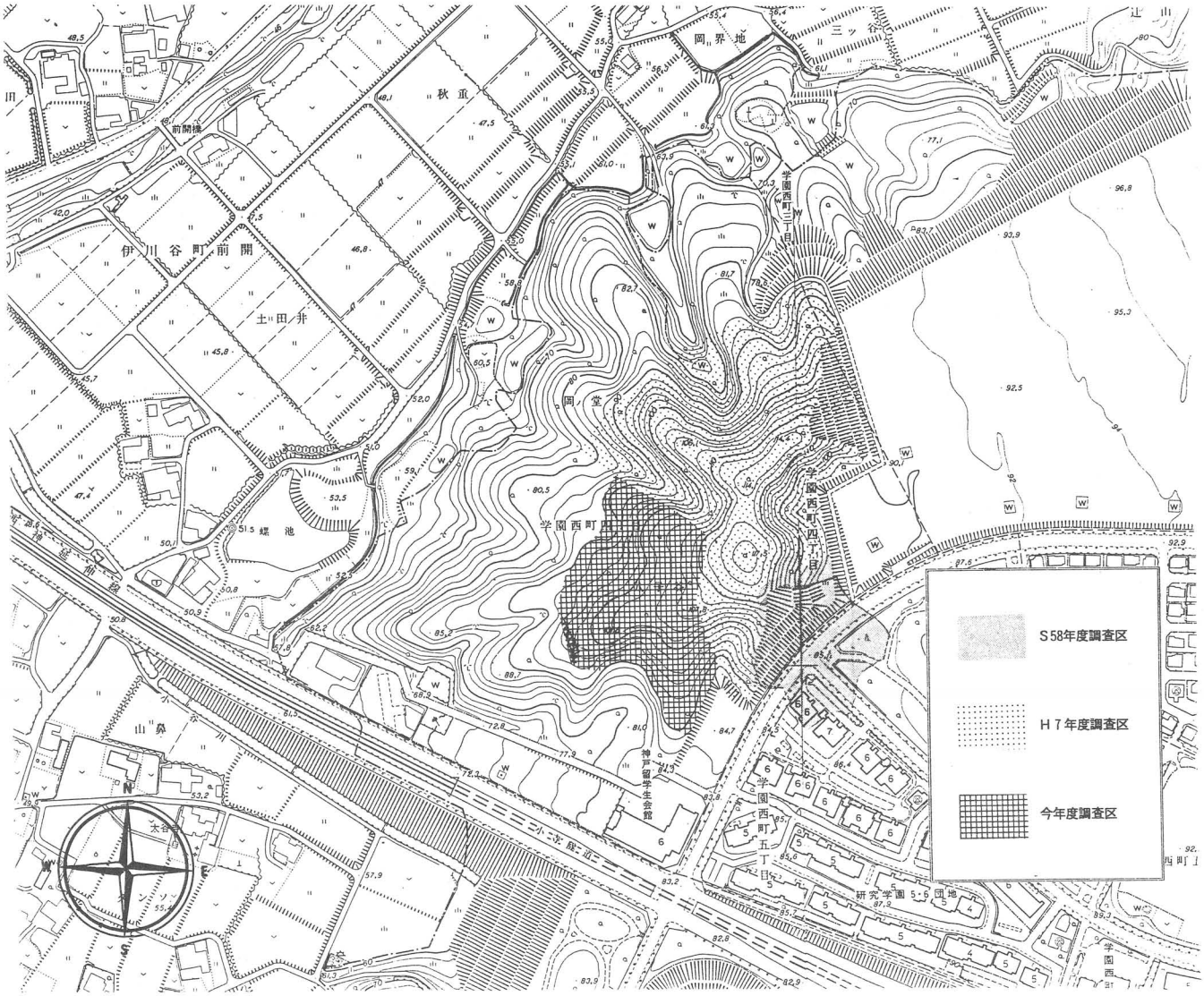
調査にあたっては、京都大学工学部助教授・山岸　常人、立命館大学文学部教授・和田　晴吾、神戸女子短期大学文学部教授・檀上　重光の各先生にご指導とご教示をいただきました。
また、港湾整備局　新都市整備本部のご協力をいただきました。

（表紙　　３号基壇出土　三巴文軒丸瓦）

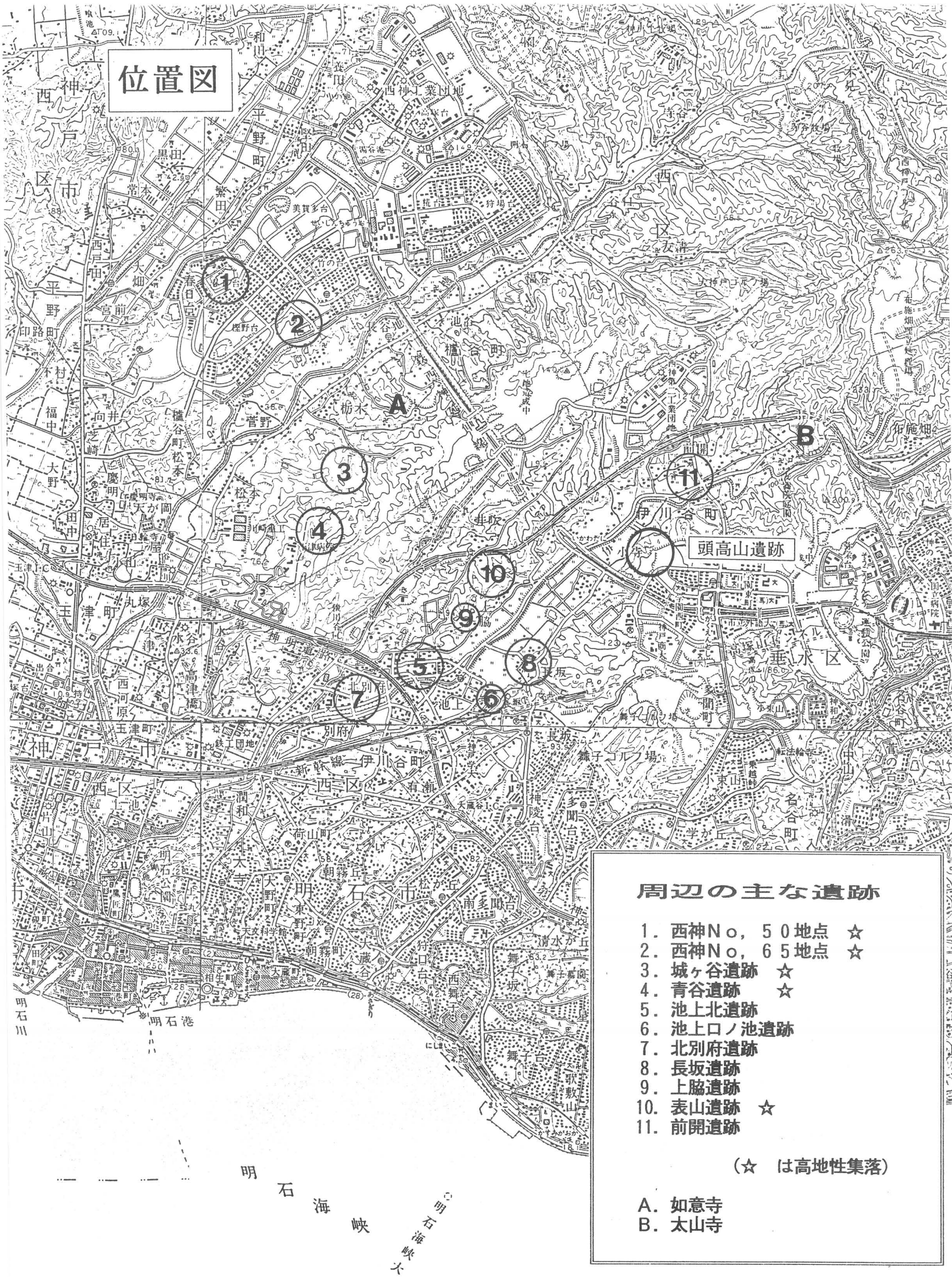
1．はじめに

頭高山遺跡は昭和53年に発見された遺跡です。当時行われた試掘調査の結果によって山上に弥生時代の村と、中世の建物が存在すると考えられていました。昭和57、58年度に山の東半分について本格的な発掘調査が行われ、竪穴住居や土器棺墓などが存在していたことが確認されています。その際、石を磨いてつくった剣が出土したことでよく知られており、この地域の典型的な高地性集落として有名になりました。

その後、更に西半分についても詳しく試掘調査を行った結果、中世の建物については、室町時代（14～15世紀）の山岳寺院の跡ではないかと考えられるようになりました。今回の調査は平成７年４月６日から開始していますが、これは震災復興事業の一環として住宅供給を目的とした宅地造成工事を行うために、事前に実施している発掘調査です。



第１図　調査範囲位置図（Ｓ＝１／5000）



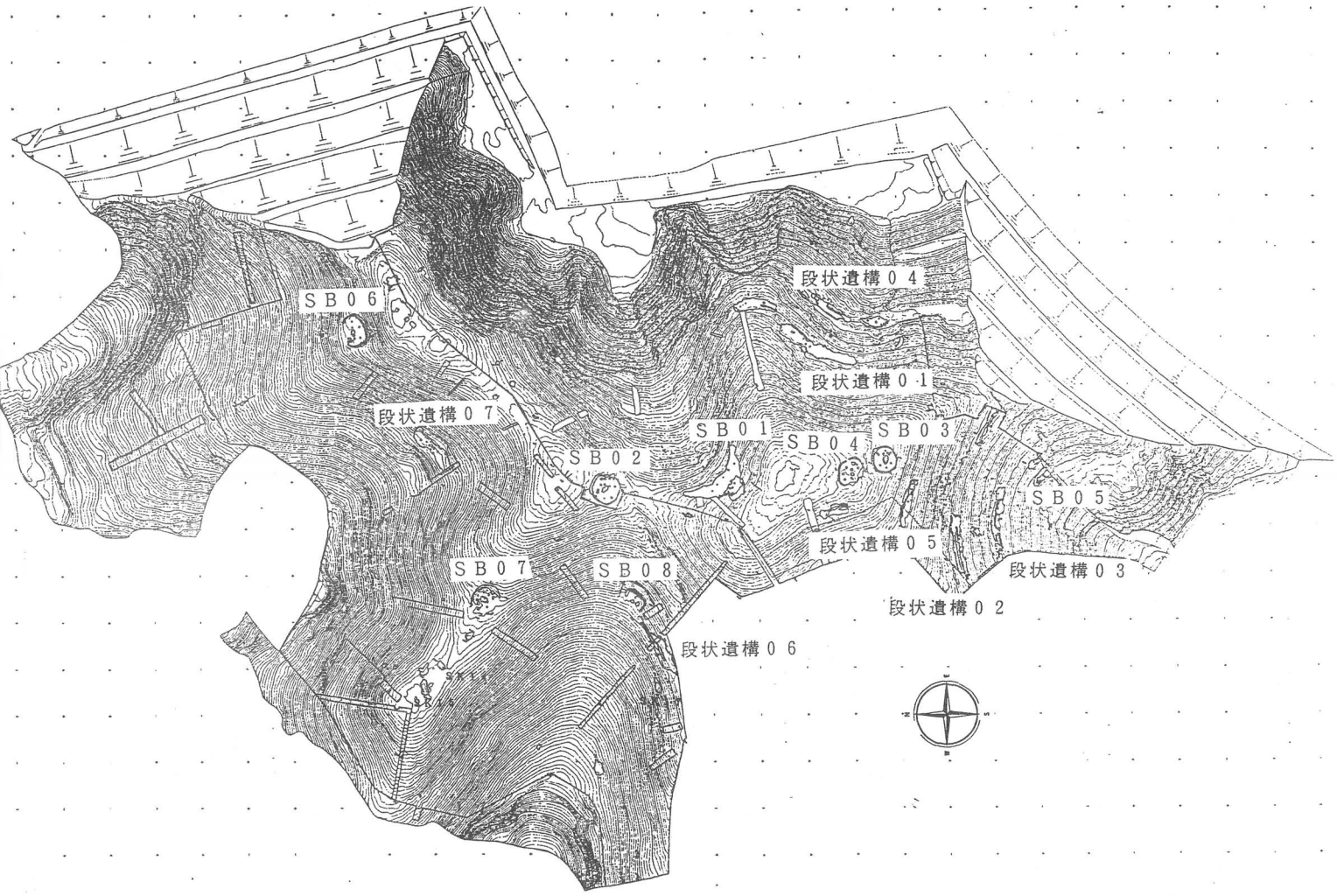
第2図 周辺の遺跡（S＝1／50000）

2．周辺の遺跡　伊川や谷を一つへだてた櫨谷川の流域には、数多くの遺跡が分布しています。それらのうち、頭高山遺跡とおなじ、弥生時代の高地性集落としては、西神ニュータウン内に存在する西神ＮＯ．65地点遺跡をはじめ、城ケ谷遺跡や青谷遺跡、また、つい最近発見され堀を巡らす高地性集落として有名になった表山遺跡などがあります。

頭高山遺跡のふもとを流れる伊川の流域には、古刹太山寺があり中世の本堂が現存しています。また櫨谷川の流域には、同じく中世から続く天台寺院である如意寺も存在しています。

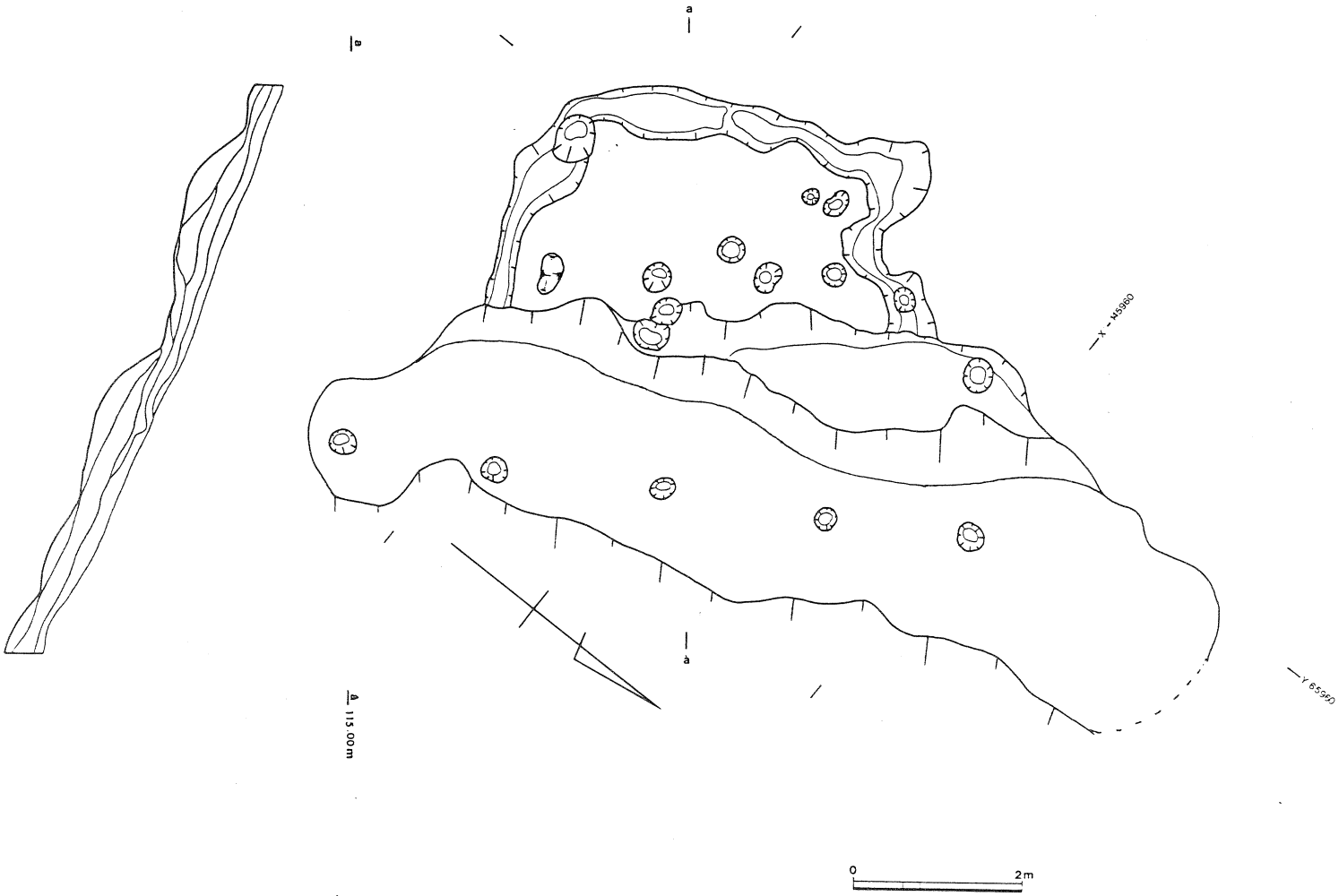
3．調査の概要　今回の調査対象面積は、山のほぼ半分、約５㌶にも及びます。そのうち現在までに調査が終了しているのは、北半2.5㌶です。残りの地区のうち、山岳寺院のある２㌶について現在も調査を続けている所ですが、いままでの調査でしだいに遺跡の実態が明らかになってきました。

弥生時代　今までの調査で、おもに山の北半2.5㌶の調査区から、８軒の弥生時代の竪穴住居の跡や、「段状遺構」とよばれる遺構が７か所見つかっており、弥生時代にこの山のうえに人が住んでいたと考えられます。



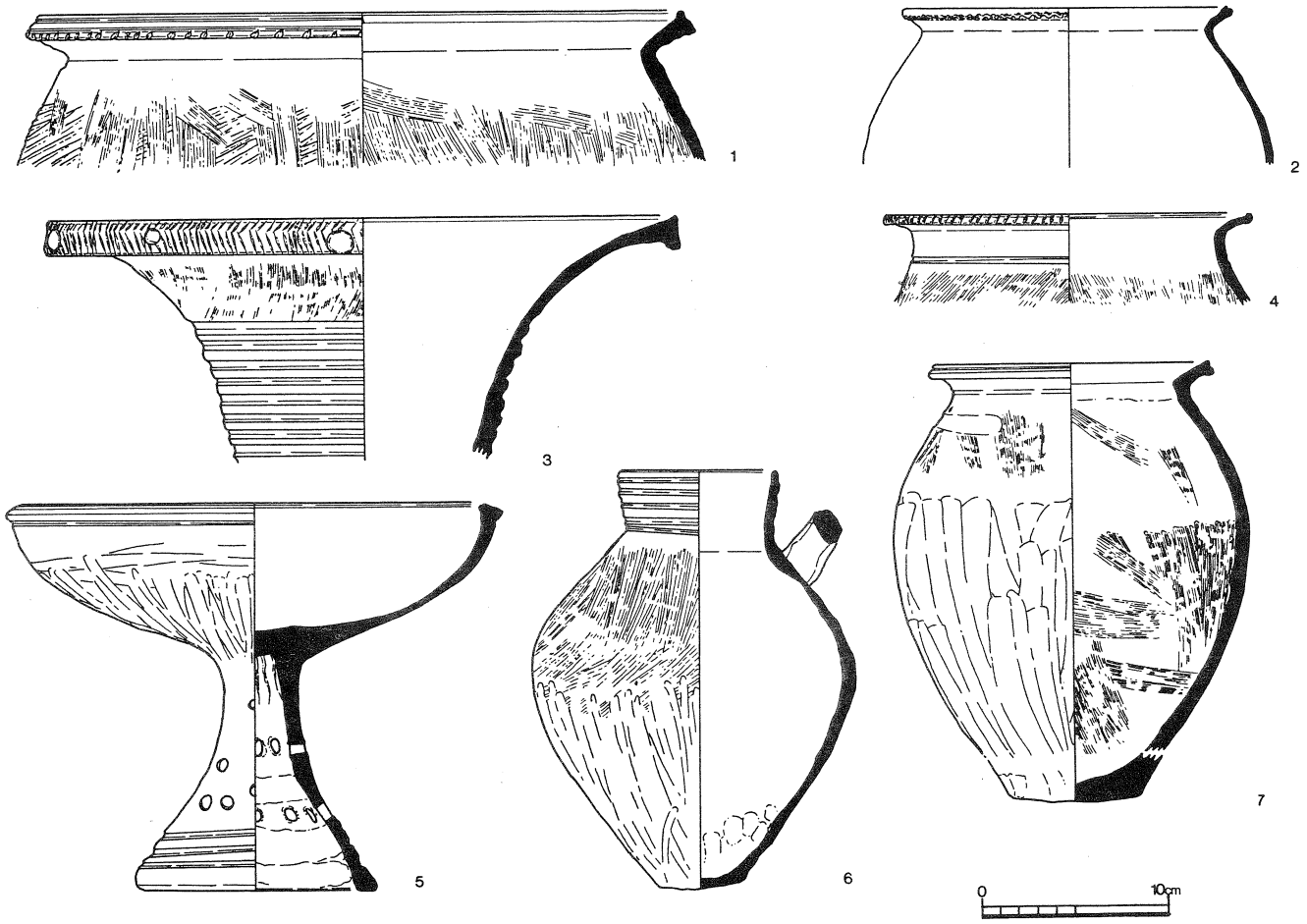
第３図　95年度調査区平面図（Ｓ＝１／1000）

「段状遺構」とは、山の斜面を一部削って長細い平らな地面に造り替えているもので、横からみると階段の段のようなのでこの名前で呼ばれています。弥生時代の人々が何のためにこのような平坦地を築いたかははっきりとはわかっていませんが、「斜めで歩きにくい山を平らに削ることで歩きやすくした」道であるとか、「山の斜面が地崩れしないように杭や板で土留めした跡である」あるいは「掘立柱建物の跡である」などといろいろな説が考えられています。頭高山遺跡で今までに見つかっている段状遺構は、どれも１ｍ程度の幅で、長さは10ｍくらいの大きさのものですが、平らな面のすみに幅10cm程度の細い溝があり、直径20cmくらいの丸い穴が、いくつか溝にそって等間隔に並んでいるのが特徴です。このような形の遺構は、神戸市内では西区の西神ニュータウンＮＯ．65遺跡や最近発見された表山遺跡、三田市の奈カリ与遺跡などでも確認されています。
また、頭高山遺跡で発見された弥生時代の竪穴式住居の跡は、山の尾根や斜面など色々な場所から見つかっていますが、山の斜めな地面に家を建てるために、地面を段に削り、杭をうって板か枝を横に渡し土が流れないようにして、さらにその上に土を盛って平らな面をつくって家を建てたと思われる杭の跡なども確認されています。このような住居のあとは、人が住まなくなって長い月日が立つうちに盛った土が流れてしまい、発掘するともとの地面を堀りこんだ部分だけが、半月形で見つかります。



第４図　１号住居平面図

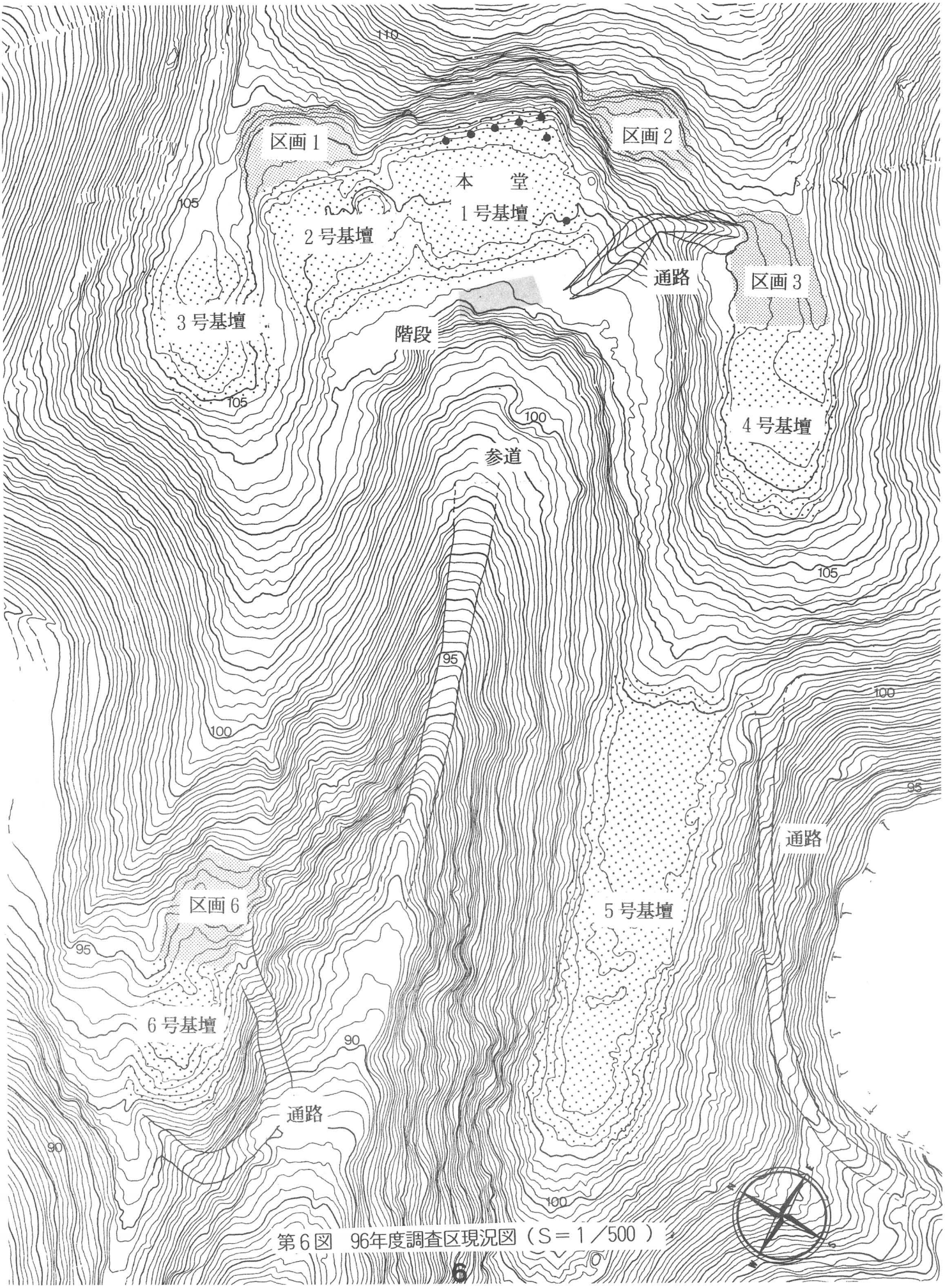
4



第５図　頭高山遺跡出土の弥生土器

では、どうして弥生時代の人たちは、こんなに苦労して山の上に村を造ったのでしょうか？山の下の平地でなく、わざわざ山の上に住まなくてはならない事情があったと考えられますが、もっとも有力な説は弥生時代に大きな戦争があって、「ふもとの人々が攻めてくる敵から身を守るために山に逃げ込むための村である」というものです。
人々は戦火をのがれるために、平地の田や村を捨てて住みにくい山の上に村をつくったのかもしれません。このような、弥生時代につくられた山の上の村を考古学の言葉で「高地性集落」と呼んでいます。

弥生時代の高地性集落である頭高山遺跡からは、弥生時代中期の土器〔Ⅳ様式〕が出土しており、このごく限られた時期にだけ村が存在していたと考えられます。また、土器以外に石鏃（矢尻）や石斧などの石器が出土しています。一般に高地性集落は戦いに関係ある遺跡であり、武器としての石鏃などが多く出土すると考えられていますが、今回の調査では、石鏃、サヌカイト片など武器を思わせるものは普通の小集落程度の数しか出土していません。逆に磨製石包丁など農耕に関係する遺物もわずかですが出土しています。このことは高地性集落の性格を考える上でも重要な問題でしょう。



第6図　96年度調査区現況図（S＝1／500）

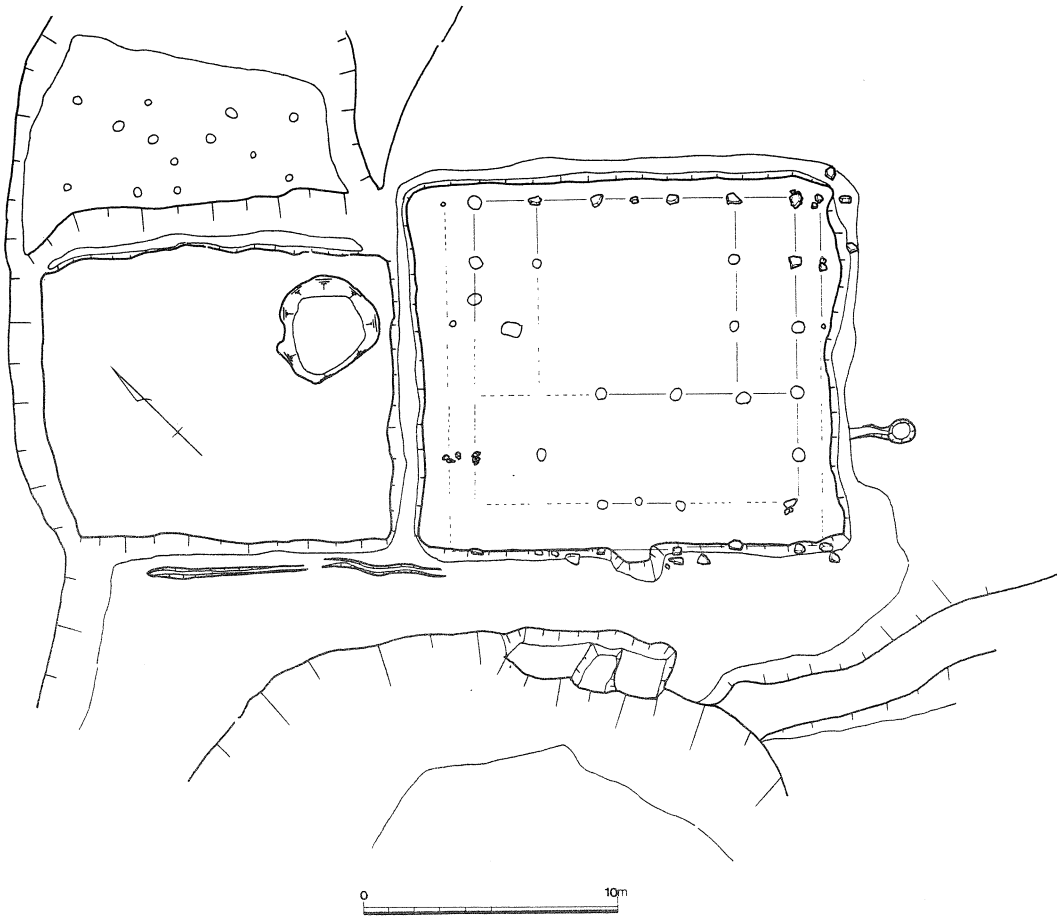
中世　　現在調査中の地点では、室町時代頃から存在していたと思われるの寺院の跡が確認されています。

このお寺は、頭高山の頂上から南西方向に開ける２本の尾根と、その間にはさまれた谷を利用して築かれています。古代から中世にかけては、このように仏教の修行の場を求めて、山深いところにたくさんのお寺が造られるようになります。このようなお寺を一般に「山岳寺院」といいます。

それでは頭高山遺跡にあったお寺はどのようなものだったのでしょう。

まず目につくのは、２本の尾根がのびる山の中腹にひろがる平坦面です。ここは頂上部近くから中腹までを切り崩し、その土を谷に埋め込んで平らにするという大がかりな整地を行って造られています。ここは信仰の中心部分であったと考えられ、本堂をはじめ、お寺の中心的な建物が存在していたようです。

本堂は、16m×12m、高さ１mほどの、土で築いた台の上に造られていたと考えられます。このような建物の基礎になる土台のことを、建築の専門的な言葉で「基壇」といい、頭高山遺跡では、本堂が建っていたと推定されるものを「１号基壇」と呼んでいます。この基壇の上では、礎石がいくつかみつかりました。礎石とは、建物の柱を支える台になる石で、礎石の配置から建物の柱の間合いが、間口５間、奥行き５間の規模で、前面と両側面に縁を巡らせる構造であったことがわかりました。この建物は火災にあったらしく、基壇や礎石に焼け跡がみられます。



第７図　１・２号基壇平面測量図　（S＝１／300）

7

また火災にあってから比較的早い時期に、背後の斜面の土砂崩れによって、建物の後ろ1／3ほどが埋もれたらしく、この部分は後世の削平を免れて礎石や焼け落ちた壁土がよく残っていました。

1号基壇の北隣には、12m×11mとやや小振りな2号基壇があります。この上にも建物が建っていたと考えられますが、風雨によって台の土は削られてしまい、柱跡などはなくなってしまったようです。

この他に、1号基壇のななめ上方には、約8m四方の、建物を建てるために斜面を削り込んで整地した「区画1」と呼んでいる平坦面や、1号基壇の後ろにも同様に12m×8mの「区画2」が造られています。尾根に挟まれた谷の部分は参道として利用されていたようで、1号基壇の正面には参道に続く階段の取り付きと思われる掘り込みがあります。しかし、階段本体は盛土で造られていたらしく、長い間に流れてしまい確認できませんでした。

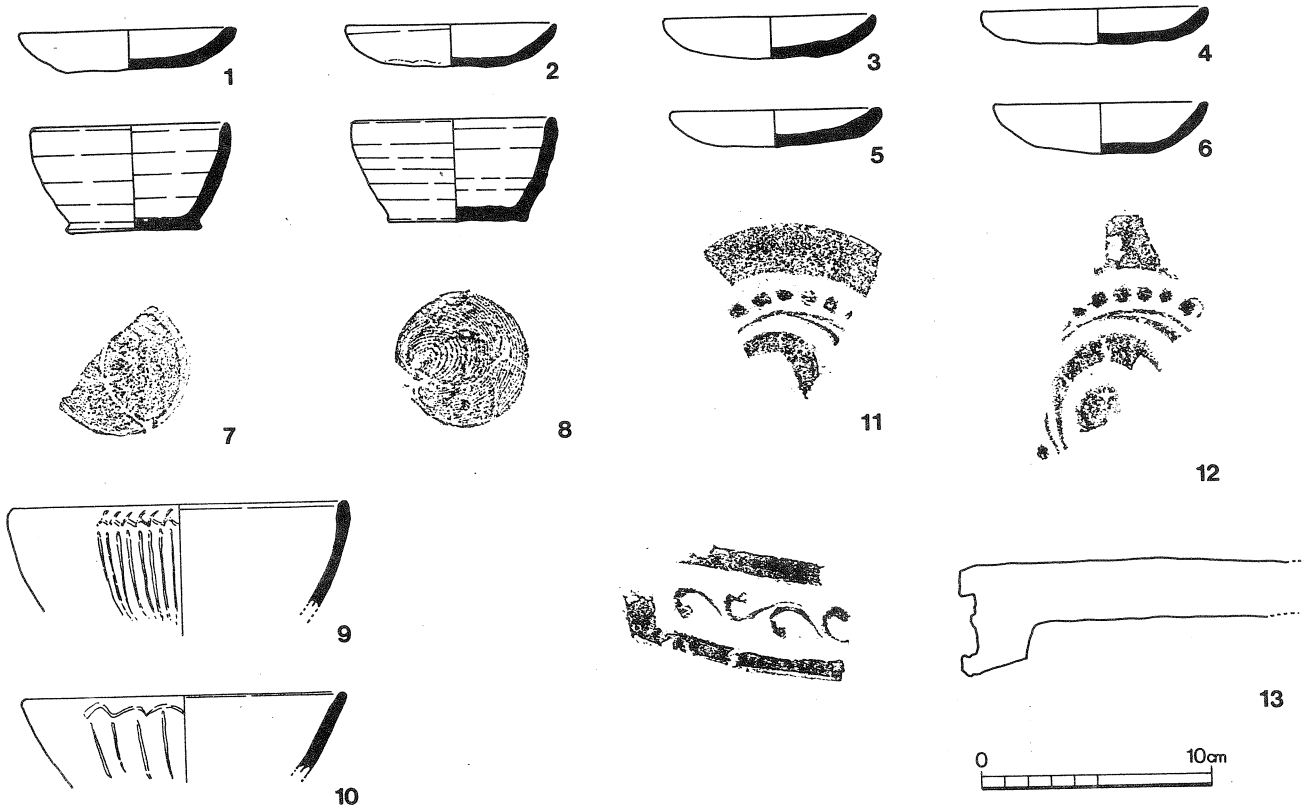
まだ調査の終了していない両尾根上においてもいくつかの基壇や区画が認められます。特に5号基壇と呼んでいる場所は、尾根筋を長さ50mにもわたって平坦に整形したものです。これらの基壇や区画には、お寺のお坊さんたちの生活や修行場に関係する施設が建っていたようです。

このように、山のなかで寺院を営むことは、当時にしては大規模な工事が必要であったと考えられ、そのことからもお寺の財力がしのばれます。

太山寺の所有する鎌倉時代の古文書のなかに「頭高山太谷寺」という名前の寺が幾度か登場し、当時太山寺とともに伊川の周辺に田畑を所有して、そのあたりに勢力をもっていたことが知られています。また現在、伊川谷小寺の集落の中に太谷寺と言う名前のお寺が存在し、言い伝えでは「もともと寺は頭高山の山中にあったが、戦国時代の兵火により焼かれた」と言われています。

今回発見された寺が、これらの記述にある「頭高山太谷寺」と一致すれば、文書によってのみ知られていた寺院を、考古学的に証明したことになり、非常に貴重な発見であるといえます。

8



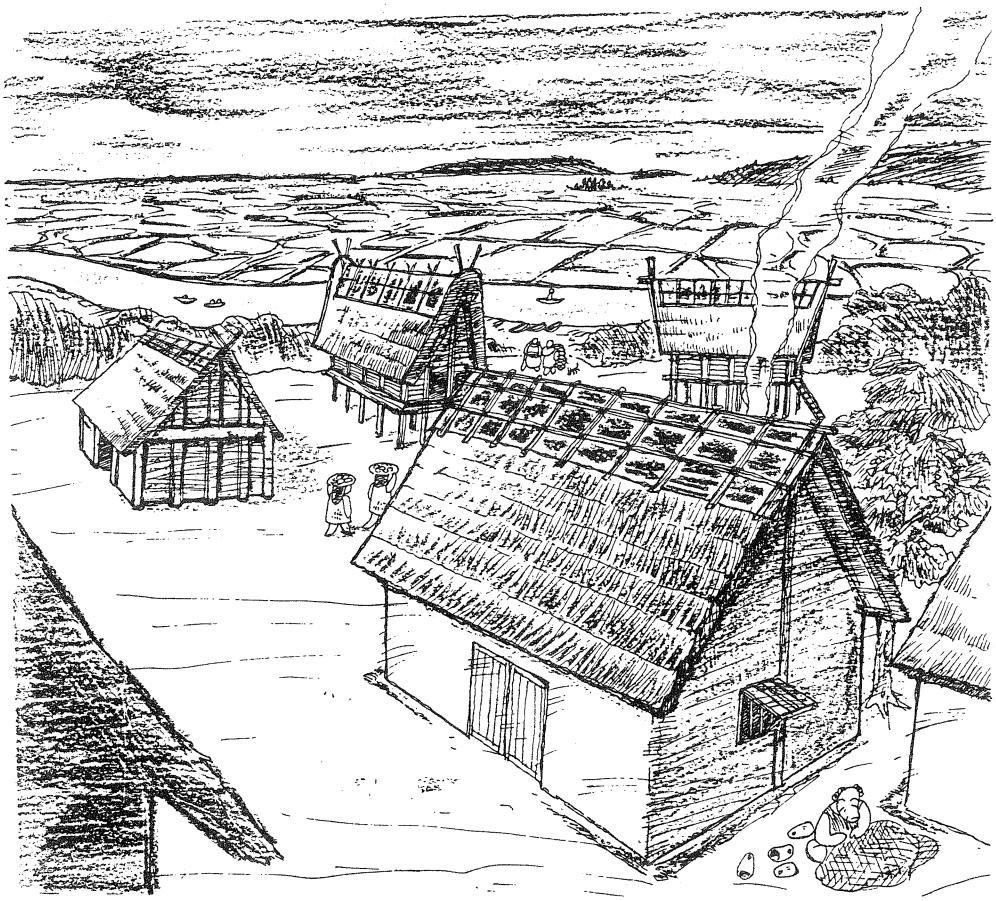
1～8　土師器　　9・10　青磁
11・12　軒丸瓦　　13　軒平瓦

1～6　1号基壇周溝　　11　3号基壇
7・8　1号基壇焼土層　　12　4号基壇
9・10　1号基壇　　13　7区表土

第8図　頭高山遺跡出土の中世遺物

寒鳳（かんぷう）遺跡第２次調査

現地説明会資料



平成８年１１月１６日

神　戸　市　教　育　委　員　会

（財）神戸市スポーツ教育公社

今回の調査については，神戸市文化財専門委員　立命館大学文学部教授　和田晴吾先生
同　京都大学大学院工学研究科助教授　山岸常人先生のご指導をいただきました。
また，神戸市都市計画局の協力を得ています。

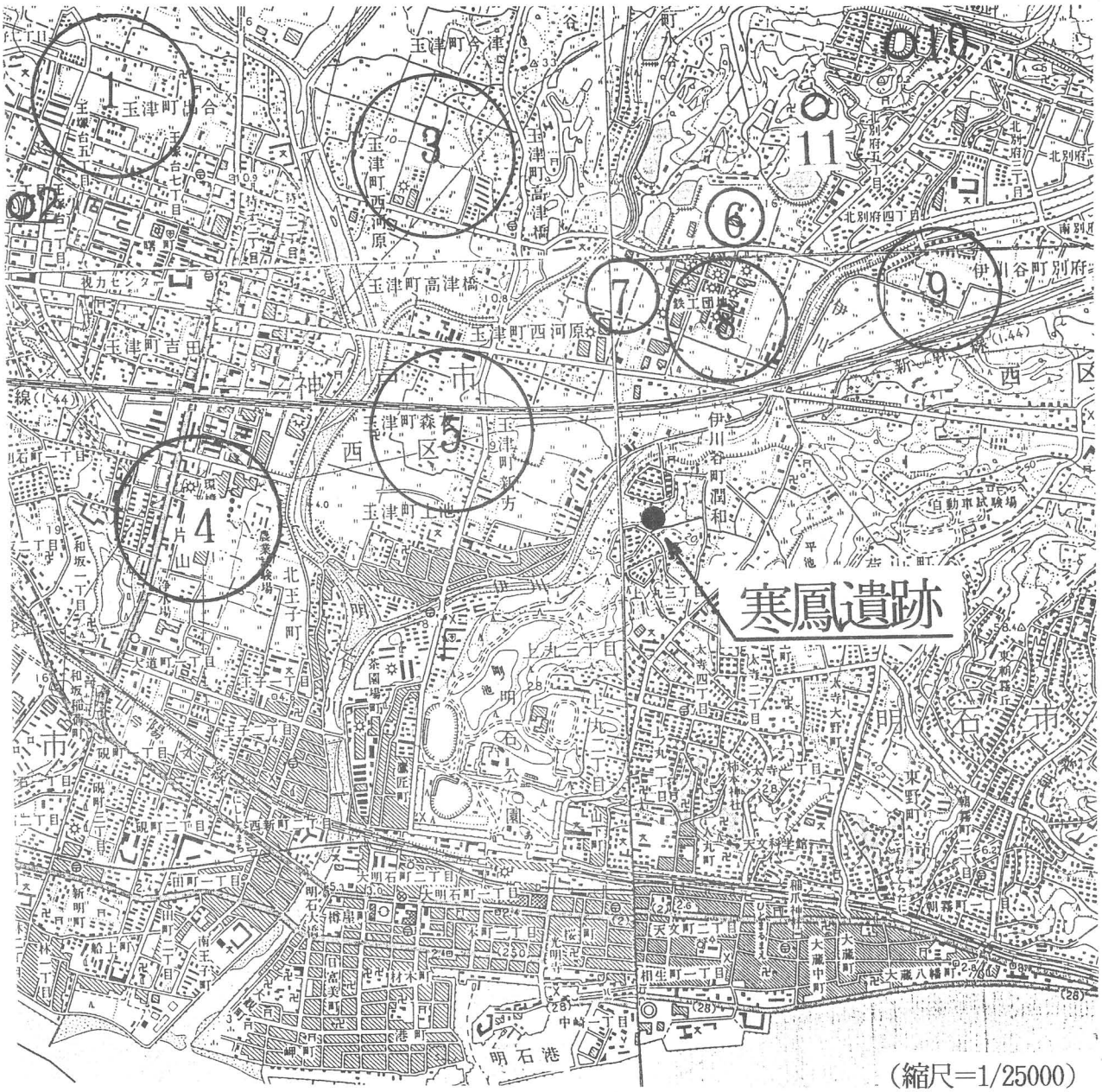
（表紙は，寒鳳遺跡の遺構をもとにした当時の村の様子の想像図です。）

1．はじめに

寒鳳遺跡は，西区伊川谷町潤和字寒鳳にあります。眼下に伊川を見下ろす標高23mの台地上に立地しています。

周辺には，新方遺跡や白水遺跡など弥生時代から古墳時代にかけての大きな遺跡があります。この遺跡は，平成７年度に初めて発見され，小字名から寒鳳遺跡と名付けられました。

その時の調査では平安時代後期（10世紀後半～11世紀前半）の掘立柱建物が６棟見つかり，須恵器，土師器，青磁，白磁，瓦などの遺物も多数出土しています。



１：出合遺跡　２：王塚古墳　３：今津遺跡　４：吉田南遺跡　５：新方遺跡

６：白水遺跡　７：今池尻遺跡　８：潤和遺跡　９：南別府遺跡　10：天王山古墳群

11：白水瓢塚古墳

図１　寒鳳遺跡と周辺の古墳時代の遺跡

図２　寒鳳遺跡発掘調査位置図

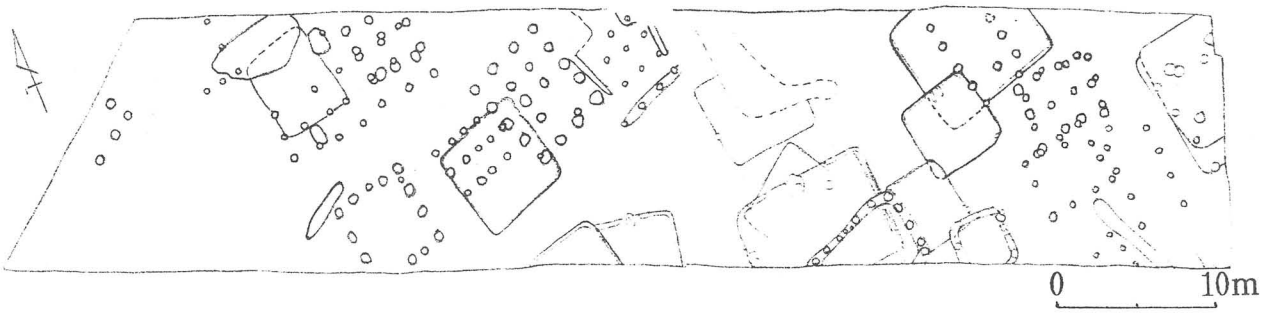


図３　１区遺構平面図

2．調査の概要

今回の発掘調査は道路建設に先立って平成８年７月より実施しているもので，第２次調査になります。

工事の影響部分にあたる約2,400 ㎡を発掘調査している途中ですが，古墳時代後期（６世紀初め～６世紀中頃）を中心とする大きな集落の跡であることが分かってきました。

調査地が細長いため，１区，２区に分けて調査を実施していますが，今回現地説明会を行う地区は１区と呼んでいるところです。この部分で検出されたものは，竪穴住居(たてあなじゅうきょ)15棟，掘立柱建(ほったてばしら)物15棟，大壁造(おおかべ)り建物２棟，溝(みぞ)，土坑(どこう)，ピット等多数です。

竪穴住居

このうち竪穴住居は，地面を掘り込んだ上に屋根をかけた家の跡ですが，大部分が削平を受けていたため遺存状況が悪いです。竪穴住居からは，６世紀初めから６世紀中頃にかけての土器が多く見つかっているので，この時期の竪穴住居であろうと思われます。また，近接した場所に重なって見つかるものは建て替えが行われたことを示しています。

この時期の竪穴住居は通常一辺５～６ｍのものが中心で，正方形のものですが，寒鳳遺跡では一辺９ｍもある大きな竪穴住居や長方形のものも見つかっています。これは非常に珍しいものです。また，ここでは竈(かまど)を持つ住居が４棟ありますが，竈の中からは煮炊きに使った甕(かめ)や，それを下から支える支脚(しきゃく)（台）として転用された高杯(たかつき)がほぼ完全な形で見つかっています。

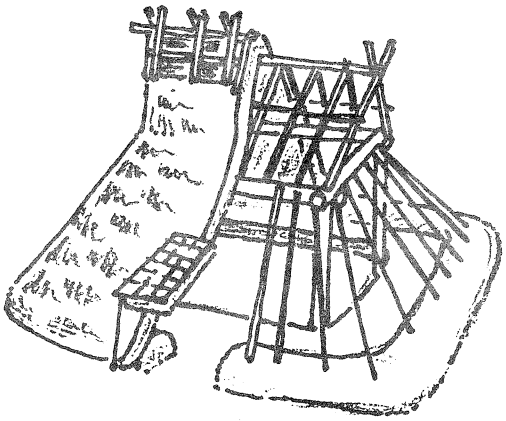


図４　竪穴住居模式図

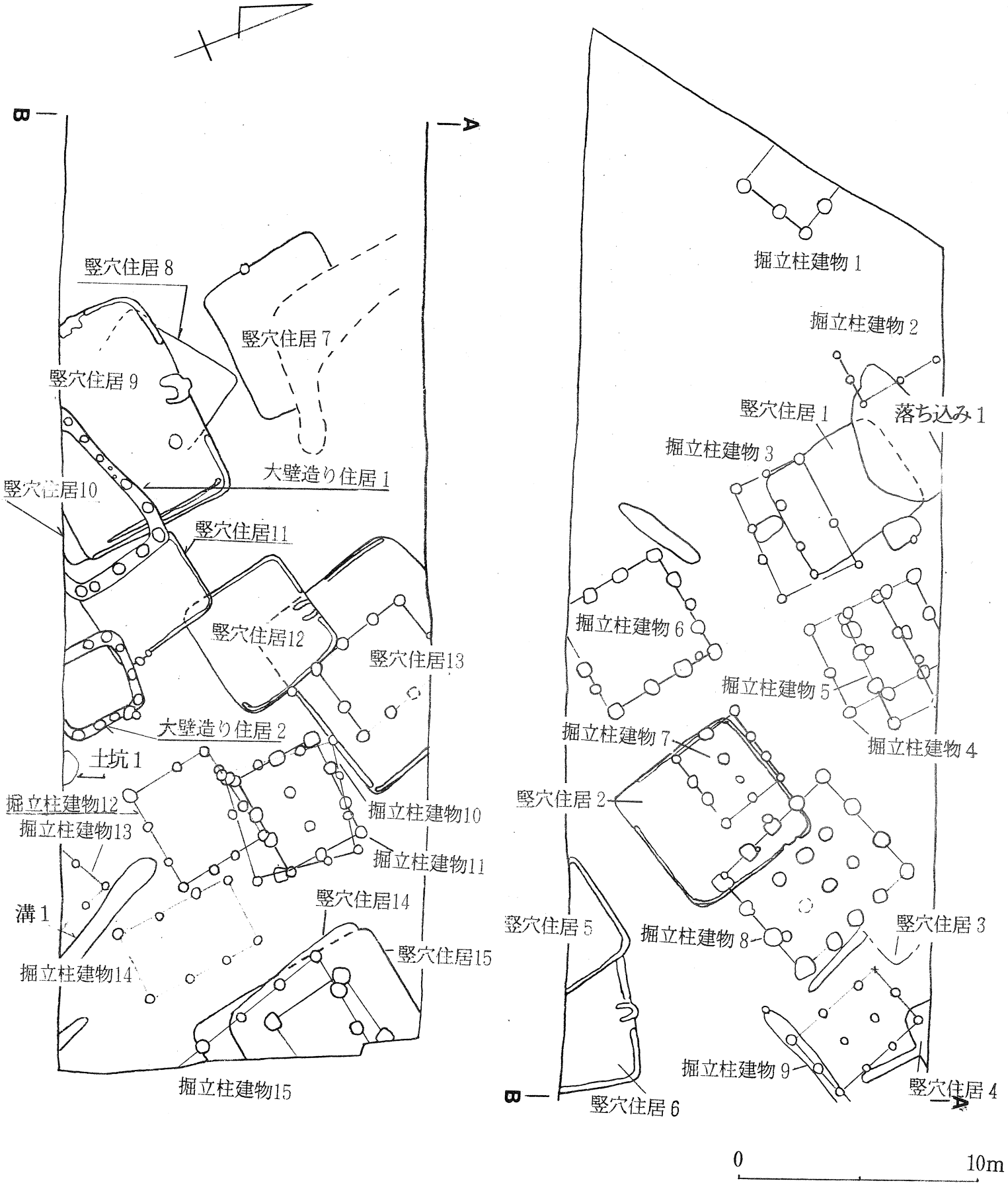

B
A
竪穴住居 8
竪穴住居 7
竪穴住居 9
大壁造り住居 1
竪穴住居10
竪穴住居11
竪穴住居12
竪穴住居13
大壁造り住居 2
土坑 1
掘立柱建物12
掘立柱建物13
掘立柱建物10
掘立柱建物11
溝 1
竪穴住居14
竪穴住居15
掘立柱建物14
掘立柱建物15
掘立柱建物 1
掘立柱建物 2
竪穴住居 1
落ち込み 1
掘立柱建物 3
掘立柱建物 6
掘立柱建物 5
掘立柱建物 7
掘立柱建物 4
竪穴住居 2
竪穴住居 5
掘立柱建物 8
竪穴住居 3
掘立柱建物 9
竪穴住居 4
竪穴住居 6
0
10m

図5　1区遺構平面図

	東西×南北　(m)	面積（㎡）
竪穴住居1	4.8×5.8	27.84
竪穴住居2	6.2×6.2	38.44
竪穴住居3	1.3以上×0.8 以上	——
竪穴住居4	2.1以上×1.2 以上	——
竪穴住居5	4.8×3.6 以上	——
竪穴住居6	5.6以上×4.5 以上	——
竪穴住居7	5.9×5.9	34.81
竪穴住居8	5.0×4.8	24.00
竪穴住居9	9.1×6.9	62.79
竪穴住居10	0.5以上×0.7 以上	——
竪穴住居11	3.7以上×5.0	——
竪穴住居12	5.0×5.2	26.00
竪穴住居13	7.7×8.4	64.68
竪穴住居14	5.6以上×6.9	——
竪穴住居15	5.5以上×9.0	——

	桁行×梁間　(m)	面積（㎡）
掘立柱建物1	2間(3.2) ×1間(1.5) 以上	——
掘立柱建物2	2間(3.2) 以上×2間(3.9) 以上	——
掘立柱建物3	3間(5.0) ×2間(3.4)	17.0
掘立柱建物4	3間(5.0) 以上×2間(3.85)	——
掘立柱建物5	3間(5.0) ×1間(1.7) 以上	——
掘立柱建物6	4間(4.75)×3間(4.9)	23.28
掘立柱建物7	3間(3.4) ×2間(3.25)	11.05
掘立柱建物8	4間(6.4) ×3間(5.25)	33.60
掘立柱建物9	3間(4.65)×2間(3.0)	13.95
掘立柱建物10	3間(4.75)×3間(4.75)	22.56
掘立柱建物11	3間(4.25)×2間(3.35)	14.24
掘立柱建物12	3間(4.65)×3間(3.8)	17.67
掘立柱建物13	1間(1.5) 以上×1 間(1.0) 以上	——
掘立柱建物14	3間(5.2) ×1間(3.0)	15.60
掘立柱建物15	3間(6.2) 以上×2間(3.4) 以上	——

	東西×南北（m）	面積（㎡）
大壁造り建物1	6.5 ×4.7	30.55
大壁造り建物2	3.0 ×3.4	10.20

寒鳳遺跡出土建物一覧表

掘立柱建物　　掘立柱建物は，地面に掘った穴に柱を直接立てて造られた建物で，柱を立てるために掘った穴は，小さいもので直径20㎝，大きいものでは直径80㎝もあり，柱と柱の間は1.5 ～1.8mあります。これらの掘立柱建物は，住居として使用されたものと倉庫として使用されたものの2種類あり，側柱(がわばしら)のものは住居，総柱(そうばしら)のものは倉庫と考えられます。

掘立柱建物の時期は，土器がほとんど見つかっていないのではっきりとはわかりませんが，竪穴住居が埋まったあとに建てられているものが多いので，竪穴住居の時期よりは多少新しいものと考えられますが，竪穴住居と掘立柱建物が並んで建っていた時期もあったものと思われます。

大壁造り建物　大壁造り建物とは，柱が壁の中に塗り込められて，外面に見えない壁構造の建物のことです。

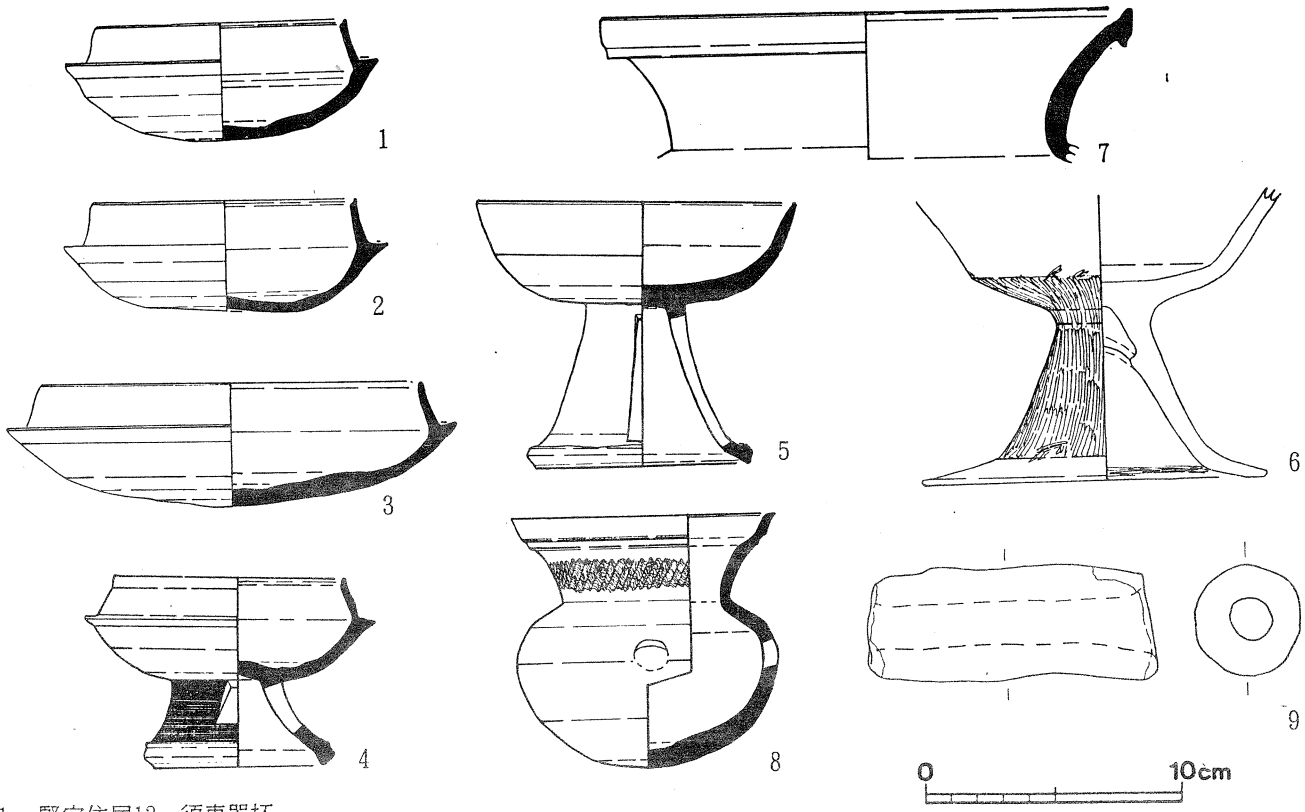
これに対して壁を柱と柱の間に納め，柱が外面に見える構造を真壁(しんかべ)造りといいます。

大壁造り建物は，まず溝を方形に堀り，柱の位置に穴を掘ります。柱を建てた後，壁の芯を造り壁を塗り上げていきます。屋根を架け，間仕切りなどの内装を行ってできあがりです。

大壁造り建物１は東西6.5m，南北4.7mの東西に長い建物で，柱間は桁行(けたゆき)５間，梁間(はりま)４間です。

一方大壁造り建物２は東西3.0m，南北3.4mの南北に長い建物で，柱間は桁行３間，梁間３間です。これらの建物の時期は，６世紀前葉よりは新しいと考えられます。

主な出土遺物



1：竪穴住居13・須恵器杯
2：竪穴住居１・須恵器杯
3：竪穴住居９・須恵器杯
4：落ち込み１・須恵器高杯
5：土坑１・須恵器高杯
6：竪穴住居８・土師器高杯
7：溝１・須恵器壺
8：溝１・須恵器はそう
9：竪穴住居１・土錘

図６　出土土器実測図

今回の調査では，多量の土器が出土しています。しかし，そのほとんどは須恵器，土師器で，日常使用されるものです。その他，魚をとる網につけられたおもりである土錘(どすい)が見つかっています。このことからこの集落に住んでいた人が海で漁をしていたと推定されます。

またこの他，祭祀に使われた臼玉(うす)も少量見つかっています。

3．まとめ

1．竪穴住居と掘立柱建物などの建物がほとんど同じ方向に配置されており，計画的に次々と建築されたと推定されます。

2．竪穴住居と掘立柱建物（住居，倉庫）が並んで建っていたことから，居住場所と貯蔵場所の区別があったことがうかがえます。

3．大壁造り建物は滋賀県湖西（こせい）地域で多く見つかっており，奈良県葛城（かつらぎ）地域，大阪府泉南地域（陶邑（すえむら）地域）でも類例が見つかっていますが，兵庫県内では初めての発見です。これらの地域は渡来系氏族が居住した伝承を持っており，渡来人が朝鮮半島から持ち込んだ住居形態であると推定されます。

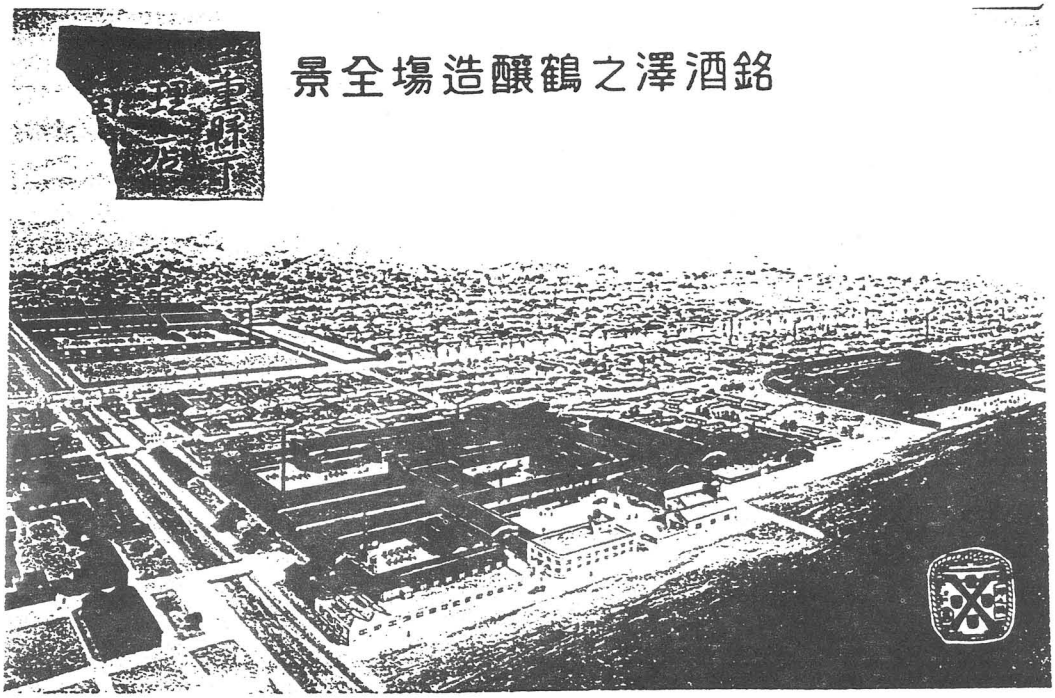
4．出土遺物から，竪穴住居から掘立柱建物（住居），大壁造り建物，と居住形態が移りかわっていく様子がうかがえます。

5．漁網に使われた土錘が多く出土しており，海にいって漁業を行っていたことが推定されます。

兵庫県指定有形民俗文化財

沢の鶴大石蔵

現地説明会資料



平成９年１月１５日

神戸市教育委員会

はじめに　沢の鶴大石蔵は灘区大石南町１丁目にあります。現在は海の埋め立てが進んでいますが、酒蔵の作られた当時は海岸線から約100mの位置にありました。

大石蔵は、有形民俗文化財として兵庫県から指定を受けていました。蔵の中には灘の酒蔵用具をならべ、昔の酒蔵の様子がわかる、「沢の鶴資料館」として公開していました。しかし、平成７年１月17日の阪神淡路大震災で残念なことに倒壊してしまいました。

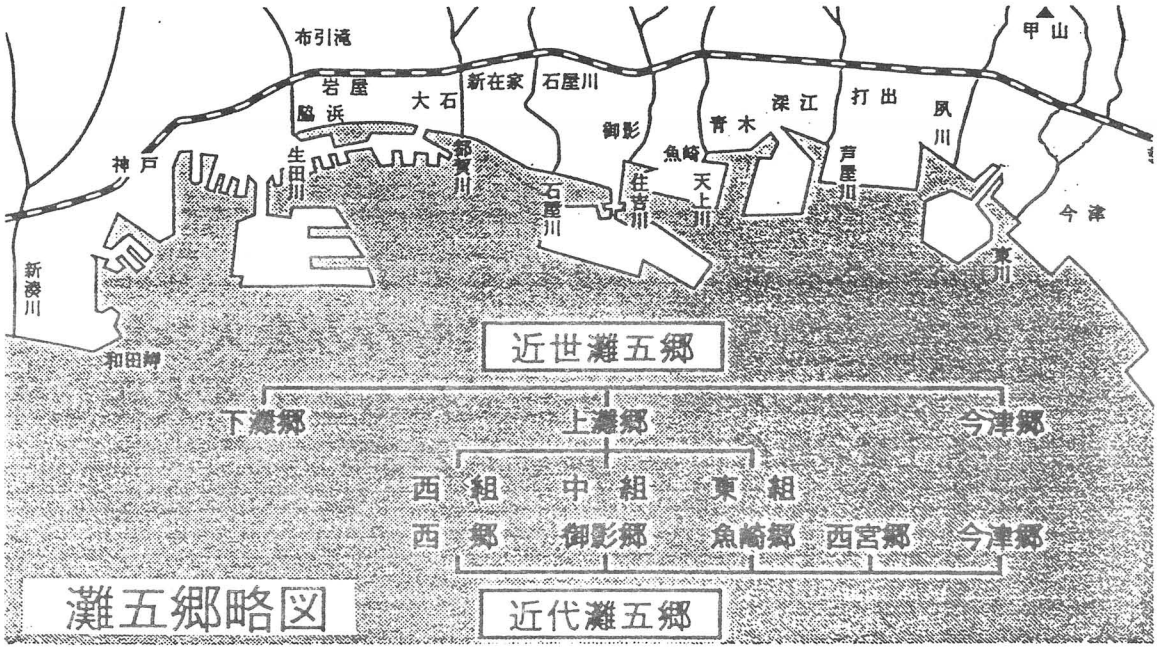
今回「沢の鶴資料館」を再建する計画に先立ち、酒蔵の地下構造と、酒蔵の前の状態を確認するための発掘調査を行いました。灘は日本一の酒処（さけどころ）として有名ですが、酒蔵の発掘調査は今回が初めてです。もちろん神戸市内でも初めての調査となりました。

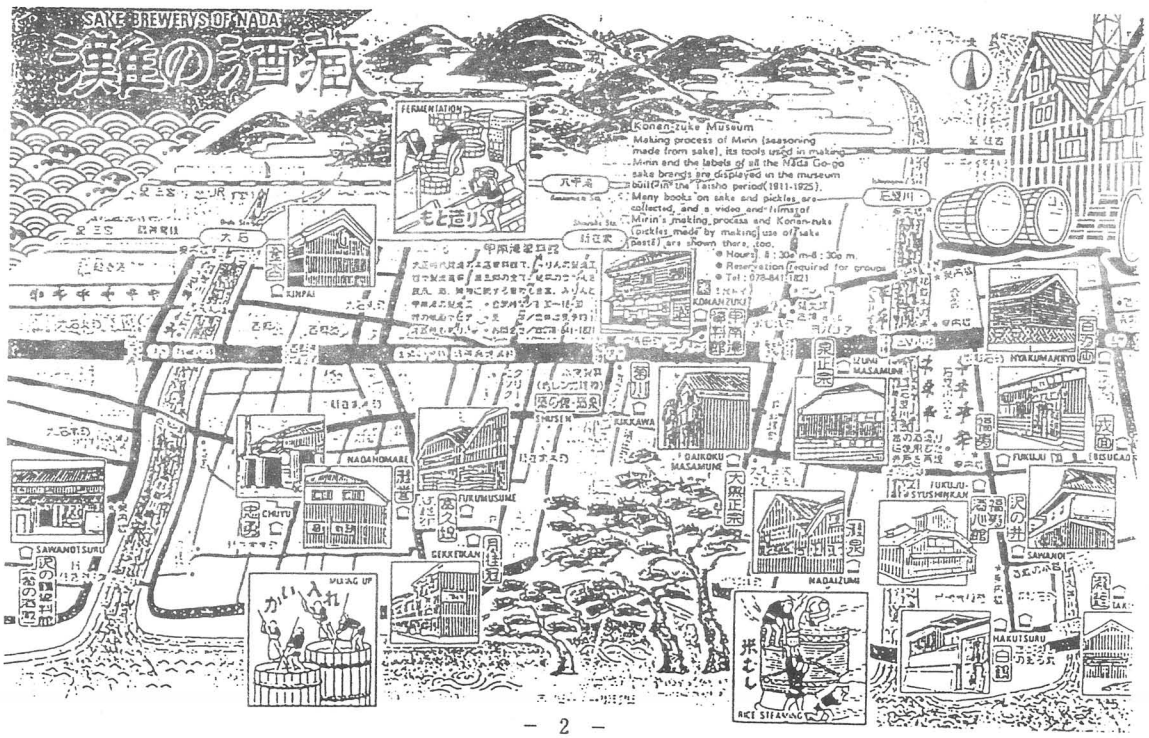
沢の鶴大石蔵位置図

震災と灘　酒処の灘と一言にいってもその範囲は広く、東から「今津郷」、「西宮郷」、「魚崎郷」、「御影郷」、「西郷」の五郷を総称したものです。現在の市の区域では、今津郷・西宮郷が西宮市、魚崎郷・御影郷・西郷が神戸市になります。

沢の鶴大石蔵のある一帯は、その中の西郷と呼ばれる地域です。都賀川を中心として両岸に酒蔵があり、現在沢の鶴のほかには忠勇・富久娘・金盃・灘誉などがありますが、昔はもっと多くの酒蔵があったと考えられます。

しかしこの度の震災で受けた酒蔵の被害は大きく、昔の酒蔵の町並みが残っていた場所はほとんど壊れてしまいました。





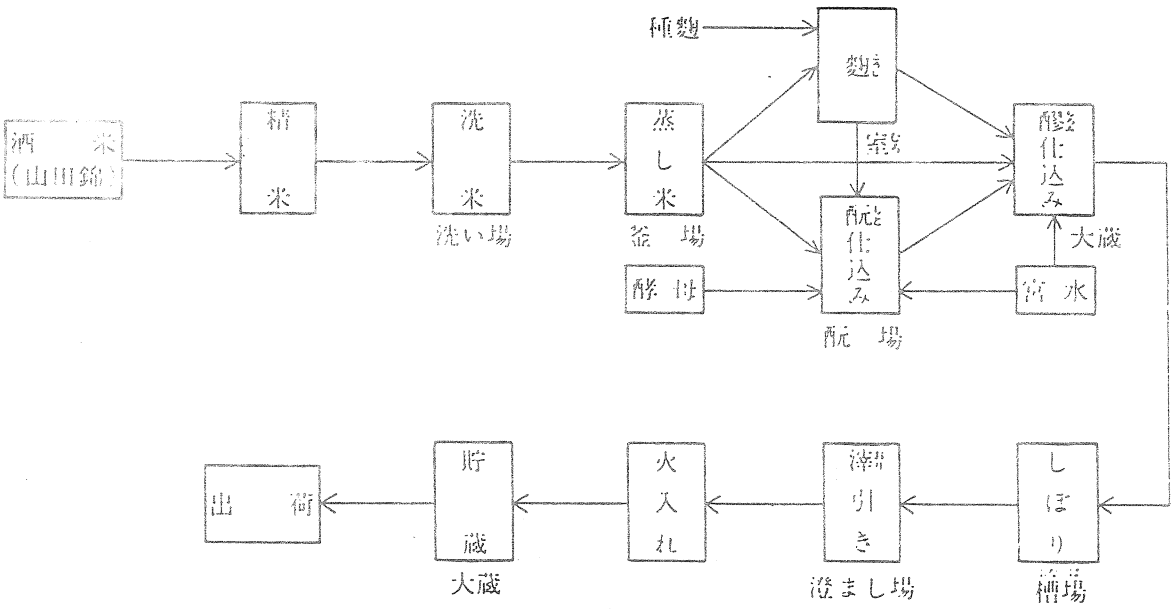
調査の概要　発掘調査では、酒蔵の建て替えや増築、酒蔵内部の改修が何度も繰り返されている状況が明らかになりました。

確認した遺構には、どろどろの状態の「醪（もろみ）」から、液体の酒を搾りとる作業場の「船場（ふなば）」があります。船場（ふなば）は「前蔵（まえくら）」と「大蔵（おおくら）」でそれぞれ１ヶ所ずつあり、酒蔵の床面より低い地下室の状態になっていました。船場（ふなば）かどうか明らかにはなりませんでしたが、ほかに地下室が前蔵の北西角、前蔵の南外側、大蔵の中央でそれぞれ１ヶ所ずつありました。

これらのほか、石垣の積み直し、船場（ふなば）の補修、床土の貼り直し、礎石の据え直しなど、予想以上に複雑に、何回も何回も手が加えられていることが判明しました。

酒造りと船場（ふなば）　米を磨き、上質の水と蔵人の技術でかもしだす日本酒は、日本が誇る文化と言えるでしょう。ここでは詳しい酒造りの工程は省略しますが、船場（ふなば）について説明します。

船場（ふなば）には「渋袋（しぶくろ）」に詰めた醪を積み重ねる「酒船（さかふね）」と、搾った酒を受ける「垂壷（たれつぼ）」があります。酒船（さかふね）は、「男柱（おとこばしら）」で支えられる「はね棒（ぼう）」に重い石を縄で引っかけ、その重さで酒を搾ります。しかし時代が新しくなるとジャッキや水圧で搾るようになります。今回確認した船場（ふなば）には、酒船（さかふね）と垂壷（たれつぼ）が２セットずつありました。これらは搾り工程の差の「揚船（あげふね）」と「責船（せめふね）」にあたるものと思われます。



昔の酒造り　（沢の鶴資料館パンフレットより）

前蔵北隣別棟

船場

地下室

地下室

井戸覆屋・釜屋？

地下室

前蔵

地下室

船場

0　10　m

大蔵

調査区平面図

沢の鶴資料館平面図

（土地面積約1,000㎡）

非常口

大桶

酒槽

道具類

酒聖円坐

UP

釜場

洗場

樽前遊舞

喫茶コーナー

受付

W.C

入口

ハネツルベ

1階

（面積583.477㎡）

入口

室

吹抜

非常口

DN

酒器類

酛場

吹抜

樽回船

小道具類

ビデオ

2階

（面積415.233㎡）

（沢の鶴資料館パンフレットより）

建物の変遷　今回の発掘調査で明らかとなった建て替えや増築、改修などをまとめると、大きく５つの時期に分けることができます。

(1)　天保(てんぽう)10年（1839年）？～明治時代頃

ここに初めて酒蔵が造られた時です。それ以前は畠でした。

(2)　大正時代頃～昭和13年以前

阪神大水害の時には前蔵(まえくら)・大蔵(おおくら)の他にも建物がありました。前蔵(まえくら)には船場(ふなば)があり、大蔵(おおくら)には地下室がありました。

(3)　？

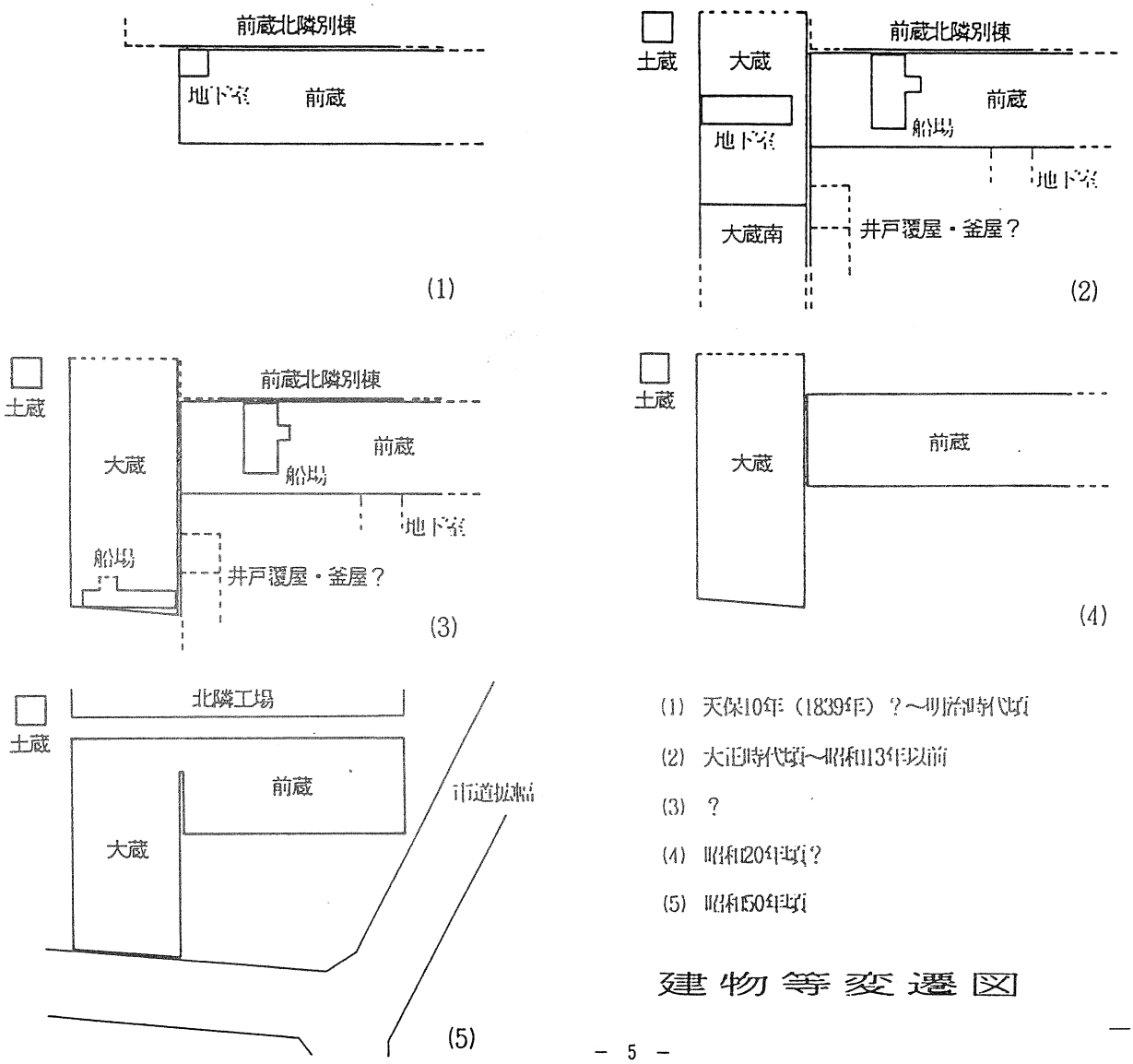
大蔵(おおくら)の南を増築し、船場(ふなば)がありました。地下室は壊されました。

(4)　昭和20年頃？

前蔵(まえくら)・大蔵(おおくら)の船場(ふなば)が埋められ、周囲の建物が解体されました。

(5)　昭和50年頃

前蔵(まえくら)の東端、大蔵(おおくら)の北端が解体されて短くなりました。さらに蔵と蔵の間をつなげました。



(1)　天保10年（1839年）？～明治時代頃

(2)　大正時代頃～昭和13年以前

(3)　？

(4)　昭和20年頃？

(5)　昭和50年頃

建物等変遷図

柱の墨書　倒壊した資料館から展示していた資料を取り出しているとき、折れた柱に墨で文字が書かれているのが新たに発見されました。それが下の写真です。柱を補修したとき、材木をつぎ合わした面に書かれていたため、今まで見つかりませんでした。天保（てんぽう）１０年（1839）の文字が読めます。酒蔵の棟札（むなふだ）ではないこと、酒蔵の建て替えのとき、別の場所からつぎ合わされたまま材木として持ってこられたケースもあることから、大石蔵が建てられた年代をただちにきめることはできません。しかし天保（てんぽう）１０年に建てられた可能性を示す資料です。

天保10年銘墨書

天保十亥歳
四月十四日改
細工人五社□□
小野定□（ーさカ）

酒搾りの様子　現在、酒搾りは機械化されているため、なかなか人力での酒搾りの様子は想像できません。わずかですが、その様子がわかるものを集めてみました。かなりの人手と手間と時間がかかる、大変な作業であったことがわかります。ですから、どんどん機械化が進み、今では人力での酒搾りは残っていないのでしょう。

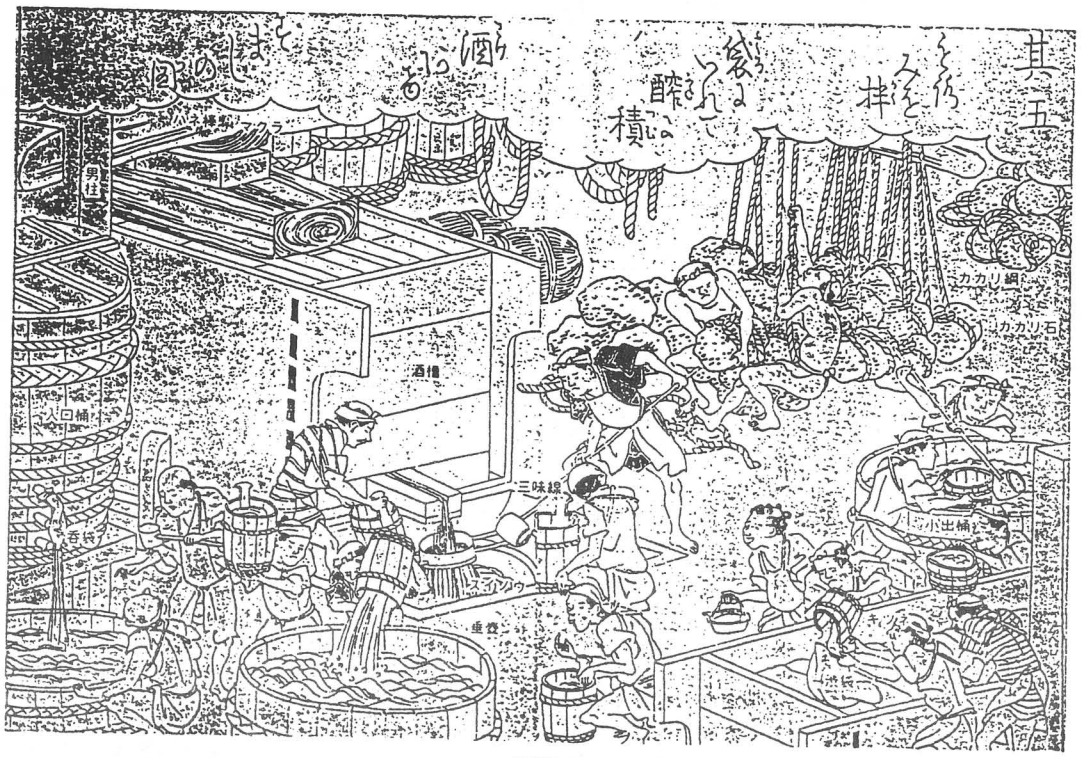
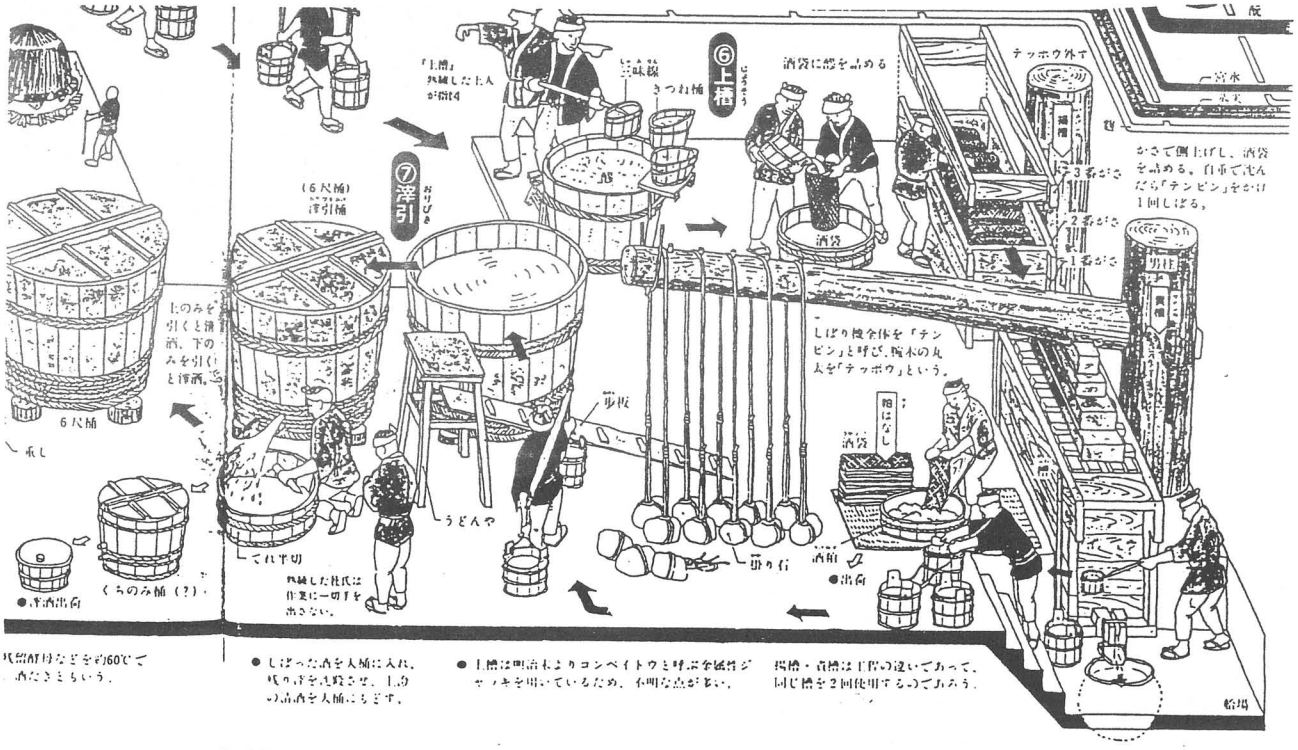
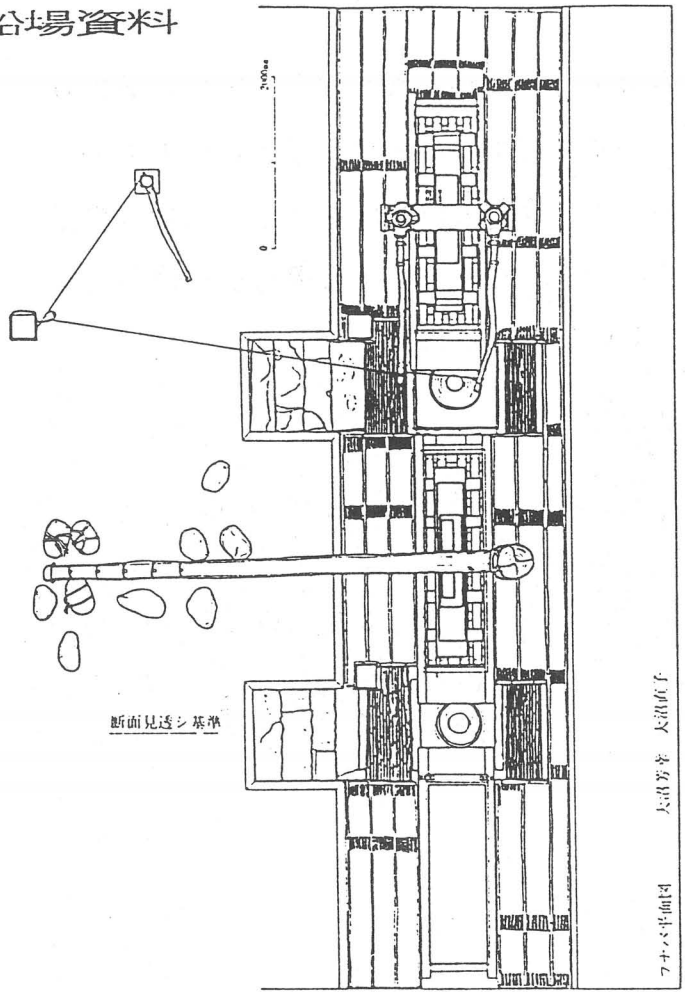


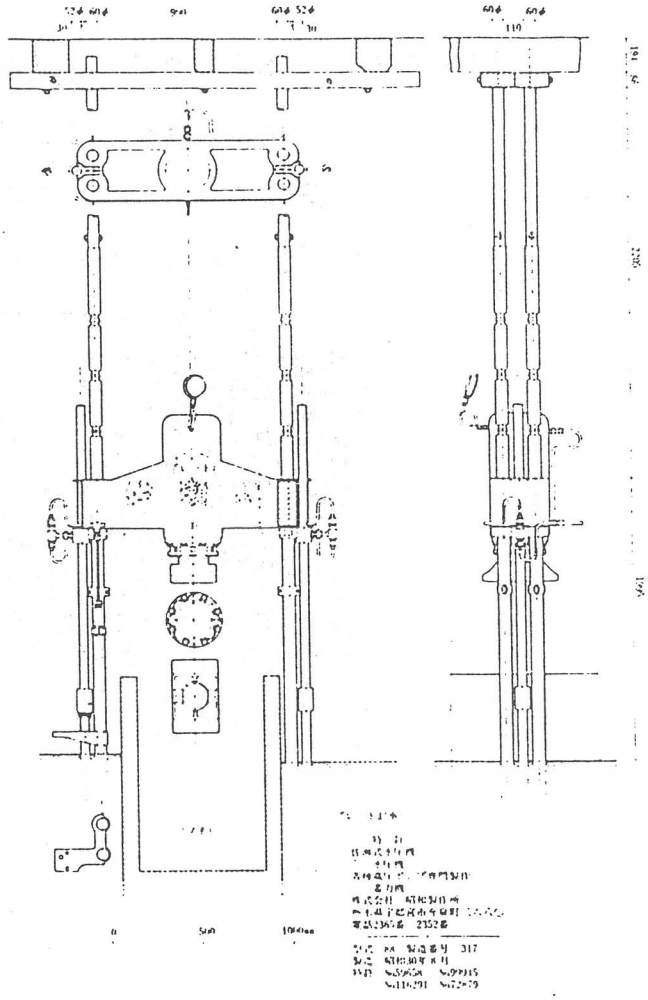
写真42　しぼりと澄まし(『日本山海名産図会』より)

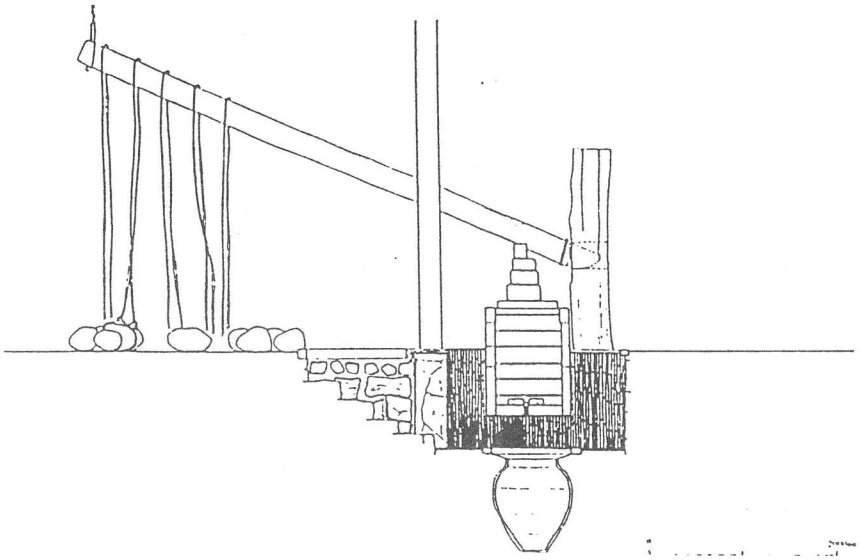


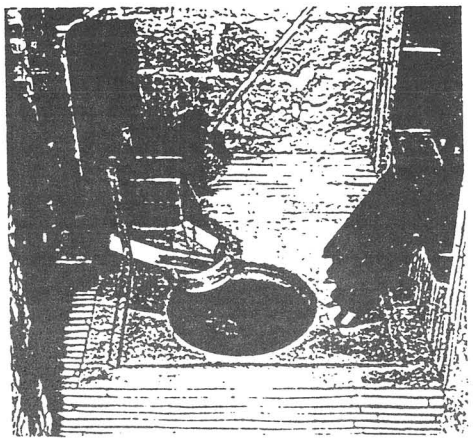
大林組『季刊大林No.３７　灘五郷』１９９３年　より転載

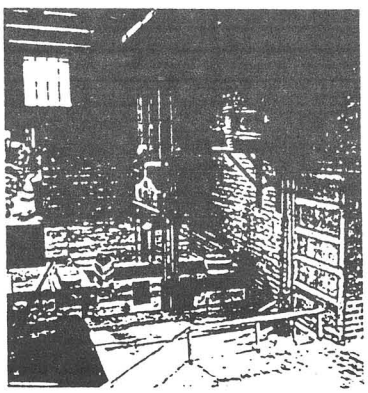
船場資料











西宮市教育委員会　㈶白鹿記念酒造博物館
『文化財資料・第３７集　灘の酒つくり』
１９９２年3月３１日　より転載

ま　と　め　今回確認した船場(ふなば)は、酒船(さかふね)のすえていた場所が復元できるほか、垂壷(たれつぼ)、男柱(おとこばしら)、ジャッキを回す棒である「てこ」の礎石などがそろっており、酒搾りの様子を再現することができます。また、搾る方法が、男柱(おとこばしら)からジャッキや水圧式に変化した状況がわかるたいへん良い資料です。

機械化される以前の酒搾りの様子がわかるものは、現在ではほとんどありません。大正時代頃以降のものですが、現在の酒蔵でほとんど見かけられなくなっていることを考えると、酒造りの歴史上、たいへん貴重なものといえるでしょう。今後、灘の酒蔵の発掘調査が増えていけば、灘五郷のなかでの船場(ふなば)のちがいなどがわかってくることになるでしょう。

前蔵(まえくら)で確認した船場(ふなば)は、沢の鶴株式会社のご好意で、平成１１年に再開（予定）となる沢の鶴資料館内で見学できるよう、計画が進んでいます。再開となったあかつきには、また一度足をお運びください。

表紙は、昭和１０年頃の沢の鶴株式会社の醸造場の配置を絵であらわしたものです。実際の配置と比べると、少し変えてある部分もあります。（沢の鶴株式会社所蔵）

今回の調査では、下記の機関ならびに方々からご指導、ご協力をいただきました。

文化庁

兵庫県教育委員会

大手前栄養文化学院助教授　川口　宏海先生

伊丹市教育委員会生涯学習部社会教育担当　小長谷　正治主査

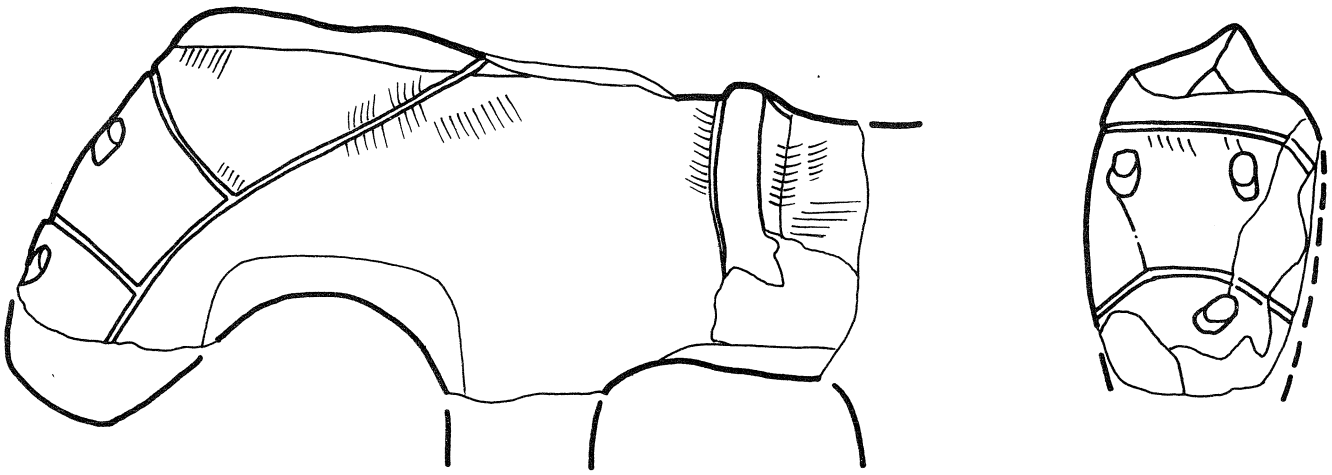
沢の鶴株式会社　酒井　正司顧問

沢の鶴株式会社

株式会社大林組

住吉宮町遺跡（第23次調査）

現地説明会資料



1997年1月25日(土)

神戸市教育委員会

住吉宮町遺跡（２３次調査）

遺跡説明会のしおり

１９９７年1月２５日（土）

神戸市教育委員会

はじめに

住吉宮町遺跡は、神戸市東灘区住吉宮町にあります（図１）。この場所は、六甲山麓から流れ出る住吉川と石屋川が洪水などで運んできた土砂が積もってできたゆるやかな南向きの斜面（扇状地）となっています。

この住吉宮町遺跡の広がりについては、ＪＲ線～国道２号線間を中心とし、東を住吉川、西を古い川が氾濫した跡と思われる浅い谷のような低地で区切られる、東西約０．７kmと考えられています。また、遺跡の広がるゆるやかな斜面が、現在の国道２号線から南へやや下った所で急に低くなっていることから、これが遺跡の南の境と見られます。この「境」については、縄文時代の海によって削られた（浸食）ライン、つまり縄文時代の海岸線の跡（いわゆる「縄文海進」）と思われます。

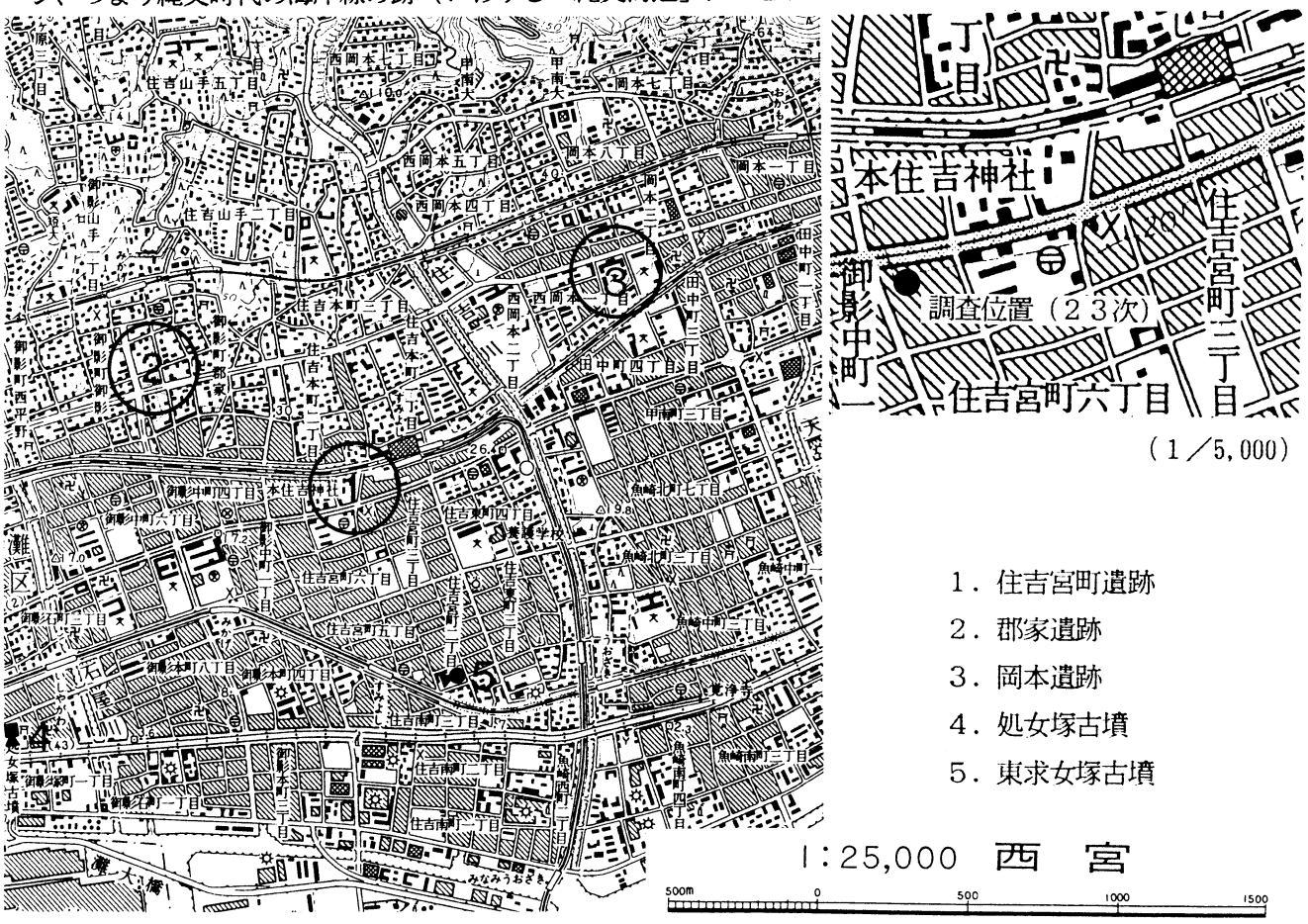


図１　遺跡の位置

これまでの発掘調査

住吉宮町遺跡は、今回の調査を入れて今までに２３回にわたって発掘調査が行われています。その結果、弥生時代中頃から竪穴住居（地面を掘り下げて床をつくる建物）・水田や、方形周溝墓（棺のまわりに溝を四角くめぐらせた墓）などが営まれはじめ、古墳時代には現在のＪＲの線路周辺から国道２号線にかけてのあたりを中心に、たくさんの古墳がつくられるようになり、その周辺には竪穴住居や水田もあったことがわかっています。

そして、続く奈良時代・平安時代以降も掘立柱建物（地面に柱を埋める穴だけを掘る建物）や井戸、水田などがつくられていますが、この間には何回も洪水によって土砂で深く埋まったり、あるいは削り取られたりしています。つまり、住吉宮町遺跡では、人の生活した「面」が洪水などで埋まりながら何面も重なっているのです。

このように、これまでの発掘調査によって、住吉宮町では弥生時代から中世・近世まで、洪水などの自然災害を受けながらも連綿と人々がこの地に住み続けていたことが明らかとなっています。

今回の発掘調査について

今回の２３次調査は、現在予想されている住吉宮町遺跡の広がる範囲の南西端近くで民間マンションが建設されることになったため、これに先立って行われるものです。

ただし、今回の調査は「震災復興」にともなうもので、建設予定の建物の基礎によって壊される（掘り下げられる）部分のみを調査しています。したがって、今回は奈良時代の面と、一部建物基礎が深くはいる部分で古墳時代の面まで掘り下げて調査しました。

調査の成果 —— 地震で壊れた井戸を中心に・・・

1　遺構について

今回の調査では、奈良時代の面を中心に調査しました。その結果、掘立柱建物跡あるいは柵のものと思われる柱穴のならびが2列（ＳＢ・ＳＡ８）と井戸跡（ＳＥ６）、西岸に護岸のためと思われる杭を打ち込んだ自然流路１本（ＳＤ４）、調査中は自然流路が氾濫して、えぐられたためできたと考えていた落ち込み（ＳＤ５）が調査されています（図２）。

この中で、井戸跡（ＳＥ６）はたいへん興味深い状態で出てきました。

井戸跡は、まず最初に円形の穴（掘り方）を地下水の出る砂の層まで掘り下げてから、その中央に長さ約１２０cm・幅約３０cm～６０cm・厚さ約4cmの木板を四角に組んだ枠（井戸枠）をすえて、そのまわりを埋めもどしています。ところが、その井戸枠の上半分が南に倒れ込んだ状態で出てきたのです（図３）。さらに調査が進むにつれて、今度は井戸の掘り方も井戸の上半分と底部で水平方向に約２ｍほどずれて、くい違っていることもわかってきました（図４）。

この井戸枠のこわれ方やずれ方から見て、井戸の上半分全体がかなり強い力でいっきに南の方向に押し出されたことをうかがわせています。そして、井戸のまわりの地盤もいっしょに動くような強い力とは、「地すべり」と考えられます。

それでは、この地すべりの原因は何だったのでしょうか。地すべりした層の下はあらい砂の層となっていますが、その砂が上にふき出そうとした「噴砂」が認められるなど、「液状化現象」をうかがわせてい

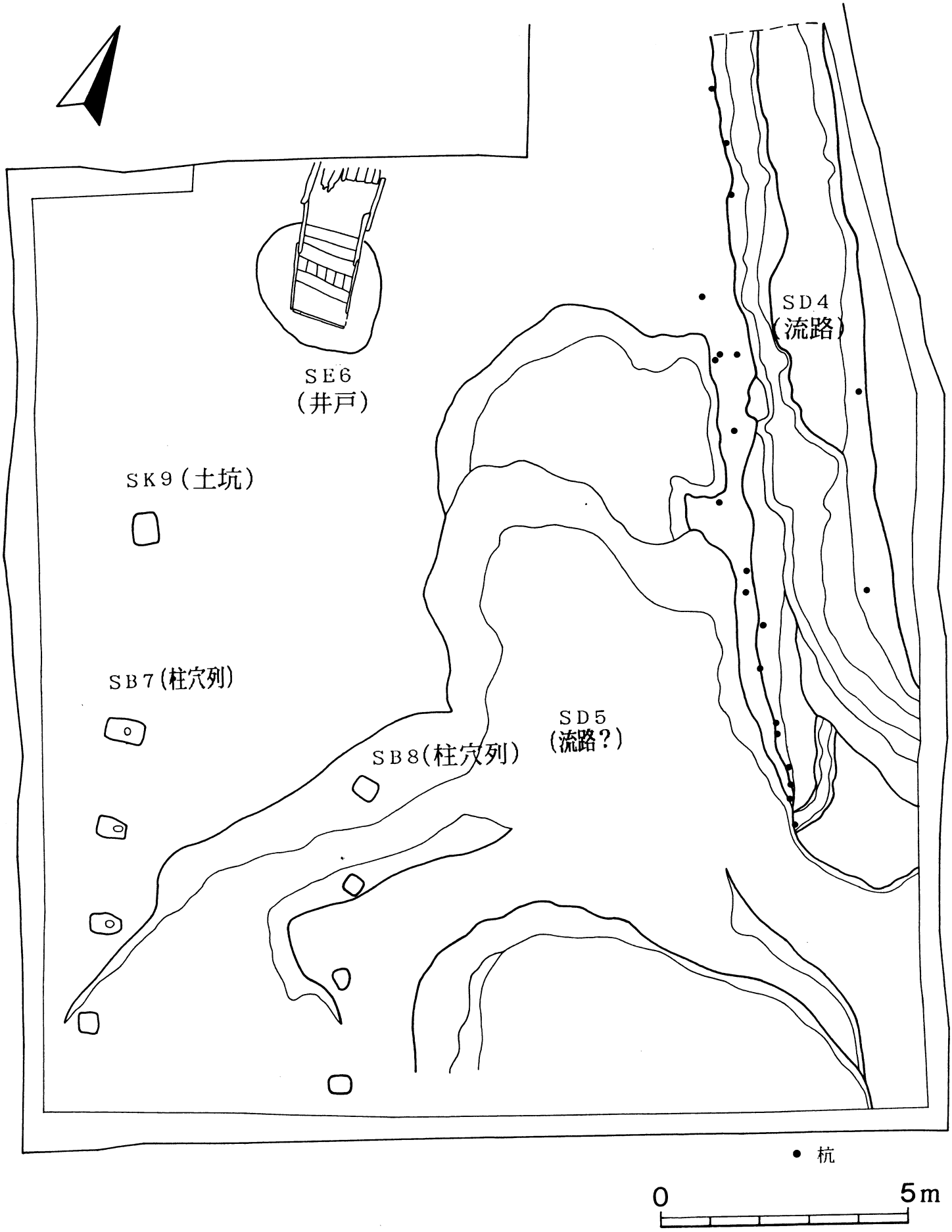


図2　奈良時代遺構配置図

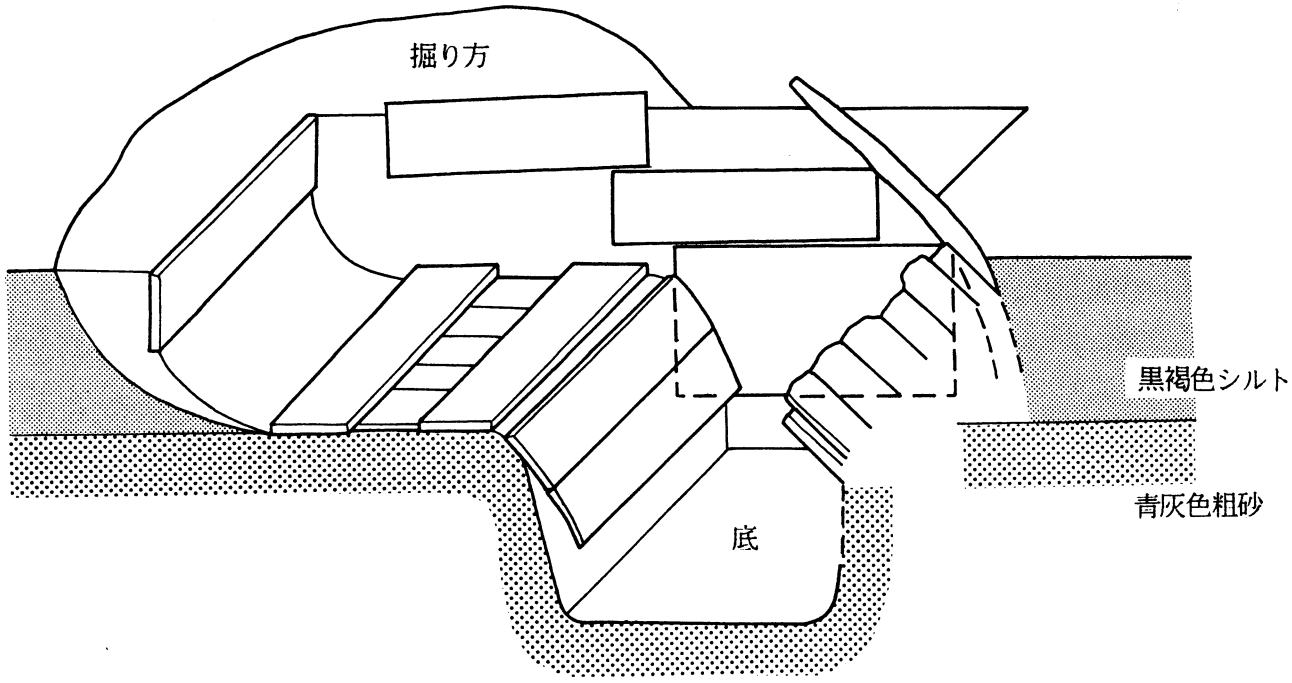


図3　井戸枠出土状況模式図

ます。このことから、地すべりは地震、それも地盤が液状化をおこすほどはげしい地震によるものと考えられます。

1　遺物について

遺物は、主に流路（ＳＤ４・ＳＤ５）を中心に多数出土しています。その内容は、古墳時代から奈良時代までの土師器・須恵器を中心にたこつぼ、土錘（土製の網などにつけるおもり）のほか、埴輪片もかなり出土しています。また、ＳＤ５からは鞍や手綱もあらわした土馬（土製の馬のミニチュア）が１点出土しています。

井戸跡からは、倒れた井戸枠の間から完全な形の土師器の坏や漆塗りの木製鉢が出土していますが、土師器には「橘東家」と墨で書かれていました。

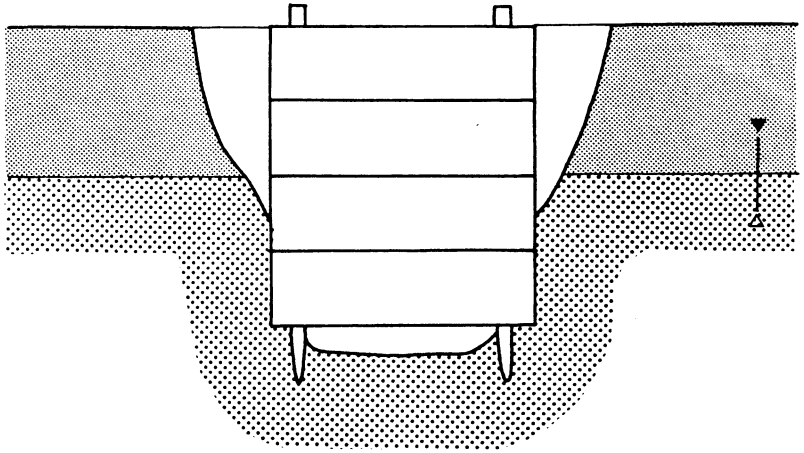
なお、遺構の中から出土したものではありませんが、調査区の北東部において奈良時代～平安時代のものと思われる瓦（平瓦）の破片がややまとまった点数出土しているほか、円面硯（すずり）の破片も出土しています。

おわりに

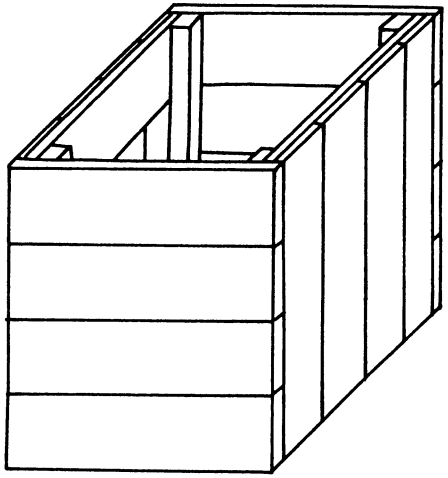
今回の調査では、地震による激しい震動による液状化現象に伴う地すべりで地盤が水平方向に約２ｍずれたことを非常にわかりやすく、目に見える形で検出することができました。

奈良時代以降、この地域でこのような地すべりをおこす大規模な地震としては、１９９５年の地震をのぞいて伏見地震しか知られていません。

この資料は、当時の地震の実態を知るだけでなく、今後地震災害全体を研究する上でも重要なデータとなるでしょう。



本来の井戸の姿



井戸枠の構造

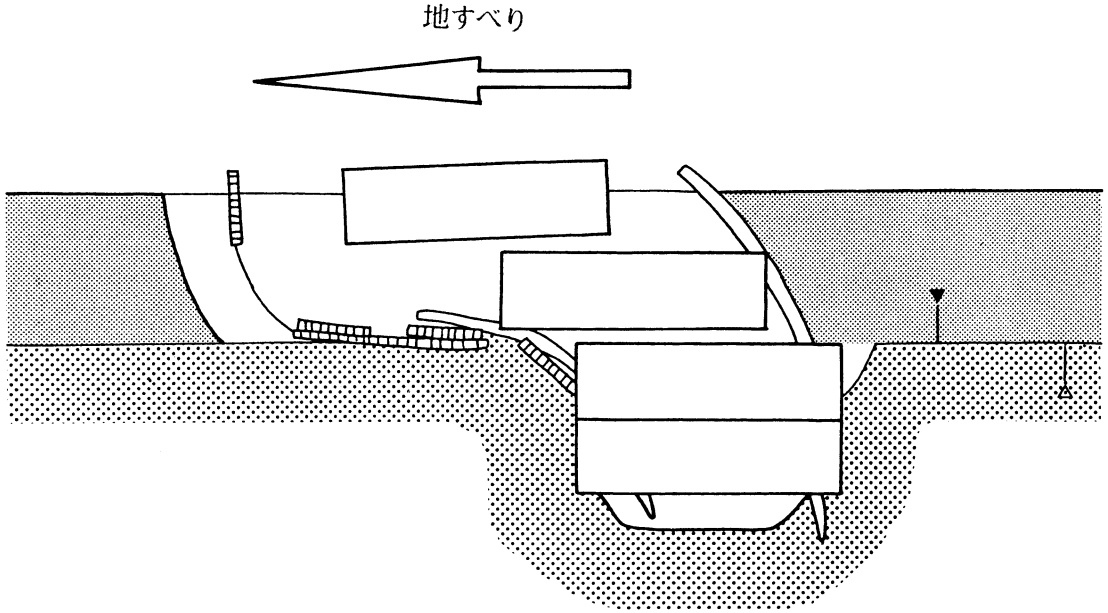


図4　井戸のこわれかた（模式図）

松野遺跡

—第4次調査—

現地説明会資料

平成9年2月2日

神戸市教育委員会